
遼州戦記 保安隊日乗 6

橋本 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遼州戦記 保安隊日乗 6

【Nコード】

N6056J

【作者名】

橋本 直

【あらすじ】

法術と呼ばれる魔法を使う人々の暮らす星『遼州』の経済大国『東和』。そこで次々と起こる法術師を操って起こる些細な事件。その事件を追っていく『遼州同盟司法局』通称『保安隊』。その捜査の中で次第に隊員の神前誠達は法術に対するゆがんだ社会の摂理と大国やテロ組織の不気味な思惑を知ることになるのだった。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン）

1

いきなり西園寺要大尉が升酒を噴出したので、神前誠しんぜんまことは思い切り動揺した。そして噴出した酒が目の前のどうにも堅気とは思えない目つきの恰幅のよいG Iカットの親父に向けて吐き出されただけに一瞬逃げ出したい気持ちになった。

「どうしたのよ……要ちゃん」

紺色の花柄模様の振袖が似合いすぎる紺色の長い髪をなびかせるアイシャ・クラウゼ少佐の言葉に誠も我を取り戻した。軍用の義体のサイボーグであり、東都戦争と呼ばれるシンジケート同士の抗争劇の中心に身をおいていた彼女が迫力は十分とはいえただの高市の香具師にひるむはずも無かった。

「姐さん……突然吹かないでくださいよ」

顔面に思い切り日本酒を吹きかけられてもその親父さんにはこやかに笑って舎弟が差し出す手ぬぐいで顔をぬぐい始めた。ことの発端を作ったのは赤い色の扇の文様の振袖を身に纏った要。四年前まで『胡州の山犬』と呼ばれて恐れられたサイボーグも今では誠の所属する遼州同盟の司法実力部隊である『遼州保安隊』の一パイロットとして勤務している。そして神前誠の上官として東都明神の祭りが見たいと案内を頼んだのも彼女だった。そして出店の中でもそれなりに風格がある面々が要を見るたびに何か恐ろしいものを見てしまったと目をそらす様を見て誠はただ申し訳の無い気分一杯になった。

「すまねえなあ。ウケル話が届いちやって……」
「たく酒がもつたいねえよな」

要はそう言う空になった升を額をぬぐい終わった親父に差し出す。親父も要の話に興味があるものの一応司法執行機関の大尉と言う境遇の要に話を持っていくのは遠慮しているらしく黙って升に酒を注いだ。

「さすがに西園寺だな。まだ飲むのか？」

緑色の若葉を模した文様がエメラルドグリーンの髪に映える細身の女性。カウラ・ベルガー大尉もまた要が酒を飲み始めてからもう二十分が経っているのに呆れながら同僚の飲みっぷりを眺めていた。

「ふう、だってよう」

ようやく升を置いてカウラに向き直る要に大きく安心のため息をつく親父の表情に少し笑みを浮かべる誠に話を切り出そうとする要。それを見ながら誠は改めて自分がスタジャンにジーパンと言うありきたりな冬の服装をしていることに気づいて苦笑した。

「だって何も無いでしょ？本当にすみませんね、暴力馬鹿の誰かさんに酒を盗まれた拳句顔に吹きかけられるなんて……」

アイシャが親父に頭を下げるのを見てカチンと来た要がアイシャの長い髪を引っ張る。

「痛いじゃないの！」

叫ぶアイシャに少しばかり酔っているのか印象的なタレ目で要は長身のアイシャを見上げた。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン）

2

「痛くしてるんだよ！」

そう怒鳴る要をカウラが押しとどめる。要の手が離れて何とか呼吸を整えるアイシャ。そして誠はいつの間にか回りに人垣ができているのにただ啞然として立ち尽くしていた。

「それより西園寺。突然噴出す原因くらい教えてくれてもいいだろ？」

カウラの一言。一応要と誠を部下として巨大人型兵器、アサルト・モジュール部隊の隊長を務めているだけあつて落ち着いて原因を突き止めることに決めたような鋭い調子で言葉が放たれる。

「そりゃあ……まあ……ちょっと待てよ」

要はそう言うのと手の巾着を開く。中から携帯端末の画像投影用のデバイスを取り出し、それから伸びるコードを首筋のジャックに差し込んだ。

「便利ね。さすがテレビ付き人間」

サイボーグの体を気にしている要に言っではいけない暴言を言うアイシャだが、とりあえずカウラと誠、そして周りの野次馬達の間にも有るので睨み付けるだけで作業を続けた。

『こちら福岡です』

画像にアナウンサーが映ったのを見ると周りの人々の視線も集まる。ただのテレビの画像を見せられたことで少しばかりカウラは呆れたような顔をしていた。

「西園寺さん……これのどこが……」

誠は噴出するような内容がありそうに無いテレビ番組を見せられたので少しばかりがっかりしながら周りをちらちら眺めている要に尋ねようとした。

「ちよつと落ち着いて待つてろよ……もう少し前かな？」

そう言うのと画面が高速で逆回転して行く。そして学校の入学式の

ような雰囲気映像が映ったところで画像は止まった。

「……魔法学院の……」

「魔法！魔法学院！出来たの？そんな素敵な学校が出来たの？」

それまで野次馬を見回しながら要の行動を黙殺していたアイシャがハイテンションで叫んだ。誠とカウラはそのやたらとうれしそうな表情を見て目を見合わせる事になった。確かに要が噴出すはずだと納得して頷く誠を見ながらまだ理解できずにいるカウラに目を向ける。

「まあ……変な名前と言うことで」

誠のフォローにもカウラはまだ一つ乗れないように首をひねっていた。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 3

「うるせえなあ……もう少し落ち着けよ」

アイシャの食いつきに呆れたように要は言つと画面を拡大する。そこには遠く離れた地球の日本の街の一隅にある学校の校門が映し出されていた。誠達はその中の学校の校門の横の石碑に刻まれた文字に目をやった。

「『東福岡魔法学院』……？『魔法』？」

ぼんやりと繰り返すカウラ。アイシャはついに口を押さえて大爆笑を始めた。

「アメリカさんは法術をマジックと呼んでるからな。和訳したら『魔法』だろ？」

「ああ、そうですね」

思わず腹を押さえて二つ折りになっているアイシャに周りの視線が痛いほど突き刺さるのを見ながら誠はそうつぶやいた。

「……可らしい！じゃあこの学校の生徒はみんなマントに杖を持つているわけね！ファンタジーよ！ファンタジー！誠ちゃんも入学したら？」

「ばかばかしい」

上機嫌のアイシャの言葉をあつさり斬って捨てるカウラ。それでもアイシャの笑いは収まらなかった。

「神前はあと最低二年は必要だな、ここに入学するには」

「え？そう言う条項があるんですか」

「だってお前童貞だろ？今は23歳だから……25になるまであと二年。がんばれよ、菰田に負けるな！」

要の得意げな顔に誠は頭を掻きながら視線を画面に移した。その様子がおかしかったらしく今にも半分に折れそうな様子でアイシャは爆笑を続けていた。

「日本には遼州系の人間も多いからな。恐らくそのことをにらんで

神前が法術の存在を示した『近藤事件』以前に準備は進んでいたんだろうな」

一人冷静に画面を見つめるカウラ。さすがにそんなカウラも見るとアイシャも笑いに飽き、要が再び升酒をあおり始めると周りの野次馬も興味を失ったように散っていった。

「しかし『魔法学院』はないだろ……誰かこのネーミング止められなかったのかね」

ニヤニヤしながら要は画面の中の看板に目をやっていた。

「名前が重要なんじゃない。むしろその中身が大事なんじゃないのか？一応私立の学校という話だが設立に当たりいくつかの在日アメリカ軍の外郭団体から金が流れているらしいからな。実際は米軍の法術師養成機関と考えるのが妥当だろう」

「なんだよ、カウラは知ってたのか？」

まるで自分の見つけたネタを馬鹿にされたように要が頬を膨らませる。それを見てアイシャもようやくおちついてきたというように口元を引きつらせながら立ち上がった。

「なるほどねえ、さすがカウラちゃんは勉強熱心でいらっしゃる」

「貴様等が仕事をサボることばかり考えているからだ」

そう言うとかウラはそのまま参道を歩き始めた。要は升を男に返すとその後が続く。

「でも僕も思いますけど『魔法学院』は無いと思うんですけどね……どう見てもやはりファンタジーの世界ですよ。人間が宇宙に飛び出してからの名前とは思えないじゃないですか」

まるで自分が仲間はずれにされていたとも思っているようにすたすたと歩いていくカウラの後に誠もついていく。要もアイシャもその後ろからいつかカウラをからかおうというような様子で歩いていた。

「まあ東和警察だって警察学校に法術部門を立ち上げたからな。今のところは東都条約の規定により法術の軍事的使用にはさまざまな規制がかかっている……」

「一応はね。でも実際それを守るかどうかとなると別問題でしょ？」

アイシャはそう言うとき誠の手を引いて走り出す。

「なんですか！」

「何ですかって言うことは無いんじゃないの？せつかくの正月休み。

初詣ならもつと明るい気分ですごししょうよ！カウラちゃんはまだじめすぎ！もつと楽しまなくっちゃ！」

「……で？そうすると何でテメエ等が手をつなぐんだ？」

明るく誠の手を引こうとしたアイシャの手を要は叩いて離させた。

「なによ！」

「なによつて何だよ！」

いつものように要とアイシャがにらみ合いを始めた瞬間。誠は強烈な違和感を感じて立ち止まった。

「どうした？」

要が声をかけるが誠の心臓の鼓動は早くなるばかりだった。そしてその原因が自分の領域に一つの力が介入してきていることが原因だとわかって要に説明しようと顔を上げた。だが言葉が出なかった。

「おい、大丈夫か……カウラ！神前が変だぞ」

ひざまずいて震えている誠を要が何とか助け起こそうとするが誠の意識は要もそしてその言葉を気にして近づいてきたカウラやアイシャにも言っていないかった。

圧迫されてゆがむような視界の中、絵馬が並んでいるのが見える。人々はそれぞれ手に絵馬を持って和やかに話をしているのが見えた。だが、その中の中学生くらいの振袖姿の少女が急に足を止めたのを見て誠は立ち上がるとした。

「昨日はコミケで大活躍だったから疲れてるんじゃない……」

そう言ってアイシャがそう言って手を差し出した瞬間だった。

一瞬誠の意識が飛んだ。そして一斉に参拝客が眺めていた絵馬に火が入った。乾燥した木の燃え上がる炎に人々が驚いたように悲鳴を上げる。

「なんだ！」

驚いて振り返る要。カウラはあたりを見回し防火水槽を見つけて走り出した。

「ちよつと！何よ！テロ？テロなの？」

アイシャはしばらく叫んだ後、火の粉が移った人達に近づいて自分の紺色の振袖を振り回して火を消そうとしていた。

「おい、誠！」

「パイロキネシスト……発火能力者です」

ようやく何物かの介入がやんで力が入るようになったひざで参道の中央に立ち上がる。そしてその誠の様子を確認すると要は慌てて

駆けつけてきた警備の警察官に自分の身分証明書を見せた。

「保安隊？法術事件ですか？」

驚いた太り気味の警察官はしばらく哑然とした後、周りを見回した。防火用水の隣のポンプを使ってカウラが近くの客達に助けられながら放水を開始している。

「法術犯罪の可能性がある。すぐにこの場にいる人物の身柄の確保を始めてくれ」

要の言葉に警察官と飛び出してきた町会の役員達が大きく頷いて走り始める。その様子を見送った後、誠は大きく息をしてそのまま消火活動中のカウラに向かって駆け出していった。

「神前！ホースを！」

放水の為にポンプを起動している町会の役員達と共にカウラが叫んでいた。その振袖には火の粉がかかり、一部が焼け焦げているのも見える。誠はカウラからホースを受け取るとそのまま延焼し始めたお堂にホースを向ける。

「行けます！」

誠はじつと筒先を構えるとすぐに大きな反動が来てその先端から水がほとばしり出た。周りの人々が逃げる先には警察官に混じってちぎった袖で誘導をしているアイシャの姿もある。誠はそれを確認すると安心して燃え盛るお堂に放水を続けた。

「大丈夫か？」

応援の警官隊の配列を終えた要が何とか慣れない放水をしている誠に手を伸ばしてきた。

「本当に狙いを定めるのが苦手だな、お前は」

そう言って誠からホースを奪い取ると火の中心に的確に放水をする要。ポンプの設定が済んだカウラも顔中墨に塗られた状態で力が抜けて倒れそうになる誠を何とか支えた。

「大丈夫か？さっきはお前にも何かあつたんだな」

カウラの言葉に力なく誠は頷いた。

「パイロキネシストの力の発動を感じました」

「そうか！」

目の前ではほとんど鎮火してきたお堂に水を撒く要の姿がある。そして避難の誘導の為警官隊を指揮していたアイシャも誠達の所に戻ってきていた。

「ああ、これじゃあまた要ちゃんに買ってもらわなきゃね」

そう言つとちぎった袖をひらひら振りながら必死に高圧の水圧のホースにしがみついている要に見せびらかす。要はちらりとアイシ

ヤを一瞥したが、任務に忠実に無視して放水を続けていた。

「容疑者は特定できたのか？」

「一応近辺にいた人達は警備本部でお待ちいただいているわよ。パ
イロキネシスなんて珍しい能力だものすぐに犯人は特定できるわね
……それにしても馬鹿な犯人ね。こんなに人がいるところで発動さ
せて誰にも気づかれないとも思ったのかしら」

アイシャはそう言うとうとうやく町会の若者にポンプを任せて近づ
いてくる要の前でポーズを取った。

「緊急避難的処置だからな。あとで弁償してやるよ」

肩を落しながら要のたれ目がさびしそうにアイシャをにらみつ
けていた。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 7

「あんなに泣いてたら取調べにならないだろうが・・・」

要はそう言いながら借りた皮のジャケットに袖を通していた。東和東都南城警察署の取調室の隣の部屋。マジックミラーで誠が中を除き見れば振袖姿の少女が取り調べの警察官の前で泣き続けていた。「でも彼女以外パイロキネシス能力の適正のある人物はいなかったんだから……ああ、要ちゃんが口から火を吹いたと言う線もあるわね」

こちら袖のちぎれた振袖姿のアイシャがコーヒーを飲んでいる。二人の視線の先の少女が泣きじゃくるのでまるでお手上げと言うような雰囲気の様子を見回してカウラも仕方なくコーヒーをすすった。「他にもいるんじゃないかな……法術適正のあった連中は一通り身元は確認したんだろ？」

「そりやあまあ……でも能力適正が低い人物は簡易検査じゃ引つかからないから」

カウラの問いに答えた要の顔を見ながら誠も頷く。

「なんだよ、アタシの言葉は無視でカウラなら信用するとも言っのか？」

「やめなさいよ要ちゃん」

いつものように食いついてくる要をなだめるアイシャ。誠は再び取調室の中を覗いた。

「感覚的には……この子じゃないと思うんですけど……」

「は？あんな一瞬で建物一つを丸焼きにする能力の法術師だぜ？簡易検査だろうがすぐに引つかかると……」

要の馬鹿にしたような口調に誠は何も言えずに自分のために入れてもらったコーヒーを手に取った。

「知らない……気がついたら火が目の前に広がっていた……となる」と

「能力の暴走の線が有力ですわね」

後ろから声をかけられて驚いて座っていた机から飛び降りる要。

そして彼女の後ろには見慣れた東都警察の制服を着た女性が腕組みをして立っていた。

「何だ茜か？暇なのか？」

「いいえ、要さんとは違って昨日から徹夜ですの」

上品そうにそう言うとそのまま取調室が見えるガラス越しまでやってきて中を覗き込む女性。

要の従妹で誠達の所属する『保安隊』隊長、嵯峨惟基特務大佐の娘である同盟司法局法術特捜の主席捜査官嵯峨茜警視正だった。いつもどおりに表情を変えずに中を一瞥した後ついてきた補佐官のカルビナ・ラーナが手にした捜査器具を取り出した。

「なんだそれ？」

要の質問にラーナは顔を上げるがまるで興味がないというように視線をおろして取り出した器具の制御をする為に端末にコードをつなぐ。

無視されて冷静でいられるほど要は人間ができていなかった。そのままつかつかとラーナに近づいて懷から取り出したコードを自分の首のジャックとラーナの端末に接続する。

「西園寺大尉！困りますよ」

「うるせえ！」

茜は一瞥して困った顔のラーナに頷いて見せて要の情報収集を黙って許した。

「演操術師の特定か……それならつじつまが合うな」

『演操術』と言う言葉を聴いて誠もカウラも目を茜に向けた。

「面倒なことになりそうなのね」

アイシャがコーヒーを口に含んでその様子を眺めている。

「わたくし達が動く事件は大体が面倒なことなのではなくて？」

上品に答える茜にアイシャは手を広げて知らぬふりと言うような態度を示して見せた。

「確かに……今回も面倒なことになりそうだな」

カウラはそう言々と静かにコーヒースすった。

「ふう……」

警察署から見慣れた保安隊の寮までの間、ひたすら所轄の悪口を言い続ける要から開放されて自分の部屋に帰ってくると誠は荷物を放り出して横になった。口ばかりの要だったがクリスマスから正月にかけての実家での要達との馬鹿騒ぎを思い出すとにやけてくる自分が感じられた。

「おい、いいか？」

ドアのところでカウラの声がした。

「どうぞ、開いてますよ」

誠が起き上がるのを見ながらカウラが入ってきた。その細いからだ特徴的なエメラルドグリーンのポニーテールが誠のアニメ関係のグッズが並んだ部屋に違和感を与えた。

「ああ、とりあえずお茶でも飲もうと思ってな……」

手にしたお盆から急須と湯飲みを並べるカウラ。元々そういう気の回りに縁がないカウラの行動が誠には不自然に思えた。

「演操術師を見つけられなかった件ですか？」

誠が渋々そう言つとカウラは視線を手元の茶筒に落としてしまう。演操術。他人の意識を則り操るこの地球の植民惑星『遼州』の先住民『リヤオ』に見られる特殊能力。誠も先日地元のデパートでの通り魔事件でその恐怖を味わったばかりだった。そして誠自身も『リヤオ』のほぼ純血種だということも分かっていた。それを察してかカウラの頬がこわばる。

気分を変えるように誠のフィギュアのコレクションを見ながらカウラが話し始めた。

「三百人の身元を突き止めるので精一杯だ。専門家はその中に容疑者がいる可能性はゼロに近いと……」

「法術の専門家のシユペルター中尉もお手上げですか」

カウラに湯飲みを渡された誠は静かに茶をすすった。保安隊は誠の配属以来法術系犯罪を追うことが主任務になりつつあった。『りやオ』の血を濃く引く誠と部隊長の嵯峨惟基がいる以上、どうしても司法機関の多くも手に負えない事件は保安隊に押し付けるのが当たり前のように思われていた。

「でもそうするとあの容疑者扱いで捕まった娘は……」

「一応彼女の能力を誰かが利用していることがはっきりしない限り釈放はできないだろうな。しばらくは拘留だろう」

カウラの言葉に誠は肩をおろした。パイロキネシス能力は誠やカウラには身近な力だった。カウラが第二小隊の隊長を務めるまでは『保安隊の良心』と言われた穏やかな西モスレム出身のアブドウル・シャー・シン大尉が彼等の指導に当たっていた。その後、彼は部隊の管理部門の責任者を経て故郷で設立される遼州同盟の軍事機構のアグレッサー部隊への転属が決まっいて現在の管理部門の責任者である高梨渉参事と話し合っている姿をよく見かけていたのを思い出させる。

そんなシンが持つ力は発火能力『パイロキネシス』だった。愛煙家だがライターもマッチも持ち歩かずに灰皿を見つけるとタバコだけを持って一服するシンを二人は何度となく目撃していた。

「でも……」

「演操術師と言えば先日の通り魔の時にも出てきた。今回も同じ人物が訓練気分で実行したのかもしれない……」

「訓練気分でやることですか？ あんなことを……」

「やる奴はやるだろ？」

突然のハスキーな女性の声に誠は握っていた湯飲みから視線を上げた。当然のように冬だと言うのにタンクトップと半ズボンと言う姿の要がそこに立っていた。

「寒くないのか？ 西園寺は」

呆れたようにカウラがつぶやく。

「鍛え方が違うんだよ」

そう言いながら遠慮もせず誠の部屋に入ろうとした要を何かが引っ張った。

「鍛えたも何もテメーの体は特注品の軍用義体じゃねーか」

小さな女の子が要のズボンのベルトを引っ張っていた。その後ろにはにんまりと笑うアイシャの姿もある。

「クバルカ中佐」

保安隊副長のクバルカ・ランの登場にカウラは座りなおして敬礼をした。

「おー。別に気にすんなよ。ここじゃーアタシもただの隊員だ」

「そう、じゃあよい子ね」

「頭なでるな！クラウゼ！」

いきがるランの頭をなでるアイシャ。まるでここが準軍事組織の寮だとは思えない光景が展開する。

「で、ちび中佐の言いたいことはなんすか？」

どつかりと胡坐をかいて居座る気が満々の要がランをにらんでいる。その様子があまりにも敵意むき出しなので誠ははらしながら二人を見つめていた。

「実は……内密な話なんだけどな」

ランはそう言うその後ろで立っているアイシャに目をやる。アイシャもその様子を悟って開いたままのドアを閉めた。

「先月の末だ。厚生局からの通知があつたんだが……法術適正の検査基準に間違いがあつたそうだ」

ポツリとつぶやくように小さな上官から出された言葉に誠達は啞然とした。

「間違い？そりゃあ大問題だぞ！下手したら……」

「西園寺。落ち着け、それで？」

大声を上げた要を制してカウラがランの幼いつくりの顔を見つめた。

「確かによー空間干渉や炎熱系なんかの派手な法術の適正は脳波のアストラルパターン分析ですぐに分かるんだが……」

「演操系は見つからないと言うこと？」

アイシャの問いに静かにランは首を縦に振った。

「マジかよ……じゃあ手がかりなんて何も無いじゃないか！そもそもその検査だつて東和じゃ任意だ。それを通つても黒か白か分からないなんて言つたら……」

「同盟議会の議長が飛ぶだろうな」
叫ぶ要をなだめながらカウラはそうつぶやいていた。

「ザル検査。やっぱり厚生局は最初から仕組んでたわけ？」

「クラウゼよー。そこまで厚生局を悪者にするこねーんじゃないのか？」

落ち着いた様子でどっかりとランが腰を下ろした。つられるようにアイシャも誠を囲んで座り込む。

「いわゆる演操系の能力には二種類のパターンが存在するんだ。そしてその研究が始まったのはつい最近なんだ」

「へえ、アメリカさんとかは遼州入植以来の研究でずいぶんたくさん研究してたはずなんだけどな」

「要よー、科学は万能じゃねーんだぞ」

話の腰を折られて口を尖らせながらランは話を続ける。

「演操系って言うことよー。どうしても操る相手の意識そのものに介入して動きを制御すると思うだろ？確かにそう言う能力の持ち主の割合は高けーんだけど……」

「なんだよそれは？操るんだから意識も乗っ取るんだろ？それともあれか？意識はそのまま体だけ動かすとか」

「要ちゃん！その能力欲しい！」

突然叫んだアイシャに誠達は冷たい視線を投げた。仕方が無いと言つように口を押さえてアイシャがそのままうつむく。

「それじゃーねーよ。意識云々の話は能力の強弱であってここで言う能力の種類とは違うんだ。それとなんでこの第二の演操術が分からなかったかと言う理由もそこに有るんだ」

「もったいつけるじゃねえか。ずばり言えよ」

短気な要はタンクトップの下から手を入れて豊かな胸の下の辺りをぼりぼり搔いている。思わず目をそらす誠にむつとしたような表情のカウラが映って誠も視線を落とした。

「ふー。まー分かりやすく言つと他人の能力を乗っ取るんだ」

「どういう意味ですか？」

首をひねるカウラに少し笑みを浮かべてランは口を開いた。

「つまりだ、標的とする法術師の能力を借りて自在に操る。まー他人の禪で相撲をとるって奴さ」

ランはそう言つと自分の胸に手を伸ばしてきた要の頭を思い切り叩いた。

「何すんだ！テメー！」

「いやあ禪とか言うと面白くってさ」

「だとかでアタシの胸を触るんだ？」

突然の行動に顔を赤らめるラン。そして同じように手を伸ばしてきたアイシャをその凶悪そうな瞳でにらみつけた。

「馬鹿は置いておいて。つまり、法術の存在が広く認知されるまではその能力そのものが見つからなかったわけですね」

「そー言うこった。法術だけを研究している間はそれぞれの能力の関係なんて気にもかけてなかったからな。能力が存在すること自体が不思議だった時代にはそれを利用してしまいう力があるなんて考えもつかないだろーしな」

落ち着いてつぶやくとランは立ち上がった。

「ここでグダグダ話していても始まらねーよ。飯食って屯所で話そうや」

そんなランの言葉に誠達は時計を見る。ちょうど今日の朝食当番のヨハンが得意のリゾットに仕上げの隠し味を入れている時間だった。

「じゃあ食堂に行くか？」

「要さん、何で疑問系なんですか？食べますよ僕も」

仕方なく立ち上がる要について誠も立ちあがった。アイシャはすでにドアに寄りかかって誠達を待っていた。

「それにしても他人の力を勝手に使えるってんだろ？最強じゃないか、考えてみたら」

要のつぶやいた言葉に誠も頷く。そしてそうなれば自分の空間操作能力も利用されるだろうことを考えてそれをどう使ったもりののかを考えてみた。

「だからオメー等はもう少し物事の切り替えを覚えろよ。ここで考

えていても何も生まれねーぞ」

そう言つと気軽に手を振ってランが廊下に出て行くのに誠達は付き従つた。

「さてと……いいですか？」

遼州司法局実行使部隊ということで東和共和国の首都東都の西にある遼州を代表する大企業菱川重工業豊川工場の隣。そこにある保安隊隊舎の会議室。明らかに太りすぎている技術将校ヨハン・シユペルター中尉はボードを前に誠達にレクチャーを始めようとしていた。

しかし会議室と言ってもほとんど多目的ホール扱いのこの部屋。来月に豊川市街で行なわれる予定の節分の行事のために用意された鎧兜が所狭しと並べられ、その合間には同じ日に上映される自主制作映画の為のコスチュームの入った箱などがてんでんばらばらに並べられている。

「あのなあ、ヨハン。ここで本当にいいのか？」

要がヨハンにしみじみとつぶやいた。ヨハンもとりあえず半笑いでそれに答える。

「しゃーねーだろ？他の部屋は雑兵衣装であふれかえっているんだからよー」

頭をペンで掻きながらランが答えた。ヨハンの授業に付き合うのは保安隊実働部隊の面々だった。

第一小隊の小隊長のランはヨハンの隣に座って部下達を見つめている。その先には鼻と唇の間にペンを挟んで退屈そうにランを見つめている第一小隊二番機担当のナンバーゲニア・シャムラード中尉そしてその隣でネットの海に直結した電腦デバイスの世界に逃避している明らかにやる気の無い三番機担当の吉田俊平少佐がいる。その隣、一人だけノートを持ってペンで何かを書こうとする神前誠。その両隣は第二小隊小隊長カウラ・ベルガー大尉と西園寺要大尉が座っている。

「あのー説明始めていい？」

「ヨハン、こいつ等のこと気にかけるだけ無駄だぞ。てきとーに話して終わりにしょーや」

投げやりなランの言葉に説明をするということとヨハンの低いテンションはさらに低くなる。

「じゃあ、はじめます」

「はい！」

演操術について語ろうとした話の腰を見事に空気を読まないシャムが元気に手を上げてへし折った。

「なんだ？」

「たぶんアタシわかんないから寝ててもいい？」

シャムの言葉にランは悲しげな表情で隣に座ってにやけている吉田に目を向けた。

「シャム……」

「冗談だつて！ね、ランちゃん」

「冗談？いつものことじゃねえか」

明るいシャムの言葉に要が突っ込みを入れた。呆れているラン。いつもの光景にヨハンは呆れたようにモニターに画像を転送した。円グラフ。そこにはテレパス、空間干渉、意識把握などの法術の能力名が並んでいる。

「見ての通り法術師の発生確率は一万分の一以下とされている。ほとんどが遼州系の人物だが、確立は落ちるが純潔の地球系の住民にも法術師の発生が確認されている」

「先生！いいですか？」

「なんです？西園寺大尉」

話の腰を折られて吐き捨てるようにつぶやくヨハンをいかにも楽しそうな要が眺めている。

「血筋云々の話は別としてアタシみたいなサイボーグに法術師の発生例はあるんですか？」

「そう言えば康子さんは空間干渉の達人だったな」

要のもつともな話にカウラが頷く。

「今のところサイボーグの法術師の発生例は無いんですがね。ただ西園寺大尉がその初めての例になつてもおかしくないですね」

「と言うとなんだ？」

退屈そうなランの一言に大きく頷くヨハン。

「先ほど法術師の発生に純潔の地球系でもその例が紹介されていると言う話ですが、すべての発生例が遼州系の住民と接触する機会の多い人物に限られています。当然大尉は神前と接点が多いわけですから法術の才能が開花してもおかしいことはひとつありません」

「ふうん」

満足したと言つように要は椅子の上で伸びをした。

「それじゃあ私とその力を得ても良いわけだな？」

今度はカウラだった。説明するだけ面倒だと言つようにヨハンはニヤリと笑つて頷く。

「まあそれじゃーいくらでも法術師は増えるわけだな」

ランのまとめで次の話題に移る所だが、すぐにヨハンは首を振つた。

「違いますね。そこそが一番今回現れた犯人の能力である『他能力制御』の肝ですから」

そう言つとヨハンはモニターの画面を切り替えた。そこには各能力とその能力がどのように発動するかを図が載せられていた。

「多くの法術は視床下部のこの部分の異常活性化を原因としていると言つ説が現在定説ですが、この……」

「御託はいーんだよ。さっきの話の決着つけてくれ」

小さいランの一言に研究者としてのプライドを傷つけられたと言ふように大きく深呼吸をするヨハンの姿は実に面白くて誠は噴出しそうになるのを必死にこらえた。それはすぐにヨハンに見つかり、冷やかな視線が誠に集中した。

「手っ取り早く言つと法術師の法術発動の際の特殊な脳波は周りの人々の脳波にも影響を与えるんです」

「で？」

「逆に法術を常に待機状態にしている法術師に同じように脳波での刺激を与えれば法術は本人の意図と関係なく発現し……」

「その脳波を発した人物。演操術師の意のままに発現するってーわけか」

ランの顔が引きつる。

「つまりあれか？ほとんどの能力の乗っ取りが可能なわけなんだな？」

珍しく真剣な表情の要。その問いにヨハンは大きくうなづいた。

「再生能力なんかの接触変性系の法術以外は発動可能です」

「接触変性？」

シラムはそう言うのと周りを見回す。しばらく頭を掻いた後で要がシラムの鼻を突付いた。

「お前や島田の再生能力のことだよ！再生や治療系の能力は直接触つてねえと駄目なの！」

「ああ、そうなの！」

分かっているのか分かっていないのか分からない調子で元氣よくシラムが叫ぶのが部屋に響いた。

「どうでも良いけどよう。要するに能力を持つてる奴の能力を勝手に使うことができる能力の持ち主がいる……って結構やばいことなんじゃねえの？」

「そりゃーそうだろ。だが元々法術自体が表ざたにされていない状況ではそんな能力を持っている奴も一生法術とは無縁で暮らせたのが半年前の神前の能力を見たおかげで目覚めちゃったってーわけなんだな」

ランのまともにヨハンが頷く。そしてどうしようも無い重い空気が会議室中に流れた。

「皆さーん！元氣して……無いわね」

突然の乱入者は予想通りアイシャだった。

「なんだ？オメーがここに来る用があるのか？」

当然のように重い面持ちのランの言葉に入り口で氷ついたようになるアイシャ。

「いやあ……キム少尉が制圧用兵器の試射を要ちゃんに頼めないかって言われて……」

真剣なランにはさすがのアイシャも言葉をぼろぼろと転がすように吐き出すしかなかった。だがすでに要はやる気十分で立ち上がっていた。

「ぐだぐだ考えるのはちっちゃい姐御とデブに任せるわ。アタシは自分のできることをするよ」

「ほー、言うじゃねーか。まあ一応気にかけてくれてことだ。今回の事件は法術がらみだが初動捜査が東都警察が仕切っているからな。アタシ等の出る幕がねーほーがいいんだ」

そう言つと興味心身で立ち上がるラン。ヨハンは自分の講義が中途半端に終わったことが不満なように手にした小さなディスクを机の腕でくるくると回している。

「おい！オメエ等も来いよ！」

入り口で叫ぶ要を見てカウラと誠は顔を見合わせた。

「アタシも行く！俊平は？」

「俺はちよつとヨハンの旦那に確認することがありそうだからパスだ」

そう言つて胸のポケットからコードを取り出して首筋のジャックに刺す吉田。納得したようにシャムは立ち上がつて要について出て行く。

「オメー等も来い。こつちの実演の方がアタシ等には重要なんだから」

戸惑っていた誠とカウラにランが声をかけてきたので二人は渋々席を立った。

そのまま廊下を進んでいくアイシャ。ぞろぞろとその後ろを要、誠、カウラにランが続いていく。

「制圧用の火器ってガス弾ですか？」

誠の問いにいかにも不機嫌そうな顔をして要が振り向く。

「そんなもん機動隊の仕事だろ？うちはもっと非常事態に適したのを使っただよ。そもそもショットガン撃ちが言うことじゃねえぞ、そんなこと」

それだけ言う満足したように足早に実働部隊詰め所と管理部の前を通り過ぎハンガーの広がる景色を見ながら階段を下りる。

ハンガーは先月押し付けられた新型機のテストがまだに続いていた。主に運用レベルでのメンテナンス手順の確認作業だということとで中央で技術部の技師、島田正人准尉が指示を出しながらつなぎをきた隊員達が冷却用ポンプを担ぎながら走り回っている。

「お疲れさんです！」

誠は寮長を兼ねている島田に頭を下げた。島田はそれを見るとにんまりと笑いながら駆けつけてきた。

「おっ！皆さんおそろいで。キムの野郎のところですか？」

「なんだよ、お前等には関係ねえだろ？」

「西園寺さん。あれは次にはうちの餓鬼どもに撃たせる予約が入っているんですよ」

「へえ、お前等もあれを撃つのか？」

要の声に頭を掻いて周りを見回す島田。

「おい！西園寺！」

ランの叫び声につられてそのまま要は島田を置いて技術部の詰め所が入っている一階のフロアーに駆け込んだ。

「技術部の人もやるんですか？」

誠の問いにただニヤニヤ笑うだけの要。そして先頭のアイシャは小火器の管理を担当するキム・ジュンヒ技術少尉が主を務める技術部第二分室の扉のドアをノックした。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 19

「開いてますよ！」

キムの声が響いたのでランは先頭になり部屋に入った。

「これかよ・・・」

先に入った要の声に少し興味を持ちながら続いた誠だが、そこに待っていたのは明るい青色の樹脂でできたショットガンが並んでいる光景だった。

「模擬弾使って射的ごっこか？つまらねえな」

「模擬弾とは失敬な！一応鎮圧用の低殺傷弾入りのショットガンですよ」

「威力が半端なだけになお悪りいや」

頭を搔いて銃に手を伸ばす要。誠はオレンジ色の派手な弾薬の箱に目を向けていた。

一応司法執行機関と言う保安隊の名目上、当然暴動や治安維持任務には低殺傷能力の武器の使用も考慮されており、それに適した銃も抱えていたところで不思議は無かった。事実、以前ベルルカン大陸での選挙監視活動で第四小队と随伴部隊が現地で活動した際の映像にも目の前の青いショットガンを抱えて警備に当たる島田達整備班長の姿を眼にしていた。

「これってどれくらいの威力があるんですか？」

弾の入っていないショットガンを手に弄り回している要に尋ねる誠。振り返った要の顔は明らかにがっかりしたような表情に変わっていた。

「あのなあ、そんな子供がエアガン買うときみたいなこと言っなよ。名前の通りの威力だ」

そう言うのと静かにガンラックにショットガンを戻す要。その隣ではこの小火器管理を担当する隊の隊長であるキムがバスケットにオレンジ色の弾薬を入れているところだった。

「まあ当たり所が悪くない限りは打撲ぐらいで済むだろうな・・・何ならお前が的になるか？」

「いい事言うじゃねえか。じゃあ防弾プレート入りベストを貸してもらってお前は標的役を・・・」

「西園寺さん！ふざけないでくださいよ！」

本当にやりかねない要を見ながら誠は泣くような調子で叫んでいた。

「ふざけてないで行くぞー」

ランはそう言うで一挺の青いショットガンを手に取る。カウラもアイシャも静かにそれを手にした。

「おめえはどっちにする？」

要は手にしたセミオートマチックショットガンとポンプアクションショットガンを誠に手渡した。

「僕はこっちが慣れてるんで」

そう言うとは誠は迷わずポンプアクションショットガンを選んだ。

部屋を出ながらまじまじと銃を見る。毒々しい青い色が異様だった。考えれば使用弾薬が殺傷用のバックショットやスラグが入っているのと低殺傷能力の布製弾が入っている銃に見分けをつけるのは合理的だがそれにしても明らかに毒々しく塗られた銃は異様だった。

「おつと皆さんはお出かけですか？」

誠の専用機の05式の右手の解体作業を仕切っている島田が声をかけてくる。

「おー、ちよつくら鴨撃ちだ」

「冗談よしてくださいよクバルカ中佐！」

ニヤニヤ笑いながらボルトを磨いていた部隊で二人しかいない十代の隊員西高志兵長が叫ぶ。

「くだらないことばかり言っているとボコにすんぞ！」

要の脅しに西の後ろで端末をいじっていたアメリカ海軍からの出向技官のレベッカ・シンプソン中尉が西の前に立ちはだかる。

「お暑いことで！おっぱいお化け！」

いつもレベッカの豊かな胸に嫉妬している要が叫ぶのを聞くと今度はアイシャが笑い出した。

「なんだよ！」

「いやあ、要ちゃんの反応がいつもどおりで平和だなあって思っちゃったから」

そう言つとアイシャは手にしたショットガンのフォアードレバーをガチャガチャと動かして見せた。

ハンガーを出ると思いいいに銃を背負って疲れ果てたような顔をしている兵士達が現れた。

「姐御は絞るねえ」

要が兵士達、保安隊警備部員の姿を見てつぶやく。一応中佐や大尉の階級のラン達を見つけてよろよろと敬礼する警備部員。イヤープロテクターをはずそうとする姿は明らかに疲れ果てて見えた。

「あ、ラン。これからそいつの訓練か？」

中で一人、長身の女性将校が金色の髪をなびかせながら近づいてきた。警備部部长、マリア・シュバーキナ少佐。その姿を見てランはにやりと笑う。

「その様子だと相当走らせたな・・・銃の訓練はそれからか？」

「まあ体が資本だからな、この業界は。それと銃の扱いも多少は慣れるべきだろう」

「慣れるってれべるじゃねーだろ」

ランがそう言うのももつともだった。月に一万発のアサルトライフルでの射撃訓練。そんなことをしている部隊といえば東和には一つもなかった。

「ランのところが甘すぎるんだ。多少は鍛えるべきだろう？」

「予算がねーよ。うちはただでさえアサルト・モジュールなんていう馬鹿みたいに予算を食う機材を扱ってるんだ。それに茜お嬢様のお手伝いもしないといけないからな。なかなか難しいもんだよ」

そう言つとランは手を振って自分についてきた誠達をせかした。

「ちゃんと訓練をしておけよ」

マリアが明らかに誠に対してそう言つた。誠も射撃に関しては自身がないこともあつて申し訳ないという表情で敬礼をしてみせる。

「ついて来い！」

ぎこちない誠の腕を要が思い切り引つ張る。よろめきながら誠は射場が見えるハンガー裏手に向けて歩き出した。

空薬莢が転がる射撃レンジで静かに先頭を歩いていたアイシャが手にしたバスケツトからショットガンの弾薬の箱を取り出す。

「どれ・・・サンドバック弾か・・・こいつは銃には悪そうだなー」

駆け足でアイシャに追いついたランが仕方がないというようにオレンジ色の毒々しい箱を開け始める。誠やカウラも仕方がないというように土嚢を蹴って射場上がった。

「誠、オメエ的な」

「西園寺。冗談を言う暇があったら弾を込めろ」

カウラはそう言うとし新しい弾の箱から取り出した弾薬を一発一発青い銃に込めていく。

「これって何が入っているんですか？」

実は普段から同じ構造のショットガンを銃の下にぶら下げて使用している誠の言葉に要は大きいため息を着いた。

「あのなあ、基礎も基礎だぞ。弾頭には布製の袋が入っているんだ。その中身は重量のある樹脂。約5メートルで10センチくらいの大きさに開いて目標に到達。打撃力で相手を無能力かすると言っているのが売り文句だ」

「有効性があるのが25メートルくらいだからな。かなり銃を撃つタイミングが難しい。クバルカ中佐。私からでいいですか？」

言葉を継いだカウラが弾を込め終わると静かにフォアグリップを引いていた。

「おっし。口で言っても分からねーだろうからな。その鉄板にぶち込んでやれ」

ランがそう言うとそのままカウラは10メートルくらい先の鉄板に狙いを定めた。すぐに初弾が放たれる。銃声の後、鉄板が鈍器で殴られたように大きく揺れる。

「へえ、面白いわね。じゃあ私も」

そう言うアイシャはシャムが使っているショットガン、サイガと同型の青いショットガンの重厚を30メートル先のペーパーターゲットに向けた。

三発の銃声。そして着弾点で上がる土煙。

「面白いわね」

ニコニコ笑いながらアイシャはテーブルに置かれていたオペラグラスに手を伸ばした。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン）

23

「ああ、当たってるわね。私すごいわ」

満足そうに頷くアイシャ。その同じ方向を要が見つめている。サイボーグらしく望遠機能を使用しているようで静かに額に右手を当てている。

「・・・当たり前だ、こんな距離」

「じゃあお手本を見せてよ」

口を尖らせるアイシャに対して笑みを浮かべて青い銃にマガジンを叩き込む要。すぐさま五連射。満足げに全弾撃ちつくしたと誇るように誠達を見回す。

「さすがよねえ。これは一応褒めとくわね」

再びオペラグラスを手にとると頷きながらアイシャは着弾点を確認した。

「じゃあ私もやるか・・・」

カウラがそう言って初弾を装てんしたところでランがカウラの銃に手を置いた。

「オメー等射撃ごっこしているわけじゃねーんだ。全員そこに並べ」

仕方ないと言うようにカウラは銃口を上に向けて要達が使っていた射撃レンジに立った。要もアイシャも小さいとはいえ上官のランに逆らうわけには行かずに隣のレンジに移る。

「あのー僕は？」

「神前は撃ち方自体がおかしいから。ここでアタシの撃ち方を見てろ。」

そう言つと130cmに満たない小さな体には大きすぎるショットガンの銃口をターゲットに向ける。

「まず反動は普通の殺傷弾よりでかいからな。こうしっかりホールドするわけだ」

「まずアタシは普通の人間よりちっこいからな。こうしてしっかり銃にぶら下がるわけだ」

ランの声まねをする要。思わず噴出しそうになる誠だが上官相手とあって必死になってこらえる。

完全に要を無視していたランが初弾をターゲットに命中させる。そして驚いている誠に見せ付けるようにして短い手で起用にポンピングしながら5発の弾丸を発射して見せた。

「こつやるもんだ」

「小さいからな。よくできたなあ」

「西園寺。一度死んでみるか？」

殺気立つラン。その元々にらんでいる様な顔がさらに殺気を帯びる。

「とりあえず見本だ」

カウラはそう言うのと等間隔で五発の連射を行なう。ターゲットの金属プレートが煙に覆われる。

「低殺傷能力でもこれは危ないんじゃないですか？」

誠の言葉に要が心底呆れたという顔をしている。

「『低』だからな。オメエが三ヶ月前まで使ってた22LR弾だつて当たり所が悪ければ人は死ぬぞ。こいつも同じだ。頭とかに当たれば場合によつては十分死ぬからな」

「そんなものよ。警棒を振り回すより文化的でしょ」

要は取り外したマガジンに、アイシャはバレルの下弾倉にオレンジ色の派手な色のショットシェルを押し込んでいる。

「なんやかんや言いながら嫌いじゃないんだなお前等も」

そう言いながらカウラも装弾を開始している。仕方なく誠も慣れた手つきで弾倉を開いてショットシエルを押し込んでいく。

「遊びじゃねーんだからな。狙う対象は暴動に発展しそうな興奮状態の暴徒。それを一撃で殺さずに行動不能に陥らせる。それを頭の中でシミュレーションしながら撃てよ」

ランもまた装弾を開始していた。バスケットの中の弾は五箱。実銃の射撃訓練に比べると明らかに少ない。

「これも高い弾なんですか？」

弾を全弾装てんしてフォアエンドを引いて薬室に弾を込める誠。

「まーな。結構な値段だがスラグ弾やバックショットとはかなり弾道が違うぞ。急激に初速が落ちるからかなり狙いより下に当たることを考えるよ」

親切なランの言葉を聴くと誠は銃口をターゲットに向けた。

「ボスン」

誠の撃った初弾はあっさりと出たがターゲットの手前で着弾した。

「もつと銃口を上げる。初速は普通のスラグなんかよりぜんぜん遅いんだからな」

ランの言葉に少しばかり焦りながらポンピングをする。

そして狙う。照準装置の無いショットガンでは感覚で着弾点を覚えるしかないことが誠も知っていた。

「ボスン」

今度はターゲットを飛び越えて白い弾頭らしきものが飛んでいくのが見える。

「ったく・・・お前本当に東和軍の幹部候補の過程を通過したのか？」

呆れる要に首をひねりながら再びショットシェルを込めて銃口をターゲットに向ける。

「ボスン」

ようやくターゲットの中央に弾が当たったのが分かる。人型の鉄板が揺れて着弾を表している。

「ボスン、ボスン」

四発撃ち尽くして誠は大きなため息をついた。

「誠ちゃん。もう少し練習しようね」

アイシャもさすがに呆れたと言うように誠の肩を叩く。仕方が無いとつむく誠を見ながらカウラは自分の銃に弾を込めていた。

「まあ神前には剣があるだろう？どうせこの距離くらいでの衝突だ。警棒で対応できれば文句は無い」

「その警棒で対応できないからこいつを使っんじゃないか？甘いねえ、隊長殿は」

カウラのフォローを台無しにする要。誠はいつものことなので逆に開き直って銃に弾を込め始めた。

「どうだい、進んでるか？」

突然背中から声をかけられて誠はびくりと振り返った。

そこには部隊長嵯峨惟基特務大佐がいつものようにタバコをくゆらせていた。

「こー言うところじゃ火気厳禁じゃねーんですか？」

「厳しいねえ、さすが鬼教官殿だ」

ランの注意に仕方がないというように嵯峨は啜っていたタバコを落として踏みしめた。

「こー言う事もうちのお仕事だからさ。神前にも一応体験してもらわないとね」

「体験・・・まるで遊園地かなにかに行くみてえだな」

「まーそんな感じに思えて来るねー、このぼんぼんにものを教えていると」

頷きあうランと要。誠は言っていることが間違っていないだけに少しばかり頭を掻きながら装填を終えた銃を手取る。

「とりあえずどの銃でも基本は同じなんだ。狙って標的に当てる。簡単だろ？」

カウラの教えも射撃にコンプレックスを持っている誠には逆に堪える言葉だった。静かに冷静に。そう言い聞かせながらフォアグリップを引いて弾を薬室に叩き込む。

「ボスン」

引き金を絞ると何とか25メートル先の標的が銃撃を受けて揺れた。

「なんだよ当たるじゃねえか」

「叔父貴。そりゃあとまっている的だからな。これで外したら間抜けとしか言えねえぞ」

興味深げに標的を見る嵯峨に要はそうつぶやいた。

「でもさつきは外したよな」

再びのカウラの言葉にがっくりと誠は肩を落とした。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 27

「叔父貴。何しに来たんだ？」

元々要の生家である胡州大公西園寺家の三男から大公嵯峨家へと養子に出された嵯峨惟基。血縁では要の叔父に当たるのは誰もが知るところだった。

「仕事がさあ。ちょっと煮詰まってるね」

それだけ言うとは啞えていたタバコを足元でもみ消す。その様子はいつものにらんでいるような目のランの監視の下に行なわれていた。

「分かったよ、拾うよ」

めんどくさそうに吸殻を拾う嵯峨に大きなため息をつくカウラ。

「仕事って・・・また法術関係の話っすか？」

ランはそう言うのとショットガンのセフティーを解除してターゲットに狙いを定める。

「ボスン！ボスン！」

発射された弾丸が正確にマンターゲットの首の辺りに命中する。

「まあな。結局は史上最初の法術のデモンストレーションをやった俺達だ。そのことに関しての問い合わせは年中無休だ。本当に体がいくつあってもたりねえよ」

「元々質問とかに答える気はねえのに何言ってたか・・・」

要はそう言っと同じようにランと並んで射撃を始める。

「そう言えば先日の火災事件では大変だったらしいな」

「今更・・・」

カウラは諦めたように肩を落として弾の装填を始める。誠も仕方なく彼女をまねるように装填を始めた。

「演操術・・・面倒なことにならねえといいんだけど・・・」

心配そうにそう言っつと嵯峨は立ち上がった。

「何しに来たんだ？あのおっさん」

そう言つと撃ちつくした銃をラックに置いてのんびりと伸びをする要。視線を向けられてカウラもアイシャも首を振る。

「あの人も結構大変なんだからよー。少しは汲んでやれよ」

「それは副隊長のお仕事じゃないですか？私達がどうこうできるとじゃないし・・・ねえ誠きゅん！」

アイシャに話を振られて薬室に弾を装弾したばかりの誠はうろたえながら頷いた。

「あぶねーだろーが！」

素人同然の誠が射撃をしようとしているところに声をかけたのを見つけてランがアイシャの頭を小突く。舌を出しながらそのままアイシャは椅子に腰掛けた。

「ボスン」

また誠がショットガンを撃つ。再びマンターゲットの足元に煙が立ち込める。

「神前よー。少しはまともに当ててくれよ。アタシ等が近くで戦闘中かも知れねーんだぞ」

ランの言葉に静かに頷く。そして今度は少し銃口を上げてターゲットに向かう。

「ボスン」

今度は腰の辺りに着弾する。白い布状の弾丸が展開しているのがよく見えた。

「そうだ。忘れるなよその感覚。慣れてくれれば狙いをつけなくても軽くあれくらい場所に当てられるんだ」

そう言うランも弾を込め終えた銃を持って射場に立った。

「バス！バス！バス！バス！」

四連射。マントターゲットの腹部に何度となくぶつかる弾丸。

「ようやく調子が出てきたところで弾がなくなつて終了・・・か」

そのランの言葉にほっとしている誠。その表情に要とアイシヤはにんまりとした笑みを誠に向けてくることになった。

「法術適正はあるけど能力が無い・・・本当に？」

狭い不動産屋のカウンターで店主が老眼鏡を外しながら目の前の天然パーマの男の顔を覗き込んだ。男は何度と無く同じ質問を受けてきたのでさすがに口を開くのもばかかしいと言うように頷いた。実際法術適正検査が任意で行なわれているということになっている東和だが、こうして部屋を借りようなどと言う時には適性検査で未反応だったと言う証拠が必要になると知ったのは最近だった。

三件目の30くらいのきつい近眼の眼鏡をかけた女性の担当者などはかなりひどかった。法術適正はあるかと聞かれ、証明書を出すとそれを投げつけて貸す部屋などないと言い放つ姿には逆にすがすがしささえ感じてしまった。

「それにしても・・・学生って・・・おたくいくつ？」

「三十二です」

「で、大学生？」

「法科大学院ですけど・・・」

灰色の背広の袖を気にしながら振り返り端末に条件を入力している。
く。

天然パーマにめがね、黒い時代遅れの型のジャンパーを着こんでいるところは確かに不自然に見えるだろう。そう水島勉は思いなが

ら店主の苦々しげな顔を覗き込んでいた。

「ああ、法科と言うと明法大？」

「ええ、そうですけど」

これもまた何度も繰り返された話題だった。法学部で数多くの司法試験合格者を輩出している名門。この豊川市にキャンパスがある以上、それが自然な話と納得するのも当然のことと言えた。

「それにしても最近はこの能力があるなんて・・・放火魔がパイロキネシス能力を持っていたりしたらどうなるんだろっかねえ」

世間話のつもりで親父がつぶやくのを聞いて水島は正直うんざりしていた。

「でも存在が発表される前にも能力はあったんですよ」

「それはそうだけどさあ・・・あ、これなんてどう？」

親父はそう言うとき水島の前の画面に1Kの物件のデータを表示した。

「平日だねえ」

要はそう言うつと自転車をこぐ。隣を走るのはカウラと誠。二人とも毎日夕方の3キロマラソンのラストと言うことで疲れを見せながら冬の空の下で走り続けていた。

「いつまでも・・・正月・・・と言うわけじゃないだろ？」

カウラはそう言うつと目の前に見え始めたゲート目指してスパートをかけた。誠にはそれについていく体力は無かった。そのまま消えていくカウラ。

「オメエも根性見せろよ。男だろ？」

自転車を悠々とこぐ要。彼女は脳の一部以外はすべて人工的に作られた素材を組み合わせたサイボーグである。そもそも体力強化のランニングに付き合う必要は無いのだが、最近は気分がいいようである。こうしてその度に自転車をきしませながらついてくる。

「ベルガー大尉・・・みたいには・・・」

「そうか？じゃあアタシは先に行くから」

要はそれだけ言うつと一気に力を込めてペダルをこぎ始めた。すぐにその姿はゲートへと消える。

「がんばれ！あとちょっと！」

ゲートの手前でコートを着た女性士官が叫んでいるのが見えた。警備部部长、マリア・シュバーキナ少佐。『保安隊四大姐御』の二位と呼ばれる存在の彼女の登場に誠は苦笑いを浮かべながら足を速めた。

保安隊で単に『姐御』と言うと技術部部长で階級も部隊長の嵯峨と同じ大佐の許明華大佐のことを指すのは隊の常識だった。そして勇猛果敢な警備部の猛者達を仕切るマリアは第二位とされた。そして運用艦『高雄』の艦長鈴木リアナ。あの突拍子の無い副長アイシヤを抑えている彼女は姐御と言うより『お姉さん』と呼ぶのが隊の常識だった。

「おーい。報告書終わってねーぞ！」

ゲートを通り抜けた誠の目の前でシャムに駆り出されて大根を一輪車に載せて運んでいるクバルカ・ラン中佐は『小さい姐御』と呼ぶのが一般的だった。

「わかって・・・ますよ」

「分かってるならシャワー浴びて来い！」

ふらふらの誠に向けてそう言うと言ランはそのまま一輪車を押してハンガーに向かう。誠も仕方なくそのまま正門へ向けて歩き始めた。

「なんだ？」

思わずつぶやいてしまった誠の目の前にはシャムが背を向けて立っていた。その手には茶色いものが握られている。そしてよく見るとその足元には冬の夕方の弱い光を全身に浴びようと言つように転寝をする大きなゾウガメの姿があった。

「ナンバルゲニア中尉！何をしているんですか？」

誠が声をかけるとシャムはめんどくさそうな表情で振り向く。そして彼女が玄関口に立つ大きな熊に何かを教えようとしていることが分かってきた。

「芸を仕込んでいるんですか？」

しばらくシャムの嫌な顔を無視して玄関に届いているほどの巨大なコンロンオオヒグマの子供のグレゴリウス13世に目を向けた。

すぐにグレゴリウスが手に何かを持っているのが誠にも分かった。そしてそれがアイシャが原作を書きそれなりにネットで流通しているボーイズラブ小説をシャムが漫画化した本であることに気がついた。

「何やってるんですか？」

呆れながら真剣な表情の小さなシャムに目をやる。身長は140センチに届かない小柄な少女のように見えるシャムだが実際は誠よ

りもはるかに年上で遼南内戦ではエースとして活躍したシャム。彼女の凄みを利かせた目は最近では誠もその恐さが分かってきたところだった。

「誠ちゃんも・・・アイシャの小説読むでしょ？」

真剣な顔でつぶやくシャム。誠はいくつかの短編をアイシャに読まされた上に漫画を描かされたのを思い出して渋々頷いた。

「男の人が読むと・・・どんな感じ？」

シャムの目はじっとグレゴリウスに注がれている。シャムが大好きな彼だが当然文字が読めるわけでもなく、人が読むのをまねして本を開いて覗き込んでいるだけだった。

「それが知りたくてこうしてグレゴリウスに読ませているんですか？」

投げやりにつぶやいた誠を見ると今度はいかにも軽蔑するような視線で誠を見つめてくるシャムがそこにいた。

「グレゴリウスは熊だよ。漫画なんて読めるわけ無いじゃん」

馬鹿にした口調のシャム。時折こういうことを言われると温厚な誠もさすがにカチンと来る。

「じゃあどけてくださいよ。入れないじゃないですか」

「？」

文句を言った誠にしばらく呆然と視線を送るシャム。そしてワテンポ遅れて納得したと言うように手を打つと手にしていた干し肉をグレゴリウスの口に投げ込んだ。グレゴリウスは器用にそれを口に咥えると本を放り出してそのまま自分の小屋がある車両置き場に向かつて歩き始める。

「それ、プレゼントだから」

のろのろ着いていくシャムがそうつぶやく。隣の亀の亀吉もゆつくりとそれについていく。仕方が無いいかにも怪しげな半裸の美少年達が描かれた同人誌を手にとるとそのまま正面玄関から部隊の宿舎に入った。

「あれ・・・？あれ？」

そこで誠は大きなため息をついた。目の前には紺色の長い髪 of 少佐の勤務服を着た女性士官。一番この手の本を手に行っている時に出会いたくない上官のアイシャ・クラウゼだった。

「それ・・・シャムちゃんの・・・もしかして使用済み？」

「使用って何に使うんですか！」

「だって冬なのにそんなに汗をかいて・・・」

「ランニングが終わったんです！」

「ふーん。つまらないの」

そう言うつと誠から関心が無くなったというように振り向いて彼女の本来の職場である運行部の部屋の扉に手をかけた。

「ああ、そうだ。シャワー浴びてからでいいと思うんだけど・・・」

今度は打って変わった緊張したまなざしを誠に向けてくる。いつものこういう切り替えの早いアイシャには誠は振り回されてばかりだった。

「ええ・・・なんですか？」

そう言うつ誠が明らかに自分を恐れているように見えてアイシャは満面の笑みを浮かべた。

「茜のお姉さんが来てるのよ。何でも法術特捜からのお願いがあるみたいで」

アイシャはそう言うとそのまま階段下のトイレに消えていった。

「嵯峨警視正が？」

保安隊部隊長嵯峨惟基の長女嵯峨茜。保安隊と同じく遼州同盟の直属司法機関の一つである法術特捜本部の主席捜査官の地位にある彼女。ようやく間借りしていたこの保安隊豊川基地から東都の司法局ビルに引越したばかりということと時々こちらに顔を出すことがあるがそのほとんどがデータの刷り合わせなどの地味な作業で一番暇と呼ばれている誠の第二小隊がその作業を担当させられることが多かった。

「面倒だなあ」

そう言いながら運行部の詰め所を抜け、シミュレータ室の前を通り過ぎて待機室の手前にある男子用シャワー室に誠はたどり着いた。

先着の人物がいるらしくシャワーの音が響いていた。誠はそのまま静かに服を脱ぐと手前のシャワーの蛇口をひねった。

「神前曹長！」

隣から目だけを出している褐色の顔の持ち主に誠はびっくりと飛び上がった。

第三小隊三番機担当のパイロット、アン・ナン・パク。このまだ19歳の小柄な人物が誠の苦手な人物の一人だった。

「なんだ・・・アンか・・・」

「僕だと不満ですか？」

そう言いながら近づいてくるアンに思わず後ずさりする誠。その少女のような瞳で見られると誠は動けなくなる癖があった。

「神前曹長はいつも僕を避けていますね」

アンはそう言うのと悲しそうにシャワーを浴び始める。確かにそれが事実であるだけに誠は頭から降り注ぐお湯の中に顔を突っ込んでそのままシャンプーを頭に思い切りふりかけた。

「そうですね。僕なんか嫌いですね。僕みたいに・・・」

そこまでで言葉を切るアン。

『おい・・・もしかして男が好きだとか言い出すのか？まじで勘弁してください！神様！仏様！』

アイシャの小説を読まされ続けて蕩けてきた脳が妄想を開始する。大体が立場は逆で長身の上官がひ弱な部下を襲う展開が多かったが、一部には逆転している作品もあったのでボーイズラブの世界に落ち込むのではないかと恐れつつ時が経つのを待っていた。

「僕は・・・」

アンがそういうのとシャワー室の扉が吹き飛ぶのが同時の出来事だった。

「神前！いい加減に出て来いや！いつまで待たせんだ！」

怒鳴る、そして壊す。これは西園寺要の十八番である。男子シャワー室に一応女性の要が乱入してくるマナー違反よりこのままアンと二人きりで時を過ごすことを想像していた誠にはありがたい出来事だった。

「もう少し待っててくださいね・・・なんとかしますから」

「おう、アンと一緒に・・・もしかして・・・」

短い髪をお湯ですすいでいる誠。周りは見えないが明らかに要の気配は近づいている。しかしその様子がぴたりと止まった。

「なんだよアン？」

「西園寺さん！非常識ですよ！」

どうやらアンがシャワーを出て要の前に立ちはだかっているようだと言っのが目をつぶっていても分かった。

「なんだ？上官に意見か？いい度胸だ。そして付け加えると前から隠せ」

それだけ言うと明らかに要の足音は遠くになってしまった。続いて蹴って外れた外の扉を直している音が響いてくる。誠はその状況にさらに絶望を始めていた。

しばらく誠は沈黙していた。

「大して汗もかいてねえんだろ？とつとと上がれよ」

扉を直している要。その目の前で食って掛かるには相手が悪すぎるとつつむきながら自分の個室に戻るアンがいた。

「でも非常識ですよ。男子用シャワー室に乱入なんて」

「は？いつも飲むたびに股間の汚えものを見せ付けて踊っている奴のいうことか？」

その言葉に誠は何もいえなかった。酒は弱くは無いが飲むと記憶が飛んで気が付くと全裸と言うことが何度も繰り返されていたのでレールに扉を乗せようと動かしている要を一瞥するとそのまま髪を流した。

「僕は・・・」

「黙ってるよ」

アンにそう言うとき誠はシャワーを頭から浴び続ける。だんだん体中の石鹸の成分が抜けていくような感覚がなぜかいらだった気分を切り替えてくれていた。

「おい、終わったからな外で待ってるから」

そう言つと扉を取り付けなおした要はドアを閉めた。しばらくシヤワーの水の音だけが部屋に響く。

「よしつと」

誠はお湯を止めるとそのまま廊下に出てあることに気づいた。

「あ・・・勤務服は更衣室だった」

その一言に振り向くアン。だがドアの外にはさらに耳に自信のあるサイボーグの要がいた。

「おい、取ってきてやるからそこにいろよ。ロッカーのバックの中か？」

「ええ、勤務服は吊るしてありますから」

要の気配がドアから消えた。

「やっぱり西園寺大尉のことが好きなんですネ・・・不潔ですよ」

アンはそう言つとそのままシャワー室のかごの中のタオルで体をぬぐい始めた。

「不潔って・・・」

「だってそうじゃないですか！クラウゼ少佐とホテルに入った所を菰田曹長が見たって噂ですよ！」

「は？」

誠は呆れるしかなかった。菰田邦弘主計曹長。管理部門の経理部主任の事務方の取りまとめ役として知られる先輩だが、彼は誠の苦手な人物だった。ともかく彼の率いる誠の上官カウラ・ベルガー大尉の平らな胸を褒めたたえる団体『ヒンヌー教』の教祖を務めていて部隊に多くの支持者を抱えていた。

カウラも明らかに迷惑に思っているが、それを利用して楽しむのが運行部のアイシャ・クラウゼ少佐の日常だった。間違いなくでっち上げたのはアイシャ。そしてそれに乗って騒いでいるのが菰田であることはすぐに分かった。

「あのさあ。そんなこと信じてるの？」

体を拭き終えてパンツをはき終えたアンに尋ねてみる。そのままズボンを履くと気が付いたように誠に顔を向けた。

「そうですね。そんなことやる甲斐性は先輩には無いですからね」

「甲斐性が無いってのは余計だよ」

そこでにやりと笑うアン。誠もしばらくは笑顔を向けていたが、そのアンの表情が次第に真顔に変わるのを見て目をそらした。

「本当に僕のこと嫌いなんですネ」

悲しそうにそう言うアンはワイシャツのボタンをはめ始める。

沈黙。これもまた誠に重く押し掛かった。

『早く来てくださいよ！西園寺さん！』

心の中で願う。一秒が一時間にも感じるような緊張が誠に押し掛かる。そんな彼に熱い視線を投げて着替えているアン。

「おいこれ！」

引き戸が開き要が誠の勤務服を投げてきた。

「有難うございます！」

「はあ？濡れちゃったみたいだけどいいのか？」

誠は要の到着を確認すると涙を流さんばかりに自分のシャツに手を伸ばした。

「まあいいか。アン！楓が探してたぞ！」

「ああ、すいません」

着替えの終わったアンは要の言葉にはじかれるようにして飛び出していった。

「あの一西園寺さん」

「なんだ？」

「パンツを履きたいんですけど」

シャワーのブースの中でじっとしている誠を見て要は急に顔を赤らめた。

「散々見せられてるから平気だよ。さつさと着替えろ」

「ふーん。こうして一步誠ちゃんと仲良くするわけね」

突然の言葉に誠も要も驚いて入り口に視線を向けた。満足げな表情のアイシャが全裸の誠をまじまじと見ていた。

「クラウゼ少佐・・・」

「さつき要ちゃんが言った通りじゃない。私も見慣れてるから平気よ」

「僕が平気じゃないんです！」

「へ？」

呆れたような顔に変わったアイシャの表情。明らかにそれが作ったような顔なので要はその頭をはたいた。

「痛いじゃない！」

「くだらねえこと言っでねえで仕事しろ！資料を取って来いとか言われてたろ？」

「それは要ちゃんも一緒じゃないの。このまま全裸の誠ちゃんを押し倒して・・・」

「誰がするか！」

入り口でにらみ合う二人。誠は仕方なく飛び出してバッグから換えのパンツを取り出し無理に履いた。体を拭いていないので体に付いたお湯が冷えて水になってパンツにしみこむ。

「誠ちゃん風邪引くわよそんなことしていると」

「お二人が出て行けばこんなことはしなくて済んだんですよ！」

「もしかして私のせい？」

要と誠にそれぞれ視線を向けるアイシヤ。二人が頷くのを見ると次第にすこすこと入り口に向かうが、当然のように要の袖を引いている。

「外で待つてるからとつとと着替えろ」

それだけ言うと要は入り口の引き戸を閉めて外に出て行った。

一人きりになりようやく安心してズボンに足を通す誠。そのままワイシャツを着てボタンをつける。

「まだかー」

「まだですよ」

待ちきれない要が外で叫ぶ。その隣であくびをしているアイシャの吐息が聞こえる。誠はワイシャツの腕のボタンをつけてさらにネクタイを慣れた手つきでしめると上着を羽織り、バッグを片手に扉を開いた。

「よし、行くぞ」

ようやく出てきた誠を一瞥すると要はそのまま歩き始めた。

「本当に気が短いんだから」

「何か言ったか？」

「ベーターに・・・」

振り返る要にとぼけてみせるアイシャ。いつものように運行部の扉の前にある階段を上がり、医務室と男女の更衣室が並んでいる二階の廊下を歩く。誰もいない廊下に足音が響き。誠達はそれを確認しながら会議室の扉の前に立った。

アイシャがノックをする。

「どうぞ」

澄んだ声。嵯峨の双子の娘の姉、嵯峨茜警視正の声が響く。そのまま開いた扉の中を見れば振り返るカウラと法術特捜担当というこゝとで呼び出された実働部隊長のクバルカ・ラン中佐の幼い顔があった。

「西園寺。そんなに急かす必要なんてねーんだぞ」

ランの言葉にむっとした表情のまま彼女の隣の椅子にどつかと腰を落ち着ける要。その大人気ない様子にカウラは大きくため息をつく。

「さあ、皆さんそろったんですから・・・」

なんとか和ませようと中腰で仲介するのは技術部の整備班長の島田正人准尉。隣にいるアイシャの部下のサラ・グリファン少尉も雲行きの怪しい誠達のとばっちりを避けたいというように頷きながら要を見つめていた。

「そろつたと言うことで」

ホワイトボードの前に立つ茜が室内を見回す。

「まあな。それじゃあ何のためにアタシ等が呼ばれたか聞かせてもらおうか」

要の声に微笑みで返す茜。

「実は最近演操術系の法術を使用しての悪戯のようなものが多発していますの」

紺の東都警察の制服が似合う茜。以前の主にこの豊川保安隊駐屯地に詰めっぱなしだったときの東和陸軍と共通の保安隊のオリーブドラブの制服とは違う新鮮な姿に誠は惹きつけられていた。

「演操術系？あのクリスマス前後にアタシ等が城東で片付けたような連中か？」

要の問いに首を横に振ると茜はなにやら端末を叩いている助手のカルビナ・ラーナ巡査に目を向けた。

白いボードに何かの映像が映る。焼け焦げた布団。ばつさりと切り裂かれた積み上げられたタイヤの山。ガードレールが真っ二つに裂かれているのにはさすがの誠もぎょっとしてしまった。

「ごらんのように小火や器物の損壊で済んでいますか・・・」

「おい待てよ」

話を進めようとする茜を要が不機嫌な表情で止めた。

「パイロキネシストとか空間干渉能力者の仕業だろ？なんで演操術の話が出て来るんだよ」

「お前は馬鹿か？」

立ち上がって叫ぶ要にポツリとつぶやくカウラ。要は完全にカウラの言葉に切れていつものように一触即発の雰囲気が漂う。島田とアイシャはとりあえずいつ要がカウラに飛び掛ってもいいように身構えているのが誠からすると滑稽に見えて噴出してしまふ。

「神前君。不謹慎よ」

同じくにやけながら噴出した誠をサラがいさめる。

「例の他の法術師の力を使う奴か？」

一人離れた場所からこの様子を見ていたランの言葉に茜は大きく頷いた。

「恐らくはそうでしょう。ですが・・・」

そう言うつと茜は従姉に当たる要に目を向けた。要は首筋のジャックにコードをつなげてネットワークと接続している最中だった。

「どの事件も発生場所は東都東部に集中しているな。それに時間も夕方6時から夜中の12時まで。同一犯の犯行と考えるべきなんじゃないの？」

「馬鹿にしないでください。それくらいのことは捜査官もわかってお話しているんです！」

不愉快だと言うようにラーナが叫ぶ。茜は彼女の肩を叩いて頷きながらなだめて見せた。

「でもそれならうちよりも所轄に頼むのが適当なんじゃないですか？うちは豊川ですよ。どんなに急いでも半日は無駄にしますから。それに先日の厚生局事件の時に活躍した東都警察の虎の子の航空法術師部隊を待機させてローラー作戦でもやれば一発で見つかるですよ？」

アイシャの言葉にもっともだと誠も頷く。

「反対する理由は無いな。クラウゼの言うことが今のところ正しく見えるのだが・・・」

カウラも同意しているのを見て要はやる気がなさそうに端末につ

ないでいたコードを引き抜く。

「オメー等の言うとおりだが一つ大事なことを忘れてんぞ。東都警察がこの種の事件に興味を持っていればって限定が入るんじゃないのか？アイシヤのような捜査手法をとるにはさー」

ランの一言。見た目は8歳くらいにしか見えなくても保安隊副長の肩書きは伊達ではなかった。そして自分達が遼州同盟の司法捜査官であり東都警察の捜査官と違うと言う現実に目が行った。

「どれも他愛の無い悪戯程度で済んでいますか・・・こういう愉快犯はいつか暴走して・・・」

「要は大事になる前に捕まえろってことか？面倒だなあ。どうせならこっちに引っ越して来てくれるといいんだけど」

「そんなに都合よく行くわけ無いだろ？」

要の言葉に突っ込むカウラ。そのいつもどおりの情景に誠はいつの間にか癒されるようになっていた。

「で？なんでアタシがオメエの愚痴を聞かなきゃならねえんだ？」

誠達にとつてそこはリラックスできる溜まり場だった。お好み焼きの店『あまさきや』。いつものように報告書の修正が終わるとランが誘って豊川市市街のこの店に立ち寄るのが定番となっていた。

「そんなことおっしゃっても・・・麗子さんの担当は要さんじゃないですか？」

「いつからアタシがあゝの馬鹿の世話係になつたんだ？」

いつもならこういう席を避けて家に帰る茜がラーナを帰らせて誠達に付き合つと言い始めたところで誠も嫌な予感はした。茜は異常に酒が強かった。父親の嵯峨を考へてみると彼女がウワバミのように酒を飲むことは不思議には思えない。

だがそれが絡み酒になると分かつているから始末が悪い。しらふなら黙つて済ましている和服の似合う美人で済むが、彼女の酔い方は独特でこの人を見つけると徹底的に絡みながら酒を際限なく同じペースで飲み続けるのだから最悪だった。

今日も早速遼州同盟司法局本部の調整担当官秘書の大河内麗子少佐への愚痴を要に向かつてもう三十分も続けていた。

「彼女が語学が得意なのは分かりますよ。確かに胡州の高等予科学校から海軍大学校に直接入学なんて十年ぶりの快挙なもの分かっています。でも・・・」

「だからあいつはアタシの担当じゃないんだよ」

要は右ひじを握り締めながら体内プラントでアルコール分解ができるサイボーグの自分とほぼ同じペースでウォッカを飲み続ける茜に辟易していた。それもそのはず、そのウォッカは要のボトルキープしている酒である。茜はまるで意に介さずに次々と手酌で杯をおる。

「いいんじゃないの。聞いてあげなさいよ。タコ中佐も困っているみたいだから解決したら何かおごってもらえるかも知れないわよ」

さつきから茜の酔い方が面白いので烏龍茶に切り替えて観察を続けているアイシャがつぶやく。タコ中佐ことランの先任に当たる実働部隊隊長の明石清海中佐が調整担当官をしており、その秘書の麗子の傍若無人なお嬢様気質に時々泣き言を漏らすのを誠も聞いた事があった。

「仕方ねえじゃないか。司法局は人材的には隔離病棟扱いされてるからな。ああいうテストは得意だけど実際の運用はまるで駄目で口ばかり達者な人間も組織つてものにはいるんだよ」

そう言つと苦々しげに要はグラスを傾けた。

「本当に・・・一般論」

そう言つと茜はまた空になったグラスに勝手にウォッカを注いだ。

「あのなー。そんな強い酒割らずに飲んだら胃が焼けんぞ」

四人がけのテーブルに誠とカウラ、アイシャと座っていたランの言葉にうれしそうに茜が振り向く。

「だってせっかく蒸留して濃くなったアルコールですよ。そのまま飲まないともったいないと思いませんか？」

「もったいないねー」

呆れたというようにビールを飲み干すラン。その子供にしか見えないのに浮かぶ苦々しい表情につい誠が噴出した。

「それにしても・・・いつもすいませんね」

「良いのよクラウゼさん。これで要さんがまたボトルを入れてくれれば助かるもの」

そう言つて気を利かせて女将の家村春子がビールを運んできた。誠とランは二杯目。アイシャとカウラは相変わらず烏龍茶を飲み続けていた。

「なんですの？隠し事？今日はわたくしのおごりにしますからどん

どん飲んでいただいて結構ですよ」

「じゃあアタシの入れるボトルもか？」

要の一言にキツと目を向ける茜。

「すみません、警視正……」

「いいんですよ。焼酎なら入れてあげる」

「アタシは焼酎は飲まないんだけどなあ」

急に機嫌が良くなる茜。多少はアルコールが回っているらしいのを確認してなんとなくうれしくなって誠はビールを飲みながら焼酎に手を伸ばそうとした時だった。

茜の通信端末が呼び出しの音楽を奏でた。

「ちょっと待ってくださいね」

そう言う茜は周りを気にするようにして立ち上がりそのまま店の奥のトイレへと消えていった。

「どうした・・・事件か？」

要はそう言つとウオッカの入ったショットグラスをあおる。

「まあ法術特捜の捜査官はいまだに嵯峨警視正一人だからな。代わりがないのはつらいんだ」

カウラの言葉に誠も頷く。同盟司法局と東都警察の関係は決して良好とは言えない。東都警察も半年前の『近藤事件』以来自分の能力を隠していた警察官に召集をかけて独自の法術犯罪対応部隊を設立し、さらに先月には一般からの法術師の応募にまで踏み切つているとはいえ、法術犯罪のノウハウのほとんど無い東都警察の法術師を同盟司法局が一本釣りで獲得することなど夢のまた夢の話だった。

「でも茜ちゃんだからいいのよね。私なんかあんなに飲んだら倒れちゃうわよ」

「ありゃあ特別な血族だからな。楓も叔父貴も酒はいくらでも飲みやがる」

要の言葉にさすがのアイシャも同意するように頷いた。

トイレから出てきた茜の表情はほとんど素面とっていい状態だった。

「すみませんけど豊川警察署までのタクシーを手配してただけません？」

「普通のタクシーでいいんですか？できれば助手とかになってくれる人も乗れるような車のあてならありますよ」

紺色の留袖の襟元を気にしながら茜はアイシャに声をかけた。アイシャもあてがあるというように笑みを浮かべる。

「またパーラか・・・かわいいそうだな」

要が同情するのも当然だった。運用艦『高雄』の火器管制官パラ・ラビロフ中尉。アイシャやカウラと同じ人造人間の『ラスト・バタリオン』として生を受けた彼女だがそれ以上に隊員達には同情の目で見られる女性士官だった。

ともかく運が無い。保安隊に配属されてすぐに問題となった『高雄』機関長槍田司郎大尉との関係。誠はあまり興味が無いが彼の上司の技術部長許明華大佐の態度から見てそれがかなり酷い態度を槍田が取ったらしいことは分かった。

そしてなんと言っても当時操舵手だったアイシャといつでも行動を共にしていたのが運の尽きだった。

趣味に関してはいくらでも暴走する。人使いの荒いアイシャとの腐れ縁は隊員達の多くが同情するところだった。

「いいじゃないの。あの子の車だって走って何ぼでしょ？」

さも車をパーラの運転で借りることが当然というような顔でアイシャは端末にパーラのアドレスを打ち込んだ。

「豊川警察署・・・島田君がいたら逃げ出すわね」

自分のピンク色の髪をなでながらパーラは後部座席に乗り込む誠達を見ていた。明らかに人造人間と分かるその髪の色。恐らく夜中の警察署では目立つだろうなどと考えながら誠は要に押し込まれて三列目のシートに押し込まれた。

「別に交通課にお話がある訳ではないですもの。これもお仕事。割り切ってもらわないといけないですわね」

そう言いながら助手席の茜は後ろでニヤニヤ笑っているアイシャの顔をのぞき見た。

「それより何があったんですか？まさか例の他人の法術能力を使って悪さをする暇人が何かこの近辺でやらかしたとか・・・」

アイシャの問いに答えずにそのまま前を向いてしまう茜。そしてカウラの乗車で車は動き出した。

「ちゃんとベルトはしてくださいね」

そう言った相手が必要なのは誠もすぐに分かった。いそいそと要がシートベルトを締める。

「何をしたんですか？」

カウラの問いに一度ためらった後茜は口を開いた。

「今度は時空間制御系ですわ。能力者は70代の女性。自転車で走っていたところで急に自転車が加速しているように感じられて下りてみたら時間がずれていて転倒って話よ」

「なんだよ婆さんが転んで怪我でもしたのか？それでも事件かよ」

要の言葉を聞くと機嫌を損ねたというように茜は前を向いてしまふ。パーラはそんな車内のごたごたに関係したくないというように警察署に続く大通りへと大型の四輪駆動車を進めた。

「一応法術の発動に許可が必要になったのは皆さんもご存知ですよね。神前曹長！」

「はい！」

同年年とはいえ一方は司法局のエリート。誠は士官候補生崩れの新米下士官。呼ばれたら答えるしかなかった。

「法術の発動は市街地では自衛的措置以外は原則として全面禁止。違反した場合には30万円以下の罰金か6ヶ月以下の懲役が科せられます！」

「・・・ということですね」

先ほどあれほど飲んでいたのが不思議に思えるくらい平然と茜はそう言っただけで振り返った。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 45

「厳戒態勢だな・・・やりすぎじゃ無いのか？」

目の前に豊川警察署が見えるついでに要はつぶやいていた。誠もその意見には同感だった。

すでに二台のパトカーがパーラの四輪駆動車を置いて外に飛び出していく。正門を通れば早速警棒を持った警察官に止められた。仕方なくパーラは窓を開いた。

「済みませんが・・・どちらの・・・うわっ！」

窓に突っ込んできた警官は思わず車内のアルコールのにおいに驚いたようにのけぞった。

「ああ、私は飲んでませんから！」

「そんなことよりも・・・これ、身分証」

厄介者を見つけたという表情の警官に茜が身分証を差し出す。その中を見るとすぐに警官は身じまいを整えて敬礼した。

「そちらの奥が空いています！」

「有難う」

警官の態度の豹変に楽しそうな顔をしながら茜は着物の襟元を調える。

「過剰反応だな」

「うちが鈍感なだけよ。結構法術に対する誤解はあっちこっちであるものなのよ」

カウラの言葉をアイシャがたしなめた。誠もこの警察署の対応がある意味今の東和を象徴しているような気分になってきた。

「はい、到着」

パーラのその一言に早速二番目の席のランとカウラが飛び出していく。

「元気だねえ」

そう言いながら要はなかなかドアを開けようとしなないアイシャの後頭部を小突いた。

「何するのよ！痛いじゃないの！」

「そりゃそうだ。痛くしてるんだからな」

いつもの要とアイシャの小競り合いに苦笑いを浮かべながら誠は仕方なく反対側のドアから外へ出た。夜だというのに警察署の明かりはかなり煌煌と夜の空を照らしていた。

「それじゃあ行きましょう」

着物の袖を気にしながら助手席から降りた茜の案内で誠達は署の建物に向かう。

「婆さんがひっくり返って軽い怪我をただけでこの始末か？」

「法術の仕組みがまだよく分からないんだ。警戒するのにはこれでも不十分かも知れないぞ」

カウラの言葉を聞き流すように要は一人入り口で立ち止まった。

「アタシはタバコを吸っているから先行つてろよ」

「仕方ないですわね」

いつものことなので慣れているというように茜はそのまま入り口の戸を押して署に入る。

「法術特捜の方ですか？」

茜の紺色の落ち着いた風情の和服。それなりに有名らしくすぐに警部の階級章をつけた初老の捜査官が声をかけてきた。要以外は全員が170センチ以上の長身の集団である。しかも島田が免許取り消しになった時などに顔を出していたのでそれなりに知名度はあった。

「この様子はちょっと意外ですわね」

「ようやく東都警察も法術に関するノウハウを得たのですからこれからは反転攻勢に転じますよ」

明らかにこちらを舐めているような態度にカウラが頬を膨らませる。

「どうせ特殊法術部隊の受け売りじゃないの。当てにしているのかしらねえ」

小声でアイシャが陰口をつぶやくのも誠が見ても当然の話だった。

「ウォホン！」

初老の警部の咳払いに陰口をやめたアイシャと要だが、その目は完全に東都警察には法術師関連の事件捜査はできないと決め付けるような温かい目だった。

「じゃあわたくしにも見せていただけませんでしょうか？実地の検分等は済ませたんですわよね？」

茜が口を開くが猛烈なアルコール臭に警部は眉をひそめる。

「それはしらふに戻ってからのほうが・・・」

「これくらいはたしなむ程度ですの。それにこういう事件は初動捜査が犯人逮捕の鍵と言うのが信念ですから」

そう言つと茜はそのまま捜査官達がたむろしている階段へ向かうとする。必死になって警部が止める。

「その・・・酔いが醒めるまで・・・少し仮眠を取ってから・・・」

慌ててしがみつこうとする警部の手が袖にかかるのを嫌うように茜は身を翻した。

「そうですわね。お酒が入っているのは事実ですものね。それじゃあ明日早朝にはお伺いしたいので資料などをそろえておいていただ

けません？」

「ええ、揃えますから！ですから！」

土下座でもしかねない相手に軽く笑みをこぼすと茜は呆然と突っ立っている誠達の所にやつてくる。

「ベルガー大尉」

「は？」

「お部屋に泊めていただけませんか？」

突然の茜の申し出にぽかんと立ち尽くすカウラ。そしてその横ではニヤニヤ笑っている要とアイシャの姿があった。

「自分はいまいませんが・・・寮は狭いですよ。妹さんのお部屋は
かなり・・・」

「あの子は駄目。知っているでしょ？あの子の性癖」

大きくため息をつく茜に誠達はただ同情の視線を向けるだけだった。

「ふう」

水島勉はようやく部屋にたどり着いてコタツにもぐりこむと大きくため息をついた。そして自分が何をしたのかようやく分かってきて沸いてくる笑顔がとめることができなくなっていた。

「法術師・・・悪くないな」

久しぶりの自分の笑顔になんだか楽しくなってくるのが分かる。

半年前。会社を突然解雇された。理由は半月前に社で強制的に受けさせられた法術特性が陽性だったからだだった。組合に入っていた同僚達はそのまま団体交渉に入ったが、組合というもののアレルギ―を持っていた彼は一人で退職して量に半年間居住できるという条件で満足した。

実際あとで聞いてみれば自分の反応は他の法術師の反応とは違うということだった。なんでも空間に介入して時間軸や状態を変性させる能力や思考を読み取ったりする能力があるという話だが、彼にはそんな能力があるわけではなく、仕方なく学生時代の教科書を引っ張り出して法律の勉強を始めた。

再就職を諦めたのは正解だったと水島は思っている。

実際、法術師を歓迎しているのは軍と警察くらい。どちらも年齢制限で彼が応募できるわけも無かった。それ以前に人事一筋の彼が犯罪者相手に渡り合えるなどとは自分でも思っていなかった。そん

な彼にも転機が来た。

それは寮からの退去を勧告されてようやく東都湾岸のウィークリーマンションに腰を落ち着けた時期だった。

いつものように彼は勉強の疲れを癒そうとコンビニに入りビールを買い、そのまま会計をしようとレジへ向かった。湾岸地区はあまり治安がいいとはいえない。事実その時どう見ても堅気には見えない若者が勢いよく扉を開けて入ってきた。その時だった。いつもなら目を合わせることすらできずにレジで硬くなっている自分が何かを脳で感じた。

まさに脳で感じたという状態だった。そして心の中で叫んだ。

『はじける』

彼にとってはそれだけだったが、次の瞬間に起きた出来事は水島の予想を超えたものだった。

紫色のニッカポッカの男の髭が火で覆われた。何が起きたか分からないというように呆然としたあと、男はそのまま顔を抑えてのた打ち回り始めた。明らかに何も火の無いところから火が回り転げまわる男。

助けを呼ぶ仲間や店員を見ても誰も何も気づいていない。

『俺の力なのか？これが法術なのか？』

心の中でそう思いながらただ立ち尽くすしかない自分に気づくと苦笑いが浮かんできた。

法術適正があるが何の能力も無い。そんな思い込みが次第に変わっていくのを水島は感じていた。

街を歩けば能力を持ち腐れさせている多数の法術師に出会う。そしてその能力を使ってやるのが義務ではないかと思いつめていた。パイロキネシストがいれば近くのごみ置き場に火をつけてやった。空間干渉能力があれば近くの立ち木を切断して見せてやった。

『みんな色々できるんだぜ・・・俺達を見限った連中に一泡吹かせるくらい楽なもんだ』

にやける頬を引き締めながら水島はいつも思っていた。

この世界は力の無いのと力のあるものがあるというのは不完全な認識だと彼は考え始めた。

『力があっても使わなければ意味が無い』

そう言う訳で司法大学院の勉強の傍ら町を徘徊して彼等の力を使った。小さな小火で十分だった。ちよつとした車のタイヤを割ることで納得できた。

この世界が法術師を生んだのならそれにふさわしい待遇が必要になるはずだ。能力の上に眠るものに何の権利も無い。そう思いながら日々散歩を繰り返していた。

ただ最近警察の目が気になり始めていたところだった。司法試

験を目指すだけあつて警察が単純に能力者の摘発だけをしているうちには安心できた。

テレパシー能力のある暇そつな警邏隊員の思考を読み取つてみれば段々自分の能力が特定されてきていることを感じていた。だが同時に今のささやかな楽しみと化している通行人の能力解放はとめることができなかった。

幸い水島は豊川市の司法大学院に入学することができた。これで田舎の自分の力を知らない連中だけを相手にすれば言いとなると気が楽だった。

『さて、次は何をしようか』

部屋の中で大の字に寝転び天井を見上げながら湧き出す笑顔に耐え続ける。

『そう言えば豊川といえば保安隊・・・法術を最初に使った空気の読めない馬鹿がいたな・・・』

そんなことを思い出すと近くに寄つてみたいというような酔狂な気分になる水島だった。

「手がかりは無し・・・まあ期待はしていなかったがな」

ハンガー奥の用具室の中。大鎧の盾を誠に外してもらいながら力ウラがつぶやいた。節分の時代祭りでの武者行列。保安隊が設立されてから豊川市の時代行列の源平合戦武者行列は一気に歴史マニアに注目されるイベントになっていた。

基本的には士官は大鎧で馬に騎乗し、下士官以下は腹巻姿でそれに従う。

しかし、馬との相性が最悪のカウラは大鎧で一人歩いて行進していた。今日のグラウンド一周の練習の時も嵯峨の顔で借りた乗馬クラブの馬との相性の悪さを再確認させるだけだった。

「それにしても・・・アイシャ」

鎧の胴を外しながら要が大きいため息をつく。その目の前には他の隊員とはまるで違う鎧姿のアイシャがいた。

「なに？要ちゃん」

「その鎧やつばおかしいだろ？おかしいと思わないのか？」

「いいじゃないの。これは私の私物なんだから」

そう言って鉄でできた胴を外すアイシャ。彼女だけは戦国末期の当世具足姿だった。剣術道場の息子で多少そういう知識もある誠も

違和感を感じはするが、どうせアイシャに何を言っても無駄なのは分かっているのだ。ただ黙ってカウラが鎧を脱ぐのを手伝っていた。

「そう言えばシャムは？」

要は床机に腰をかけて一月の寒さを身に受けながらも平然と扇を弄っている吉田に声をかけた。

「あいつか？馬の世話だよ。それにしてもなんだ・・・お前等の追っている事件」

「他人の能力で相撲を取る卑怯者のことだろ？何か知っているのか？」

そう要に言われるとむっとしたように吉田は扇子を叩いた。

「犯人の拠点が東都西部に移ったと読むべきか・・・たまたまこちらに来て悪戯の虫が騒いだのか・・・」

「吉田少佐。もしかして住民認定の記録を全部見たんですか？」

呆れたように口を挟んだ誠に頷く吉田。

「でもなあ・・・法術関係の資料は極秘扱いだ。俺でも簡単には開けない。そこで法術特捜の名前で捜査令状を・・・」

「無茶をおっしゃらないでいただけます？」

そこにはいつの間にか鎧兜の並んだ部屋にふさわしいような和服姿の茜が立っていた。

「あっお嬢さんいらしたんですか？」

「吉田少佐。そんなに卑屈にならないでいただけます？」

いつものように優雅に空いた丸椅子に腰掛ける。当然のようにその隣には荷物を持ったラーナが立っている。

「卑屈にもなりますよ・・・捜査に関しては嵯峨の親父が助けを呼ぶまで手を出すなって言われてますし」

「じゃあさっきの話だとすでに手を出しているみたいですよ」

いつもの氷のような流し目で吉田を一瞥して黙らせるところは茜の父が遼州一の悪党と呼ばれる嵯峨惟基であることを再確認させた。

「でも今のうちに事件を起こして喜んでいる馬鹿をあぶりだすのは得策じゃねえのか？今は人死にが出ていないんだ。そのうち暴走してどうなることやら・・・」

要の言葉には誠もカウラも頷くしかなかった。

「でもそうなれば東都警察は面目丸つぶれよね。税金泥棒の地位がうちから移るのは結構なお話だけど・・・」

鉄製の重い胴を外して伸びをしながらのアイシャの言葉。誠はやはり自分が組織人であることを再確認した。

「よくわかつているじゃねーか」

そう言って歩いてきたのはすでに勤務服に着替えを終えて半分笑顔を浮かべているランだった。

「今回は多少は東都警察に活躍してもらわなきゃなんねーんだ。きついで、人に手柄を取らせるってのは」

頭を掻きながら部屋の隅の折りたたみ椅子を小さな体で運んでくるラン。

「クバル力中佐！お願いがあるんですが！」

「アイシャ・・・萌えたから抱きしめさせてくれってーことならお断りだかな」

アイシャを警戒するような瞳で見つめるラン。それをみてカウラが噴出しそうになる。

「信用無いですねえ。アタシ」

「まあいつものことだからな」

そう言いながら要は小手を外す作業に取り掛かった。

「それよりクラウゼ。お願いはどーした？」

ようやく話を戻そうとしたラン。しばらくアイシャは話を振られたことを気づかないように突っ立っていた。

「早く話せよ。くだらねー話ならぶん殴ってやるから」

指を鳴らしながら小さなランがすごんで見せる。誠から見てもその光景はかなり滑稽だった。小学生がプロスポーツ選手を脅迫しているようにしか見えない。つい笑いがこみ上げてくる。

「私達を派遣してくれませんか？豊川署に」

「は？」

時が止まったようだった。誰もがアイシャの言葉の意味を理解できずにいた。ただ一人吉田は納得したように頷いている。

「あれか。法術関係捜査の実績はあるからな。その経験を生かしての助っ人と言うことなら・・・受け入れてくれるかもしれないねえ」

吉田の言葉にようやく全員がアイシャの意図に気づく。そしてその視線は自然と法術特捜の全権を握る茜へと向けられた。

茜は襟元に手をやりしばらく考えていた。

「実績ならありますよ。厚生局事件の報告書は豊川署でも閲覧できるはずですから」

アイシャの言葉に小首をかしげて考えにふける茜。

「アタシは無理だが・・・クラウゼにベルガーに西園寺に・・・神前。これで十分だな」

「え？島田君達は？」

そんなアイシャの言葉に首を振るラン。彼女も一応この部隊の主である技術部部长、許明華大佐の部下に隊を離れる命令は出せないことは誰にも分かっていた。

「お前等經由なら色々情報も豊川署に流してやれるし・・・あちらも所轄の膨大な資料を扱っているんだ。俺等の知らないことも知ってるはずだしな」

なんとも他人事のように吉田はそう言つと立ち上がった。

「いいんですか？隊長の許可は・・・」

カウラの言葉ににんまりと笑うラン。そして満足げに頷くと足袋を脱がないでいるカウラの足に手を伸ばした。

「おい、ちよつと足を上げろ」

いきなり手を出されて驚いたカウラはランに言われるままに足を上げた。そしてそのまま椅子の横棒に載せた右足の旅をとめている紐を緩め始めるラン。

「実は・・・おやつさんから言われててな。今回の件。誰か志願する奴がいれば捜査に当たらせてやれってよー」

器用に紐を解いていく小さなランの姿を見ながらアイシャが少しだけ目を潤ませていた。

「ランちゃん・・・」

「おやつさんのお考えだ。それとアタシのことを今抱きしめてみる・・・ぶつとばすからな」

そう言われるとアイシャはがつくりとうつむいてしまう。それを見ながら黙々と作業を続けてワイシャツに袖を通してゐる要が大きく頷いていた。

「叔父貴だからな・・・で、現在の豊川署の捜査担当の部署は？」

「あそこは捜査二課だそうだ。しかも専従捜査官はいねー」

ランはカウラの右足の足袋を脱がせると今度は左足に取り掛かる。そしてそんなランの言葉に予想通りだというように要は口笛で応じた。

「軽犯罪ですか・・・まあ法術の違法発動だけならそんな感じですよね」

誠も胴丸や上半身の小手などを自分でとって足袋を脱ぎ始める。その様子を確認するとランはそのままカウラの左足の足袋を脱がせた。

「まあそんなところだ。危機感が足りねーんだろうな。この前はあれほど大騒ぎしたのに被害が小さければなかったことにする。まったくお役所仕事って奴さ」

「アタシ等もお役所ジャン」

「くだらねーことやってねーで早く着替えろ！」

ランの言葉に舌を出すと要はすばやく鎧の胴を元の箱に戻した。

「私が・・・専従そつさかつの・・・」

「馬鹿！噛むんじゃねえ！」

ずんぐりむつくりの豊川警察署の署長を前にして誠は緊張のあまり挨拶すらできない有様。そして思い切り要に足の親指をパンプスのかかとで踏まれた。

「まあ緊張しなくても・・・まあかけてくれます？」

小太りのまだ20代に見える署長は白髪が混じっている副署長が明らかに敵意で武装して誠達を見ているのに比べてリラックスして応接ソファーに誠達を座らせた。

メンバーは誠、要、カウラ、そしてアイシャ。いつものように自分の上官で運用艦『高雄』艦長のリアナの頼みに弱いことを利用してこのメンバーに紛れ込んだアイシャ。悠然と座って小太りの署長に色目を使うところはいつもどおりのことだった。

「法術となると・・・うちでは素人捜査しかできないもので」

「こちらはまだ捜査のノウハウを蓄積している段階です。これからはさらに凶悪化、組織化が予想されますからできるだけ早く対応することが必要になります」

「とうちの責任者は申しております」

署長に答えたカウラに茶々を入れる要。その様子を見てどうやらキヤリアの署長が彼女の気に入らないことに気づいてなんとかこの場を乗り切ろうと誠は考えはじめた。

アイシヤは当てにならない。おそらく彼女も要とこの小太りの署長の相性の悪さには気づいているはずだった。だが当然のことながら彼女の行動原理は『面白ければそれでいい』である。引つ掻き回しにかかられたら誠も分が悪い。一方カウラはそんな相性などは考えることもない。ただ今回の事件が本当に豊川市に舞台を移したのかを知りたいと言う職業倫理に基づいて動くだけ。

「で・・・この署に法術適正者は何人いるんですか？」

早速カウラが訪ねるが、その言葉に曖昧な笑みを浮かべる初老の副署長。署長はそちらを向いてなにやら複雑な笑みを浮かべていた。

「法術適正は・・・プライバシーの問題がありますから・・・」

「自己申告が原則となつているので。それに適正者で能力的に貴重な人材はすべて本庁の機動部隊に転属になつて・・・」

「つまり手駒で使えるのはいない確立が高いと・・・使えねえな」

要の言葉に署長の米神が痙攣するのを見て誠の胃がきゆるきゅると痛んだ。

「そういえば大丈夫？ 神前・・・一応巡査部長扱いでよかったんだよね」

誠達はすでに東都警察の制服に着替えていた。誠は巡査部長、カウラと要は警部補。そしてアイシャは警部の階級章をつけられている制服が支給された。

「おい、とっちゃん坊や。階級付きの制服配ったのは teme 工だろ？」

明らかに喧嘩腰の要。誠は止めようと手を伸ばす体勢で話を聞いていた。

「いやあ、僕は事務方だからねえ・・・」

「事務屋だと現場のことがわからねえって言う気か？ うちでさえ管理部門の大將はアタシ等の行動も把握済みだぞ。なんだか東都警察も・・・」

「黙れ、西園寺」

カウラが思い切りテーブルを叩く。その様子に驚いたように署長と初老の警視は顔を見合わせた。

「一応、これでも仲がいいんですよ・・・ねえ？」

さすがに要の暴走が予想を超えていたのでフォローを入れるアイ

シヤだが、にらみ合う要とカウラを珍しそうに眺める署長の目に浮かんだ軽蔑のまなざしに怒りのようなものを覚えているらしいことは誠にも分かった。

「まあ・・・とりあえず部屋は用意しましたから。そちらでこれらの打ち合わせをしてもらいましょう。杉田君」

ぼつちやりとしたキャリアの署長の言葉に直立不動で応える警視。彼が入り口に向かうのを見てカウラとアイシヤは敬礼をした後、食って掛かるうとする要を無理やり引っ張ってドアへと向かった。

「失礼します！」

置いていかれそうになった誠もそそくさと敬礼を済ませるとそのまま要達を追った。

「キャリアの天狗の鼻をへし折るのはいいんですがねえ・・・」

叩き上げのような風貌の警視の苦笑いに付き合いながらそのまま階段を下りる。交通関係の書類を扱っているらしい部署の看板の周りに群がる市民達を横目に見ながらそのまま二階のフロアーを横断した。

「やっぱり仕事をしているんだねえ・・・偉いさんがいようがいまいが関係ないか」

要の愚痴に杉田と呼ばれた初老の警視は苦笑いを浮かべた。

そしてトイレを過ぎて更衣室を通過してそのまま人気のない区画へと誠達は案内された。

「ここです」

「ここです？」

明らかに嫌な顔をする要。だが誠も同じ気持ちだった。それを無視するようにドアを開ける杉田。

「用具室か。結構片付いているんだな。うちの部隊とは・・・」

「でも人のいることじゃないんじゃないの？」

カウラは何とか自分を納得させるようにつぶやくがそれをアイシヤがぶち壊す。確かに何もなかった。端のほうに書類のダンボールが山積みになれ、とってつけたようにいつのころの時代のものかと聞きたくなる端末が置かれた机と椅子が四つ並んでいる。

「実は・・・」

杉田氏が口を開くまでもなく誠達はこの惨めな有様が東都警察上層部の意図だと言っていることを理解していた。

同盟厚生局事件。一応外面的にはテロリストによる法術データ強盗事件と言う発表で落ち着いているが、三ヶ月前のその事件は厚生局による違法法術研究の事故が原因であり、その為に東都警察と保安隊が対応に当たったことは司法関係者なら誰もが知っていることだった。

その時、虎の子の法術対応即応部隊を投入しながら何一つ点数を稼げなかった東都警察が、暴走する実験体を対峙して見せた誠達に明らかに嫉妬していると言う噂は散々聞いていた。

そして結果が目の中の哀れな現状だった。仕方がないというように顔を怒りで引きつらせながら椅子に座るカウラ。要はもう怒りを通り越して呆れてそのまま窓から外を眺めている。

「空調はちゃんと効くのね」

そう言いながらそのまま奥の空調機を確認するアイシャ。誠はただ黙って杉田と言う警視の顔を眺めていた。

「ご不満でも？」

一応は東都警察の幹部職員である。にらみを利かせるように言われればただ黙って頷くしかない誠。

「一応・・・捜査関係の資料は閲覧できるのですか？」

「当然です。ただし・・・プロテクトがかかっている部分については・・・」

「安心しな。ハッカー吉田は本隊でお寝んねだよ」

半分やけになったように要は叫ぶとそのまま近くの席に腰を下ろした。

「それではよろしく願いします」

そう言つと杉田は見放すようにドアを閉めて消えていった。

「本当にこうしていいんですか？」

七草粥を食べ終えた誠の言葉に同調するように要も頷いている。勤務地が変わっても保安隊の寮の生活は変わらなかった。いつものように朝食を食べ、早出の技術部の隊員達がどたばたと階段を駆け下りるのをのんびり食堂で聞きながらお茶を飲む。その日常は以前のそれと変わりは無かった。

「東都警察も多少は経験を積んでるんだから。それに茜お嬢様からの資料じゃ分からないデータも手に入ったわよ」

アイシャはそう言うとおもむろに目の前のどんぶりを横にどけて腕の携帯端末の映像を拡大投影した。

「得意とする法術の種類か・・・」

「茜もまだまだだな。関与の疑いのある事例を見つければそれなりに資料としてまとまるじゃねえか」

カウラと要はアイシャの作った東都警察の違法法術能力発動事件に関わるデータを眺めて感心した。

「パイロキネシスが半数。空間干渉や空間制御が続いて・・・当たり前だけど体再生機能発動は無し」

「やっぱり放火魔みたいな奴なんだろうな。火事はなんとなくすきつとするからな！」

「要ちゃん。あなたが犯人なんじゃないの？」

「ちげえよ！」

要が軽くアイシャの頭をはたく。誠が回りを見れば二人の人物が誠達の行動を監視していることに気がついた。

一人はカウラのファンクラブ『ヒンヌー教』の教祖を名乗る菰田邦弘主計曹長。回りにアイシャから『キモイ』と呼ばれている隊員達を引き連れながら真剣に画面を見るカウラに萌えていた。そしてもう一人。

「今回は俺の出番は無いんですね・・・」

明らかに不満そうに声をかけてきたのは技術部特機整備班長の島田正人准尉だった。

「なにか？死なないって言うだけで捜査に参加できると思うなよ」

要の一言に明らかにカチンと来た様に頬を膨らませる島田。彼は純血に近い遼州人であり、意識で体細胞の再生を行なうことができる再生系の法術適正の持ち主だった。

「そんなことは分かっていますよ！」

「おい、その面は『俺は厚生局事件の時も付き合っただけですよ！今回だって！』とでも言いたいのか？あ？」

ニヤニヤと笑いながら要のたれ目が島田を捉える。おずおずと頷く島田。そしてそこにランが当然のように現れたのでおっかなびつくり島田はランに敬礼した。

「おっと、ずいぶんシリアスな展開だったみてーだな。菰田、今日は粥か？」

どう見ても小学生にしか見えないランを見ると喜んで菰田のシンプアの一人が厨房に駆け込んでいく。その様に呆れたと言うようにため息をついた後、平然とランは誠の向かいの椅子に腰掛けた。

「島田。アタシの判断が不服みてーだな」

「不服と言うか・・・一応自分にはアサルト・モジュール整備班長としての責任がありますから・・・」

「おー。それが分ってりゃいいんだがね」

そう言つとランは七草粥を受け取り静かに食べ始めた。その様子に菰田の取り巻きの一部にある秘密結社『エターナル幼女同盟』の会員達が萌える瞳でその様子を眺めていた。

「島田よー。アタシ等の仕事の目的はなんだ？」

「市民の安全を守ることです」

即答する島田に満足げな笑みを浮かべてランが頷く。彼女はそのまましばらくスプーンを握りながら考えるようなポーズをとった。

「おい、そこ。写真を撮ったら金よこせよな」

密かにランの萌えるポーズを写真に撮ろうとした菰田の隣の技術下士官に鋭い目つきを送るラン。

「すいません！すぐ消します！」

「消すくらいなら最初から撮るんじゃないよ」

苦笑いを浮かべながらそう言うとき再びランは静かに食事を再開した。その様子をただ待たされ続けると言うように経ったままランを見下ろしていた。

「一番必要な場所に一番適した人物を配置する。アタシは隊長からその権限を委託されて副隊長をやってるんだ。テメーの力が必要なら死にそんな状態でも引つ張り出すからな」

「まあ島田は死なないけどな」

ランの言葉に茶々を入れた要をランは殺気がこもっているかのような視線でにらみつけた。

「ともかく島田。オメーは明華にもらった仕事をちゃんとしろ。終わったらアタシが明華に話をつけてやる。それでいいか？」

ランに見上げられれば島田も断れなかった。ただ力なく頷く島田を見て満足げにランはさじを進めた。

「しかし・・・次の事件はこっちで起こるんですかね？ たまたま気まぐれでこっちで事件を起こしてまた都内に帰っちゃったとか・・・」

「心配性だなアイシヤ。それならそれでいいんだよ。アタシ等の管轄の外の事件と言うことになる。茜の嬢ちゃんがこれまで作った隊長のコネを使って犯人を挙げれば儲けものだな」

淡々とランがつぶやく。そしてその言葉が響くたびに菰田達のボルトテージが上がるのが嫌でも見える。ささやき、つぶやき。その中に『幼女』と言う言葉が混じっているのewith 爆発するかと誠は気をもんでいた。

「ああ、それと菰田！」

「はい！」

ランに呼びつけられてシンパに守られながら立ち上がる菰田。だがその回りの連中は明らかにそんな命令口調のランの態度に萌えていた。

「飯食つたら出勤だろ？無駄話してるんじゃないよ！」

「了解しました！菰田曹長、これより駐屯所へ向かいます！」

さすがにランの怒りが爆発するまでに去ろうとするが、Mっ気のある隊員が残ろうとするのを何とかだめすかして食堂を出て行く。

「アイツ等何しにここに配属になったのかわかってんのかねー」

そう言つと最後の一口を口に運ぶラン。さすがの誠もその姿には萌えを感じざるを得なかった。

「誠ちゃん。私達のフィギュアよりもランちゃんの方が売れそうよね」

「クラウゼ。つまらねーこと言つてるとはたくぞ」

そう言いながらランはテーブルの上の粥のどんぶりを持って立ち上がった。

「ったくなんであの餓鬼だけ寮に住み着いてるんだ？」

豊川警察署の北側の狭い与えられた部屋の椅子で伸びをしながら
要がつぶやいた。

「それを言うなら私達もじゃないの。あそこは一応男子下士官寮なんだから。私もカウラちゃんも要ちゃんも『男子』でも『下士官』でもないんだから・・・」

「一応神前の護衛と言う任務があるんだ」

口を挟んだカウラをにやけたたれ目で見つめる要。それを見てカウラは恥ずかしげに端末に目を向けてキーボードをたたき始める。

「クバルカ中佐はあの格好だとどうしても部屋とか借りるのが大変だとか言っていましたよ。小学生低学年の一人暮らしなんて誰も部屋を貸してくれませんから」

「そらそうよね。あんな小さくてキュートな女の子を見つけたら私だって付いて行っちゃうもの」

「恥ずかしげもなく言うな」

アイシャの言葉に一言突っ込むと再び画面に向かうカウラ。しばらくカウラのキーボードを叩く音ばかりであたりを沈黙が支配した。

突然要が手を叩く。全員の視線が何事かと彼女に向かった。

「おい、神前。もう一回言ってみろ！」

「驚かせないでくださいよ！何をですか！」

誠の言葉に今度は立ち上がって襟首をつかんで引つ張りあげる要。驚いたアイシャが要の手にすがりつく。

「なによ、要ちゃん。ランちゃんが部屋を借りられないのがどうしたのよ」

「そつだよ！馬鹿だなあ。アタシ等がこのちんけな部屋から出るにはそこからはじめなきゃならなかったんだ！」

「うるさいぞ、西園寺。そんな何かつかめる糸口でもあれば苦労しないと思わないのか？」

カウラにまで言われると憤慨したように彼女の端末を占領してデータを入力し始めた。

「気が付かなかった・・・馬鹿だった・・・」

「要ちゃんが馬鹿なのは昔から知ってるけど・・・」

そんなアイシャの一言にチョップを入れると要は画像を表示させた。

「不動産情報？賃貸物件の契約状況・・・？」

誠は不思議そうにどうだと言わんばかりの要の表情を見ながらつ

ぶ
や
い
た。

得意げな要。それとは対照的に誠もカウラ、そしてアイシャもぽかんと彼女の笑顔を見つめた。

「要ちゃん・・・出て行くのね・・・。うるうる」

「勘違いするんじゃないやねえ！賃貸契約の全容を把握するんだ」

要はそう言うとな度はポケットからコードを取り出し自分の後頭部のジャックに差し込んで端末とつながる。意識が途切れたように首が折られるがそのまま画面には検索モードの様子が映っていた。そしてそれを見てカウラが手を叩いた。

「そうか。法術師が部屋を借りれば足が付くか」

「そう？検査なんて東和は任意じゃないの。法術適正を受けている人間が犯人と決まったわけじゃないでしょ？」

アイシャは半分期待はしていないと言う感じだが、その視線は明らかに要の検索の模様を眺めているものだった。

「法術適正を理解している人間の犯行だと僕は思いますよ。人の能力を横取りして発動させるんですから。法術に興味のない人物の犯行だとはとても思えないですから」

「でも最近東都の都心からこちらに引越してきた人間なんて山ほどいるじゃない。いちいち調べるの？」

「しかたねえだろ・・・235世帯か・・・所持持ちは外しても156件」

要の言葉にうんざりしたと言うような顔のアイシャ。だが彼女の肩をカウラが叩いた。

「何万人と言う豊川市の人口から比べればわずかなものだ。四人で見回れない数じゃない」

「でもその中に犯人がいると言う保障はあるの？そもそも法術適正検査は匿名で行なわれてるのよ。その156人だって一人も法術師がいないかもしれないじゃない。いたとしても嘘をつかれれば・・・」

そんな言葉を吐くアイシャをケーブルを首から外した要が哀れむような目で見上げる。

「なによ・・・要ちゃん」

「お前。馬鹿だろ」

「馬鹿は要ちゃんですよ？」

いつもの挑発合戦にうんざりした顔でカウラと誠は見詰め合った。

「アタシ等はこの豊川に犯人が来ていたときに意味があるから出向してきたんだ」

「そうよ。当然じゃないの」

「はー・・・」

アイシャはまだ分らないと言うような表情をしていたがその曖昧な顔が突然ゆがんだ。明らかにアイシャも要の言いたいことがよく分かったようだが彼女が要に頭を下げるつもりがないことは誠にもよく分かる。

「犯人を捕まえなきゃ意味がないんじゃないの？」

「そこまでは私達の仕事の範疇じゃ・・・」

「カウラちゃんは黙っていて！」

八つ当たりを食らったカウラが口をつぐむ。誠は噴出しそうになりながらいらしているアイシャを眺めていた。

「なんだよ。別に戸別訪問をしようというわけじゃないんだ。すべての転居に関わった不動産屋を訪ねて回る。簡単なことが分からねえかなあ」

「そんな・・・一応不動産業者も個人のプライバシーに関することについては・・・」

そう言いながらアイシャは頭を掻いた。元々そう言う任意の捜査においてはかなり高圧的に対応して結果を残すのが得意な要である。プライバシーとか守秘義務などという一般社会の常識は要の捜査にはありえなかった。

「おう、抗議するんだろ？さっさとええよ」

「むー・・・」

膨れるアイシャだが、カウラの携帯端末が着信を注げたことで誠達の興味はそちらに移った。

「はい、ベルガー大尉ですが・・・」

端末に出たカウラ。要は卓上の画面を操作して相手の画面を映し出す。そこには先日この部屋に誠達を押し込めた杉田という警視の顔があった。

「・・・今度はパイロキネシス暴走です。場所は・・・」

誠達はすでに自分達が後手を踏んでいることにようやく気が付くことになった。

「怪我人も無し。いいことじゃねえか」

全焼した廃屋を見上げながら要がつぶやいた。すでに能力暴走を起こしてパニック状態に陥ったパイロキネシス能力者の豊川商業高校の女子生徒は警察署へ向かうパトカーに乗せられて消えていた。

あたりは消防隊員と鑑識のメンバーが焼け焦げた木造住宅の梁を見上げて作業を続けていた。

「これでもう例の犯人は豊川市に拠点を移したと考えるべきかな・
」

「カウラちゃんが珍しいわね。意外とそういうところで結論を急ぐ癖があったじゃないの」

「まあ私も『近藤事件』以降は考え方も変わったからな」

黄色いテープを持ち上げて現場に入るカウラ。アイシャや要、誠もその後に続く。焦げ臭い香りが辺りに漂っていた。現場の鑑識の責任者らしい髭面の捜査官がカウラに敬礼をした。カウラ達も敬礼をしながら辺りを見回した。

「ああ、保安隊さんからの出向している方たちですか」

「よくご存知で」

「まあ・・・うちは狭いですから・・・それに噂はかねがね」

含むところがあるというような笑みにカウラもあわせて乾いた笑顔を浮かべた。

「連れていかれた女の子が関わっているんですか？」

誠の言葉に頷きながら責任者らしい巡査部長は誠の階級章を見ながら頭を掻く。

「この道路から見える壁が一気に発火したって言う証言がありましたね。物理的にそう言う燃やし方をすれば出る科学物質の反応もないですから・・・まず間違いなく彼女のパイロキネシス能力が利用されてこの建物が燃えたのは事実だと・・・」

「で、その餓鬼が何か言ってたのか？」

警部の階級章の要に見つめられると頬を緊張させながら巡査部長が頭を掻く。

「自転車でこの道に入ってしまったら意識が朦朧として気が付いたらこの廃屋が燃えていたと・・・」

「気が付いたら？放火の意図があったかどうかは確かめて無いんですか？」

やけに丁寧に口を挟む要にむっとした表情を浮かべる鑑識の責任者の巡査部長に誠はいつの間にか同情していた。

「ですがこれは都内で昨年から続いている・・・」

「んなこと聞いてんじゃねえんだよ！」

口答えをする相手に要が切れた。突然の行動にあんぐりと口を開く鑑識の隊長の顔にアイシャが噴出す。

「あの餓鬼が嘘ついているとか考えたことがねえのか？あ？」

「しかし・・・それじゃああなた達はただの無駄飯食い・・・」

思わず本音が出て口をつぐむ鑑識の隊長。要はそれを見て満足げに頷く。

「要ちゃん。いじめはいけないのよ」

「いいだろ？合法的なストレス解消法だぜ」

「まったく趣味が悪いな」

いつものことなのでアイシャもカウラもニヤニヤと笑っていた。その様子が薄気味悪いと言うように鑑識の隊長は部下達の所へと足早に決めた。

「間違いなくこっちに來たんだな。人の禪で相撲をとる馬鹿が」

要のその言葉に一瞬で真顔に戻ったカウラとアイシャが頷く。誠

はただいつものように彼女達が暴走しないように見張っていた。

「でも・・・放火魔ってこう言う野次馬の中にいることが多いんですよね」

誠は話題を変えようと野次馬達に目を向けた。住宅街のお化け屋敷が延焼したことで野次馬達もなにやら不安げに東都警察の制服を来ている誠達を眺めていた。

「そりゃ実際に火をつけた人間の話だろ？この事件の主犯は火をつけるんじゃないかって火をつけさせるんだから心理も違うんじゃないのか・・・なあ、アイシャ」

「私に聞かないでよ」

迷惑そうに要に向かって言うアイシャ。誠はただ訳もなく野次馬達が増えていく様を眺めていた。

「ともかく例の不動産屋めぐりを始めねえとな。いつ人死にがでるかわからねえ」

要の言葉に誠達の顔に緊張が走った。法術関連の事件は誠がその存在を示して見せた半年前の『近藤事件』以来、増加の一途を辿っていた。好奇心で受けた法術適性検査で突然自分に力が宿っていることを告げられた人物が暴走する話はその手の話を一番知っている法術特捜の首席捜査官の茜から嫌と言うほど聞かされていた。

ほんのちよつとした好奇心でそれは始まる。それがいつの間にか人を傷つけるようになり、さらに重大な事件を起こすことになる。そんな典型的な法術関連事件。今回は趣が違うが確かにその様子を呈してきた。

カウラのスポーツカーに要に押し込まれて狭い後部座席に座らされてもその思いは誠を走り抜けていた。

「愉快犯ですかね」

誠の一言ににんまりと笑う要。そして次の瞬間誠の足は要のチタン合金の骨格を持った右足に踏みしめられた。

「痛いですよ！西園寺さん！」

「当たり前だ。痛くしてるんだからな」

要のそんな言葉に振り向いたアイシャが苦笑いを浮かべている。

「まだまだ小手調べ程度の気分だろ。この前の婆さんを標的にした時は珍しく空間制御で時間軸をいじると言う大技を使ったがまだ空間制御系の法術を借りて何かをするって所までは考え付いていないみたいだからな。アタシなら次は干渉空間展開能力のある奴を見つけて宝飾品店に忍び込んで・・・」

「ずいぶんリアルね。やる気？」

アイシャが茶々を入れたので身を乗り出そうとした要だが、カウラはうんざりしたと言うように車を急発進させた。

「おい！ベルガー！」

後頭部を座席にしたたかぶつけた要が叫ぶ。だがカウラは振り向くこともしない。

「お前さんがさっき作ってたハイキング表の通りに行くつもりだがいいか？」

「カウラちゃんはクールねえ。上官命令、それでいきましょう」

要は複雑な表情で頷く以外にすることは特になかった。

曲がりくねった道。かつての街道筋のままの細い道の両側に狭い店舗が続いている。

「まったく再開発はまだなのか？」

「要ちゃんのお小遣いで何とかすれば？」

「やなことだ！」

要とアイシャのやり取りについて噴出す誠。すぐに要のタレ目が威圧するように彼をにらんでいく。

「そこの横丁を・・・」

「西園寺。私が知らないとしても？」

カウラはやけになって左にハンドルを切る。大きく車体は傾き、カウラのエメラルドグリーンのポニーテールが揺れる。

そのまま車は駐車場に乗り付けられ再び思い切り急停車する。

「カウラちゃん・・・もっと丁寧に」

アイシャは自分の紺色の長い髪を掻き揚げながら苦笑いを浮かべた。その座席を後ろに座る要が蹴り上げる。

「人の車だと思って・・・」

ため息をつくとかウラはドアを開けて外に出る。アイシャもつられるように出て助手席のシートを倒す。何とか要、誠が狭い後部座席から降車した。

「ここが一番か」

カウラの言葉に要は苦笑いを浮かべながら頷いた。

「その筋の人間がいるところのほうがこういう事件にはぴったりだろ？」

そう言う要の視線の先にはこぎれいな不動産屋の店舗には似つかわしくない黒塗りの大型高級車が止まっていた。

「まるで明石中佐の車ですね」

誠はそういいながらこの不動産屋がかなり危ない物件を扱っていることをすぐに読み解いた。

誠の言葉に一度ほくそえんだ要はそのまま自動ドアの前に立った。

『いらつしやいませ！』

店内に声が響いた。店員達が一同に立ち上がり誠達に頭を下げている。民間企業での仕事の経験などは学生時代に工場で鉄板を並べていたくらいの誠には異様な光景に見えて思わず引く誠。

『あんなあ。その筋の絡んでる店つてのはみなこんなもんだぜ。妙に愛想が良くて・・・ああ、あそこを見な』

小声で要がつぶやくその視線の先には大きく張り出されたスローガンが長々と壁に張り出されていた。

「あの・・・」

入ってきた要の着ているのが東和警察の制服だったことに気づいた受付の女性が一番声がかけやすそうに見えたアイシャに語りかけてきた。誠も声をかけた小柄な長い髪の受付嬢の化粧が一般のOLのそれより明らかに濃いのが目に付いてなんとなく要の言いたいことが分かったと言うようにアイシャに目をやった。

「ああ、お仕事の邪魔かもしれないけど・・・ちょっとお話を聞きたいの」

明らかに回りに聞こえるような声でアイシャが口を開いた。その様子におどおどと受付の女性は背後の事務所を見る。そこにはどう

見ても回りの緑の制服を着た事務員達とは毛色がまるで違う黒い背広の恰幅のいい男の姿があった。

『なるほど、その筋の人が経営しているんだ・・・』

男が仏頂面で立ち上がるのを見て誠も納得する。以前の誠ならその男の威嚇するような視線におびえて足が震え始めるところだったが、この男と同類の前副部隊長の明石が同じような格好をしていたのでとりあえず要達を盾にして後ろで男と目が合わないように天井を見上げる程度で落ち着くことができた。

「申し訳ありませんね。うちは・・・個人情報の遵守をモットーにしていますから・・・見てください」

男は受付にたどり着くと背後のついたてを指差した。不動産業の営業許可証の隣には個人情報保護基準達成の証書が飾られている。だが要はまるで臆することなく彼女が得意な腕っ節でなんとかなる相手に遭遇した時独特の笑みを顔に浮かべて受付に手を着いた。

「そりゃあ殊勝な心がけですね・・・まったく頭が下がる納税者さん。応援していますよ・・・納税者さん」

要が二回『納税者』という言葉が続けるとなぜか悪趣味な背広の男はこめかみに手をやって誠達を一人一人値踏みするような視線を向け始めた。

「あんたら本当に警察の人？」

真顔で聞いてきた男の視界から突然要が消えた。誠も黙っているうちに男はそのまま要に組み敷かれて床に転がっていた。

「おう、良かったな。アタシ等は現在東都警察に出向中の保安隊の実働部隊員だ」

その言葉。そして生身とは思えない動きと重さで口を要に押さえつけられている男がうめく。

「ほう・・・アタシは何度が租界でテメエの顔を見てるけど・・・出世したもんだな」

要の立て続けの言葉に何かを思い出したように動きを止める男。要は納得したように立ち上がりスカートの裾をそろえる。

「・・・西園寺のお嬢ですか・・・そうならそうで・・・って納税？」

「そう！アンタ等が今年の売り上げの約40パーセントを・・・」

「お嬢！勘弁してくださいよ！何が目的ですか？なんか事件でも追っているんですか？胡州の官派の残党狩りですか？」

泣き出しそうに跪く男に誠は哀れすら感じた。恐らく要はこの不動産屋の裏帳簿をネットで拾って脱税の記録でも見つけたんだろう。

さらにまともな不動産屋のすることではない違法な活動の証拠も握っているかもしれない。彼が振り返るとカウラもアイシヤも要のすることがはじめから分かっていたようににんまりと笑みを浮かべている。

「じゃあ、オメガの事務所。そっちで話そうか。ここじゃあ拙い話も出てくるんだろ・・・あ？」

とても遼州一の名家の令嬢とは思えない顔つきで男をにらみつける要。男も仕方なく立ち上がると事務所の職員が失笑を浮かべているのにいらだちながら立ち上がった。

「じゃあ・・・二階で」

そう言う男は静かに横にあるドアを開いた。要が誠達を振り返りにんまりと笑うとそのまま付いて二階に上がる。カウラとアイシヤも誠を引き連れてその後ろについてあがった。

桐の見事な柱の通った二階。まるで雰囲気が違う部屋には何人かの若い衆がタバコを啜えて雑談をしているところだった。そこに現れた憔悴しきった兄貴分。当然のように鋭い目つきがその後ろを歩いていた要に注がれることになった。

そしてそのまま応接室のようなところに通された。誠は贅を尽くした部屋の調度品に目を奪われた。

「おい、儲かるんだなあ・・・不動産屋は」

要の嫌味にただ乾いた笑いを浮かべながら男はソファーに腰掛けた。

「ああ、お嬢と・・・連れの方」

男は手でソファーに座るように合図する。にんまりと笑った要はそのまま中央にどっかりと腰を下ろした。

「忙しい中来てやったんだ。茶ぐらい出せよ」

「わ・・・わかりました」

そう言う男は振り返り大きすぎる社長の机の上のボタンを押した。

「お前さんなら聞いたことはあるんじゃないか？法術師適正のある人に部屋を貸すのを拒否している業者があるそうじゃないか」

悠然とタバコを取り出す要。カウラとアイシャが嫌な顔をするが男は気を利かせたように応接セットの大きなライターに火をつけて要に差し出す

「ああ・・・この業界もいろんな人がいますからねえ」

「どう見てもやくざに見える人とか？」

アイシャの皮肉に男の米神がぴくりと動いた。

「なあに。法令通りの商売をしている善良な市民に迷惑をかけることはしないわよ・・・ねえ、要ちゃん」

「そうだな・・・で・・・だ」

曖昧な相槌の後で要は手持ちの端末をテーブルに置いた。そして画面を起動させるとそこには豊川市内の不動産業者の一覧が表示された。

「豊川はなんと言っても菱川系企業のお膝元だからな。不動産屋も系列が多い。そしてなぜかこの系列のお店は法術師がお嫌いと見えてアタシの耳にも入居拒否や転居要求の話が届いてきている」

「大手はそういうところには敏感ですからね」

タバコをふかす要がリラックスをしているのを見て男は安心したように笑みを浮かべた。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 70

「まあそんな大手に割高な仲介料を払えない連中となると・・・駅前
前の三件はかなり法術師にはつらいですからね」

男はそう言うのと静かにタバコを取り出した。嫌そうな視線を向ける
力ウラだが、要がそれへのあてつけのように自分のジップライタ
ーを取り出す。

「すみませんね・・・」

「こんなサービスはデメエじゃ無理だったろ？うれしいか？」

要がかつて胡州陸軍特殊部隊員として東和の沿岸部の租界での非
合法物資の取引ルートを巡る利権争い『東都戦争』で潜伏して娼婦
として情報収集を行っていたことを誠にも思い出させた。

「となると・・・南商店街の二件」

「ああ、そこはうちじゃないですが・・・堅気じゃない連中が関わ
ってますから」

「おう、参考にするわ」

要は男の指定する店にしるしをつける。そしてそのまま画面に映
る商店街の店を眺めながらスクロールさせた。

「かなり絞り込めるな・・・今回の事件の犯人。手口からして素人
そうなるここみたいな危ない経営者のいるところは避けるだろう

から・・・」

「姐さん。勘弁してくださいよ」

淡々と自分を斬って捨てた要に泣きを入れると静かにタバコをふかす。

「でも私もそうだけど分かるの？不動産屋のどれが危ないとか、どこが法術師には紹介しないとか」

アイシャの言葉に一瞬要の手が止まった。

「オメエ・・・この店の経営者がこいつだって分からなかったのか？」

「そういう事がすぐ分かるのは西園寺くらいの経験が必要だろうな」

そう言つとカウラは自分の顔に向けて流れてくるタバコの煙を仰ぐ。そして要はしばらく放心したように黙り込んだ。

「つまり・・・やっぱり駅前の二件も捜査対象か・・・まあいいや」

要はそう言つて頭を掻きながら男を見つめた。

「うちには法術師とわかる客からの物件の紹介はしていませんよ」

少しばかり焦った調子の男。それを見ると要は視線を誠に向けた。

「だってよ！良かったなあ、寮があつて」

誠はただ訳も分からず頷いた。そして要のしぐさを見て男の表情が曇るのがすぐに分かった。

「こいつ・・・いや、この兄さんは法術師？」

「そう言う事。それどころかこの『法術』と言つ言葉を生んだあの『近藤事件』で暴れまわつた奴」

要の言葉に明らかに緊張していく男を見て誠は次第に気分が悪くなった。男の目は人間を見る目ではなかった。明らかに敵意と侮蔑感を込めたような複雑な感情が見て取れる。

「こんなに・・・」

「どうしたの？誠ちゃん」

アイシャの言葉に自分がしばらく敵意の視線で男を見ていたことに気づいて誠はうつむいた。

「いつも言ってるだろ？下手な力の有無は敵意を生むだけだって・
・なあ」

要の言葉におびえるように頷く男。確かにこうしておびえられるに足る力を自分が持っていることを誠も自覚していた。

「でも・・・これじゃあ分かりませんよ。俺だって知らなかったらつい貸しちゃうかも知れないじゃないですか」

「そうか？なんでも一部の同業者が入居の条件に法術適正試験の受験を課しているそうじゃねえか。同業者だろ？知ってるんじゃないか？」

そう要に詰め寄られると男はただ静かにうつむいてタバコをくゆらせるほかはなかった。

「え？・・・」

男が黙るのを聞いて要の顔はサディスティックな笑みにゆがんだ。その様子はカウラも察したようですばやくかな目の前に手を出してきた。

「安心しな・・・じゃあどこなら法術師の客を扱うことになる？」

大きく深呼吸をする要。アイシャもいつ要が暴走しても良いようにと鋭い目つきで彼女を見つめていた。

「高いのを覚悟で大手に頼むか・・・さもなければ担当者に恵まれるまで何度も通うしかないんじゃないですか？」

明らかに殺気を帯びている要に少し驚きながら男は静かにそう言った。その言葉を聞くと要は立ち上がった。

「姐さん・・・」

「分かった。とりあえずここの案内のリストをよこせ」

「ホントなの？要ちゃん全部見て回る気？それに大手なんかだとプライバシー保護が・・・」

アイシャが文句をつけるのをタレ目でにらみ付けで黙らせた。

「仕方ねえだろ！足が資本だぜ、捜査つてのは！」

そう言つとそのまま一人で出て行く要。誠は男に頭を下げるとそのまま要を追つた。

「西園寺さん！待つて下さいよ！」

誠の言葉を見無視してそのまま階段を駆け下りる要。誠は一階のロビーにたどり着くとそのまま全員が立ち上がつて要を送り出す様に遭遇し違和感を感じながら外に出た。

「畜生！」

要が空を見て叫ぶ。

「仕方ないじゃないですか。狙いは良かったんですから・・・なんなら安そうなアパートを全部回つて・・・」

「そんな問題じゃねえよ！今でも犯人の野郎はどこかでニヤニヤ笑つてるんだぞ！そう思うと・・・」

そう言いながら要はようやく店から出てきた要にドアの鍵を開けるようにと指差した。

水島はしばらく震えが止まらなかった。すでに暗くなりかけた部屋の中。静かにうちから湧き出てくる笑みを我慢していた。

「そつだ・・・俺は神にもなれるかも知れないんだ・・・」

妄想が膨らみさらに笑みが広がるのを自分でも感じている。

他者の能力が見え始めたのは偶然だった。三ヶ月前、何気なくタバコを啜っていた警備員の意識が自分に流れ込んできた瞬間を思い出す。他者の意識に触れた恐怖。思わず水島は警備員のパイロキネシス能力を使い、そのタバコに火をともしてみせた。

驚いた表情の警備員と、突然の出来事にあっけにと取られた自分。もしそれだけで終わっていればそのまま手にした民法の判例集を読むために実家に向かう道を急いでいたことろ。だが次の瞬間。街の人々のさまざまな意識が流れ込んできていた。

敵意、憎悪、怒り、苛立ち。

自分が失業をしてから感じていた感情のすべてが街に満ちていた。

『こんなに人は負の感情で動いているのか・・・』

ただ黙って歩いていてもその感情に飲み込まれそうになる自分。そしてその目の前を歩く少年の姿を見て水島は驚愕した。

少年。八歳ぐらいだろうか。すでにどんな格好をしていたかは覚

えていないが、その表情は妙に老成しているような印象を水島に与えた。

「じろじろ見るなよ・・・法術師が珍しいのか？」

明らかに自分に向けて投げられた言葉にしばらく水島は呆然と立ち尽くしていた。

「意識の覗き見なんてずいぶんと趣味が悪いじゃないか」

続けて少年から吐かれた言葉。今でもその時の衝撃は忘れていない。

東都新開地西口。

再開発のビルと雑居ビルが混じった混沌の街での二人の出会い。それを思い出すたびに水島の心は震えた。

「おじさん・・・今何かやったね」

その言葉を聴いて水島は体の力が抜けていくのを感じた。明らかに誰も知らないはずの自分の力を見られた。初めての体験で混乱する意識の中でも彼は少年が自分を告発しようとしているのではないかと思つて身を翻して早足で逃げ始めた。

「逃げなくてもいいじゃない。別に責めてるわけじゃないんだから」

少年はついてきていた。水島の心臓は高鳴った。誰も自分に關心など持たない都心の繁華街。握り締めた法律書にも冬だというのに汗が染み出てきた。

「いや、できれば就職先でも世話して・・・」

「いい加減にしたまえ！」

しつこい少年の追跡について水島は怒鳴りつけていた。少年は頭を掻きながら立ち止まり、そして大きく深呼吸をした。

「なるほど・・・ご自分の力をご存じないようですね」

「力？なんだねそれは・・・」

水島の声は震えていた。ただタバコに火をつけた。しかも自分の能力を使つたわけではない。だと言つのになんで少年からつけられ

ねばならなかったのか。

それを思い出すと理不尽な合理化で会社を解雇になったこと。大
学受験でミスした計算。高校時代の将棋部の選手決定戦の悪手。い
ろんな後悔と憎悪が自分の中を駆け巡るのが分かった。

目の前で少年はそんな水島を見ながら考えているとでもいうよう
に自分の手元を見つめていた。

「OK。それならちよつと僕の友達になつてくれないかな・・・」

顔を上げた少年の言葉に水島は言葉を失った。どう見ても8歳く
らいの少年。先ほどの感覚からして相当な法術適正の持ち主のよう
だがあくまで子供だった。

「友達？」

「そうだよ。じゃあ端末を貸して」

手を伸ばしてくる少年にただ当然のように水島は自分の携帯端末
を貸していた。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 75

「これ、連絡先」

そんな少年の言葉に水島は端末を手にして操作してみた。

「アメリカ大使館？」

足が震えた。明らかに自分よりも能力に優れた少年。時々彼の隙を突こうと力の種類を検索してみたが、空間を切断したり人の思考を支配したりすることができるとあることが分かるばかりで自分のひ弱さを知るばかりだった。

「別に気にしなくていいよ。ただの見たまんまの子供だから。住所が大使館なだけであって・・・」

「それで十分すごいことなんだけどね」

「そう？そうでもないと思うけど」

少年が怪しげに笑う。そしてそのまま手を振って立ち去ろうとする。

「なんなんだ君は！俺を・・・」

水島の搾り出した言葉に気がついたように振り替える少年に驚きの表情が浮かんでいる。

「十分法術を使えるようになったらお話聞かせてもらおうよ。それま

で練習していてね・・・警察なんかの世話にならない程度にね」

にんまりと笑う少年の顔。その妖しげな姿に水島は飲まれていた。たぶん回りの通行人は二人が何を話していたのかなどは気がつきもしないだろう。そして自分の力も去っていく少年以外には関心のほかの出来事だった。

「練習か・・・」

なぜか気が付けば水島は自分の右手を見つめていた。端末を叩くのと本のページをめくること以外得意なことは何もない手。

『突然の出来事か・・・必然の出会いか・・・』

妖しげな少年の姿を思い出しながら水島も街の群れに消えることにした。

「令状がなきゃアタシ等は動けねえのはおんなじなんだな」

部隊の溜まり場、あまさき屋。店に来て三十分も経たずにすでに要は二本のラムの瓶を空けていた。誰もそれを止めない。カウラは黙って烏龍茶を啜る。

「吉田さんにも頼んでみたけど・・・法的には個人名の特定まではできないからって言われたわよ。まあ証拠探しには足を使えって」

呼び出されたアイシャと同じ人造人間で保安隊運行部員のサラ・グリファンとパーラ・ラビロフは暗い表情でたこ焼きを突付いていた。

「二人にも迷惑かけたわね」

「迷惑かけたのが分かってるならこれからも付き合わせなさいよ」

ピンクの長い髪をなびかせながらたこ焼きを口に頬張るパーラ。その姿に誠も少しばかり困ったように店の奥で心配そうにこちらを眺めている女将の家村春子に目をやった。

「西園寺さん。飲みすぎですよ」

つい口を出していた誠。目の前のグラスばかり見つめていた要の鉛色のタレ目が誠に向かってくる。

「いいアイディアだと思ったんだけどなあ」

一言そう言っただけですぐに要は目の前の空のグラスに酒を注ぐ。

「金の無駄になるぞ」

「いいんだよ。たまには思いっきり飲ませろよ」

カウラの言葉に顔も上げずに要は酒を飲み続ける。

「まるで通夜よね」

そんなアイシャの言葉に誠もただ乾いた笑みを浮かべるだけだった。手がかりは見つけては消え、ただ時間だけが過ぎる。同盟司法局の捜査責任者である茜のコネでなんとか東都警察の警察官の捜査権限で動いていると言っのにまるで成果が出ていない。

「焦ってきますね」

誠のその言葉に全員が大きいため息をついた。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 77

「たのもー!」

突然の突拍子もない叫び声に店の客達は入り口に目を向けた。

そこには黒く巨大な影と、少しだけ入り口を開けたところに立っている少女が見て取れた。

「シャム・・・」

要が呆れたようにつぶやく。赤いパーカーを着た少女、ナンバルゲニア・シャムラード中尉の能天気な笑顔にそれまでの自分が浮かべていた仏頂面を思い出して一同に自然と笑顔が浮かんだ。

「師匠！お散歩ですか？」

店の奥から飛び出してきたのはエプロン姿の家村小夏。女将の春子の一人娘でシャムを師と仰ぐ女子中学生だった。

「おう！お散歩だよ！そしていつもの！」

シャムの言葉に小夏はそのまま厨房に消えていく。

「しかし良いのか？グレゴリウス13世は・・・一応猛獣だろ？」

入り口をふさぐ巨大な影。それがコンロンオオヒグマの子供のグレゴリウス13世であることは全員が分かっていた。

子供だと言うのに地球の最大級の熊と同じくらいの大きさの巨体。一応繁華街であるあまさき屋の前にやってくるのは不自然を通り越して異常だった。

「知らないの？要ちゃん。このまえ豊川FMで紹介されてたわよ。街の人気者だって」

アイシャの言葉に要の顔がゆがむ。

「マジ？いいの？ロープも鎖も無えんだぞ？」

そこまで言ったところでシャムの頭の上にグレゴリウスの顔が飛び出してきた。

「なんだよ・・・やる気か？」

「西園寺。熊と同レベルでの喧嘩はやめてくれ」

諦めたようにカウラがつぶやく。そして厨房からは大きな鉢を持った小夏が現れた。

「はい！グリンのおやつですよ！」

そう言う和小夏は入り口になにやら赤いものが入った鉢を置く。すぐに顔だけ出していたグレゴリウスはそのままシャムの足元に顔を持ってきて鉢の中に頭を突っ込んだ。

「やっぱり動物がご飯を食べるのは和むわねえ」

「和んでる場合かよ」

アイシャの言葉に思わず要は突っ込みを入れていた。だがシャムとグレゴリウスの闖入でそれまでの重い空気が吹き飛んだのは事実だった。

「そう言えば、中尉。基地からここまで歩いたんですか？」

「アホか・・・そうか！吉田はどこだ！」

要が立ち上がるとパーラとサラも立ち上がった。そしてそのまま三人は二階の座敷に駆け上がっていく。そんな三人を確認すると静かにシャムの背後から吉田が現れた。

「あいつ等馬鹿じゃねえの？いつも俺が二階に現れるとは限らないんだよ」

「吉田少佐・・・日ごろの行いじゃないんですか？」

カウラに言われて頭を掻きながら吉田はどっかりと椅子に腰掛けた。

「どうだい、捜査の方は」

突然吉田から聞かれてため息をつくアイシヤ達。

「まあ慣れない捜査活動だ。成果が出る方がどうかしてる・・・って言うけど茜のお嬢さんも前回の厚生局の件で味をしめたからなあ・・・そうそういつもいい結果が出るわけじゃないのに」

そう言う吉田はアイシヤの頼んでいた新しい烏龍茶を手にして飲み始めた。

「分かっているなら教えてあげたらどうなんですか？」

「人っていうやつは失敗をして学んでいくもんだよ。あの人も多少は痛い目に会わないと」

カウラに聞かれて答える吉田の顔は少しばかり悪戯をした子供のような雰囲気があった。

「でも・・・犯人が・・・」

「ちょっと待てよ。俺達も腹が減ってるんだ」

そう言うとき吉田は店内に入ってきてパーラとサラの座っていた席の向かいの席に腰掛けた。

「とりあえず烏龍茶と生中」

「吉田さんは烏龍茶ね」

吉田の注文を受けた春子が厨房に消える。入り口ではシャムと小夏が楽しそうにグレゴリオスの食事を眺めていた。

「おい！吉田！」

二階から降りてきた要達を満面の笑みで吉田は迎えた。

「すまないな。たまにはまともに入りたくなるんだ」

「ったくよう」

愚痴りながら要は席に戻る。付いてきたパーラとサラも仕方がないというように席に戻った。

「お待たせしたわね。シャムちゃんのビールはどこに置くの？」

「俊平の隣でいいよ」

春子が生ビールを置くとシャムはうれしそうに席に戻った。

「俊平、何食べるの？」

「そりゃあ俺はイカ玉だな。お前は豚玉三倍量か？」

「うん！」

闖入者のおかげで誠達は完全にペースを乱されていた。何を話すべきだったか忘れてしまったかのように渋々烏龍茶を啜るカウラ。アイシャは自分の紺色の長い髪の毛を探している。

「何か作戦会議でもしてたんだろ？続けるよ」

吉田は自分が原因だと分かっているくせにニヤニヤ笑いながら誠達を面白そうに眺めていた。

「続けるったって・・・よう」

要はそう言つと再び酒の入ったグラスに手を伸ばす。吉田はそれを奪い取った。むっとした表情の要だが、すぐに彼女はいつもどおりつまらなそうに視線をそらすとそのまま立ち上がるとする。

「酒に逃げるんじゃないって話だ。限界なんだろ？通常の捜査なら・・・」

「令状無しじゃ何にもできねえんだよ！星は確実に東京都心からこつちに移つて来た！しかもこの一月の間でだ！そこまでわかつていながら・・・」

そこまで言つと悔しそうにとっかりと腰を下ろす要。同じようにカウラとパーラが頷きながら唇を噛み締めていた。

「まあな。一発で犯人を絞り込むには転居関係の情報を閲覧してついでに住民票を確認、そして特定した容疑者に聴取をたのんで・・・と言つのが定番だが・・・どれも今は無理だな」

あつさりと言つ吉田。誰もがハッキングのプロで彼なら警察上層部に知られずに楽に不動産取引のネットワークに侵入して情報を得ることができることは知っていた。だがまるで関心を示していない以上、それから先はやるつもりがないことはすぐに理解できた。

「たまには足を使うことも必要だつて嵯峨の親父に言われてね。できるだけヒントを与えるだけにしろつて」

「叔父貴が？アイツはサドだな」

要の言葉にサラとシャムが目を合わせて噴出す。要がにらみつけるが迫力不足のようで二人は相変わらず笑い続けた。

「大変みたいね・・・私のおごり」

厨房から出ていた春子が刺身の盛り合わせを持って現れた。

「いいんですか？」

誠の言葉に笑みを浮かべて春子が頷く。母親の甘さに鉢の中を嘗め回すグレゴリウスを眺めていた小夏がいつものように要をにらんだ。

「ええ、色々大変なんですよ？でもいつでも吉田さんや嵯峨さんの力を借りてばかりじゃ駄目でしょうしね」

「あー！頭にきた！」

そう言いながら要は立ち上がると厨房から取り皿をとるとそのまま一同に配り始めた。

「カリカリするなよ」

吉田はそう言うのにんまり笑う。その表情にあわせるようにシャムそして小夏が笑みを浮かべる。

「なんで笑ってるんだよ」

そう言いながら要は刺身に一番に手をつけた。うまそうに頬張りまた酒を口に流し込む。

「捜査の基本は・・・餅は餅屋だ。真摯にお巡りさん達に教われればいいだろ？なんなら茜警視正からラーナでも借りれば良いじゃないか」

吉田の一言はまるで天啓のように一同を驚かせた。

「そう言えばいたわね。影の薄い捜査官が」

「今頃くしゃみでもしてるんじゃないか？」

アイシヤとカウラが笑顔で顔を見合わせる。誠はようやく明るい兆しが見えてきたのでおいしく見えた白身魚の刺身に箸を伸ばした。

「何事も一人で解決するのはなかなか難しいぞ・・・まあ俺も隊長と出会うまでは一人で何でもできる気でいたからな」

「吉田少佐にもそんな時期があっただんですか？」

口に刺身を入れたまま誠がつぶやいた言葉に仕方がないというように頷きながら烏龍茶を飲む吉田。

「そうよ。相談すれば知恵も出てくるものよ。だから皆さん元気出してね」

「ガンバレー！」

春子と小夏の言葉になんとか癒されながら誠はビールに手を伸ばす。

「善は急げだ。とりあえずメールくらいはいいだろう」

そう言いながらカウラは端末に手を伸ばす。

「忙しくなりそうね。なんなら私も運行部の非番のメンバーにも招集かけるわよ」

「サラ・・・それは勘弁な」

要はそう言つと笑顔で酒を呷った。

「それじゃあ・・・決まったわけだから行こうじゃねえか」

要はそう言うのと東都警察の紺色のジャンバーを肩に突っかけるようにして立ち上がる。とりあえず誠達が始めたこと。それは新規の住民登録を行なった人物をすべて見て回ると言う地道な行動だった。

「しかし・・・本当にお巡りさんは大変よね。拳銃とショットガンだけ？」

「ゴム弾入りの非殺傷弾入りだ。しかも一発撃ったら始末書一枚だそうだ」

アイシャもカウラも顔色は冴えない。保安隊の丙種装備よりも落ちる装備に不満を言いたい気持ちは誠にもよく分かった。

「でも停戦協定違反の警備じゃないんですから・・・実弾は・・・」

「オメエは租界で撃ちまくらなかったか？」

「撃ちまくるのは誠ちゃんじゃなくて要ちゃんでしょ？誠ちゃんの下手な鉄砲を撃ちまくられたら私も困るわよ」

入り口に立ってニヤニヤ笑っている要を押しつけるようにしてアイシャはそのままドアを出た。そしてそこで何かとぶつかってよろめく。

「ごめんなさい・・・ああ、ラーナちゃん」

大柄なアイシャはよろめく程度で済んだが走ってきた小柄なラーナは廊下に倒れてぶつけたひじをさすっていた。

「あまり廊下は走るものじゃないな・・・」

「すみません！ベルガー大尉！」

カウラを見つけてすぐに立ち上がって敬礼をするラーナ。さすがに司法局法術特捜本部の捜査官と言うこともあって警察の制服はしつかり板についている彼女を誠はまじまじと見つめた。

「神前曹長・・・」

「ああ、こいつは巡査部長だそうだ」

「そうなんですか？」

ニヤニヤ笑っている要から話を聞いてラーナは少しばかり得意げに誠を見上げていた。

「失礼して・・・」

そう言うつと慣れた手つきで中央のテーブルに腰をかけたラーナは手持ちの端末の立体画像表示システムを起動した。すぐに近隣の交番のデータがオープンになり、その近辺のアパートの状況を表示する画面が移る。

「まあ、一番早い方法はこれですね。各交番にアパートやマンションを訪問する指示を出します」

「良いのかよ・・・簡単に言うけど」

「ええ、防災関係の書類を持たせて訪問させる形をとりますから」

要の不安そうな顔に淡々と答えるラーナの顔が面白くて誠が噴出しそうになる。それに殴るポーズをする要。それを無視してラーナは端末の画面を切り替えた。

「現在15万件分のアパートやマンションが対象になりますが、星が法術適正のある人物と仮定した場合、正直あまりいい物件には出会わないでしょうから・・・」

そう言うつとすぐに画面が検索中のものに切り替わる。そして豊川市内の地図に赤い点と青い点が点滅する画面へと切り替わった。

「この赤い点がかつて警察が捜査のために入ったことのあるアパートやマンションです。一方青いのが捜査を受けていないマンション」

「あれか・・・あまり入居者を選ばない物件の方が当たりを引く可能性が高いということか？」

「ベルガー大尉。さすがですね。悲しいですが入居条件の緩いところのほうが犯罪発生率が高いですから。そこでこの赤い物件に関しては直接私達が訪問します」

ラーナはそう言うと今度は地図から表へと画面を切り替える。

「おい、ラーナ。ずいぶん簡単に言うけど・・・」

「西園寺大尉も心配性ですね。この前の同盟厚生局の事件に比べたら調べる範囲は半分以下ですよ」

思わず笑いを漏らしているラーナ。アイシャも納得がいったように腕組みをしながら頷いている。

「当然分かれての捜査になるな」

カウラはそう言うと誠達を見回した。

「西園寺と神前。それにカルビナで回ってくれ。私とアイシャで行動することにする」

「えー！なんで私とカウラちゃんなの？」

「お前はサボるからな、ほっとくと」

そう言ってカウラは端末にラーナの情報をダウンロードしていた。

「これで何件目・・・」

「カウラさん始めたばかりじゃないですか」

いつもの運転席に乗り込むカウラの顔は疲れていた。

初日。すぐに動き出したカウラ、誠、ラーナ。とりあえず防犯の呼びかけのポスターを手に五件のマンションを回ったが、捜査よりも戦闘のために作られた人造人間であるカウラの忍耐力はすでに限界を迎えていた。

「午前中はこんなもんでしょう。これからお昼。いかがですか？」

後部座席で腕組みをしているラーナは静かにそう言う幼くも見えるようなおかつぱの髪を掻き上げた。

「午前中・・・か・・・」

カウラの声がかすれるのも無理は無かった。すでに三時を過ぎようとしている。住宅街の食べ物屋は多くが準備中になっている時間帯。

「訪問がこんなに疲れるものだとは・・・」

そう言いながらカウラは赤いスポーツカーを動かす。狭い路地を縫うようにして車は進んだ。

「まあ・・・こういう地道な積み重ねが大事ですから。それと市民と向かい合う時はいつも笑顔で。ベルガー大尉はまだ今ひとつですね」

「はあ」

ラーナに駄目だしされて少しばかりカウラは肩を落としながら狭い道を進む。両脇に続く家並みはすべて平屋。二十年前の第二次遼州大戦の時の特需以前の貧しさを感じるような家々が続く。

「でも・・・もしかしたら僕達が回った家の中にすでに犯人の家もあるんじゃないですか？」

思わず誠はそう言っていた。不機嫌になるだろうと振り向いた誠をまっすぐにラーナは見つめている。

「それで良いんですよ」

「良いのか？」

カウラはようやく大通りに出る入り口の信号で車を止めながら驚いたように静かにつぶやいた。

「もし私達が警戒していると分かればそれだけで犯罪に対する抑止力になります。確かに犯人逮捕も大事ですがこうして未然に犯罪を防ぐことも任務の一つですから」

そう言つて笑顔を向けるラーナ。いつも茜の助手として付いて回っていると言う印象しかない誠には非常に新鮮に見えた。カウラも頷きながら大通りに車を走らせる。

「それは分かった。じゃあ西園寺とアイシャは・・・」

『おいおい、特殊部隊上がりを馬鹿にすんじゃないぞ』

車の固定端末のスピーカーから響くのは要の声だった。

「聞いていたのか・・・悪趣味だな」

『陰口を言おうとしていた奴に言われたくねえよ!』

そう言つと要とアイシャが並んで寿司を食っている場面が映し出される。

「寿司か・・・回転寿司とは考えたな」

『まあしかたねえだろ？今の時間は開いている店に限られるんだから』

「そうだな。カルビナ、寿司でいいか？」

「できれば安いところが良いんですけど・・・」

いつもの控えめなラーナに戻る姿が滑稽で誠は思わず噴出した。

「じゃあ・・・この近くならハンバーガーの店があつたろ？」

「そこで良いですよ」

カウラは誠が頷くのを見ると笑みを浮かべてアクセルを吹かした。

「そう言えば・・・西園寺はラーナが何をするか知っていたのか？」

そんなカウラの質問にウニを頬張りながらタレ目の要は大きく頷いた。

『当たり前だろ？さもなきゃなんでこんな奴と・・・』

『要ちゃんひどい！こんな奴なんて！』

アイシャの声だけが端末に響く。思わず誠も苦笑しながらラーナを見てみた。彼女はと言えば相変わらず自分の端末を叩いて作業を続けていた。

「で・・・結果は？」

『焦るなつての。そんなに簡単に行くわけ無いだろ？とりあえずラーナのデータは正確だったってことはよく分かったよ』

「有難うございます」

ラーナはついでのように答えた。それが気に入らないと言うように要はかっぱ巻きを口の放り込む。

『アタシも豊川の街をこうして回るのは初めてだが・・・まあ予想以上に複雑だわ、この国も』

「実のところ本当の意味で東和が大国になったのは先の大戦のあとの復興景気以降だからな。それを考えて見ればこういう地方都市の矛盾と言つものも見えてくる」

『難しいこと言うじゃねえか。まあそんなことはどうでもいいとして・・・今回の事件。誰が犯人でもおかしくない気がしてきたよ。』

法術適正のあるというだけで揉めている自治会とかもあるみたいでさ』

何気ない要の一言。誠はすぐにラーナに目を向ける。誠もラーナも法術適正のある法術師である。恐らく同じように部屋を探したりアパートに暮らしたりすれば同じように差別や嫌がらせを受けることはすぐに想像が付く。そしてそんな世の中にした法術の存在の顕現化を行なったのは他でもない『近藤事件』での誠の法術による敵アサルト・モジュールの撃墜だった。

「西園寺。そこらへんは後で話す」

誠の動揺がカウラに見透かされていたようでカウラはすばやく話を変えると端末を消した。

「気にするな・・・と言っても無理か」

そう言うとかウラはハンバーガーショップの駐車場に車を入れた。そしてそのまま車をドライブするーの場所に移動させる。

「食べていけないんですか？」

訪ねてくる誠にかウラは疲れたような笑みを浮かべるだけだった。

「そう・・・だったな」

「私はどうも・・・」

駐車場にハンドルを切ろうとしたときに助手席のラーナが思わずカウラの左手を押さえた。

「地球人の顔は見たくないか・・・」

ラーナの言葉を聞くとカウラはそのまま運転席の窓を開ける。

『いらつしゃいませ！ご注文をどうぞ』

明るい店員の女性の声が響く。ラーナはなぜかうつむいたまま自分の端末を呆然と眺めていた。

「全員Aセットでいいな・・・じゃあAセットを三つ。ドリンクはブレンドコーヒーで」

『かしこまりました。Aセット三つ、お飲み物はブレンドですね』

明るい声だが、誠もなぜか相変わらず違和感を感じていた。

「見ただけじゃ分からないのに・・・やはり壁は感じますね」

そうつぶやいた誠に情けないと言うような笑顔で答えるラーナ。彼女は遼南難民出身で純血の遼州人だった。誠も名前こそ日本風だ

が遺伝子検査では地球人との混血はほとんど無いと判定されていた。

「人はそれぞれ違うものだと言うが・・・あれだけ違うとな」

カウラがそう言ったのは最後のアパートの男子大学生との会話を思い出したからだった。

『迷惑なんですよね・・・法術適正？そんなの受けなきゃいけない化け物に生まれたつもりはありませんよ』

無精髭が目立つ小太りの男子大学生はそう言うとならなが差し出したチラシを受け取らずにドアを閉めた。まるで自分は関係なく、地球人の直系の人種だと言うことを特に証拠もなく信じている若者が増えていることは誠も知っていた。だがそれにしてもその死んだように誠達を見つめる目には分かっているようにも衝撃を受けていた。

「近くに運動公園があるな。そこで食べるか」

そう言いながらカウラは商品の受け取り口のある店の裏手へと車を進めた。

「どうだ？え？」

足を棒にして一日歩き回って豊川警察署に与えられた部屋に戻る
とそこには私服のランが一人で茶を啜っていた。

「餓鬼は帰る時間だぞ」

ロビーで二人して伸びていた要とアイシャ。要の皮肉にもまるで
答えずランは平然として茶を飲み続ける。

「いいんですか？私達はほとんど捜査に専念している状態なんです
が・・・」

「いいんだよ。05式のデータ收拾はアタシとシャムで大概のことが
済むからな。ベルルカン大陸の状況も平穩無事。まあ何かあったら
アタシが署長に掛け合って何をしている場面だろうが帰ってきて
もらうだろうからな」

ランの言葉に頷きつつそのまま要は自分の席に戻った。

「ちゃんとデータ落としとけよ」

「西園寺に言われることは無いんだが」

皮肉を言う要を一瞥するとカウラは自分の端末を机の固定端末に
接続してデータ移行を開始した。

「でも・・・かなり法術の存在は・・・」

「神前。言わなくても分かるってーの。あの事件以来この国に・・・いや、地球圏も含めて宇宙は猜疑心で一杯だ。あいつは俺の心を読めるんじゃないか、あの通行人はうちに火でもつけるんじゃないか。そんなありもしない疑惑で一杯だ。そこに今回の事件。悪意があれば何でもできる能力を保持した連中が悪意の赴くままに暴れているんだ。正直言い気分はしねーな」

そう言つとランは立ち上がる。襟巻きを強く巻きなおし、回りを見回す姿は誠にはどう見ても小学校低学年の姿にしか見えなかった。

「じゃあ、アタシは上がるわ」

「なんだよ・・・付き合い悪いじゃねえか」

「見たとおり餓鬼なんですね。8時も過ぎたら眠くて・・・」

要をからかうようにそう言つとそのまま立ち尽くしているラーナの脇を通り抜けていく。

「そうだ、カルビナ。茜が合格点だとさ」

「え・・・有難うございます!」

ランの捨て台詞に敬礼で答えるラーナ。誠も納得したように自分の席に戻った。

二日目は冷たい雨。それでも誠達のアパートめぐりは続いていた。

「カルビナはたいしたものだな」

ビラを見せたとたんに怒鳴りつけられたラーナ。酒臭い息を吐くアパートの住人に頭を下げて最後には一階の同居人が不審そうだと言う情報を手に入れた彼女に感心したようにカウラはスポーツカーの運転席でエメラルドグリーンの髪をそろえなおしていた。

「これも仕事ですから。それにこれで15件ほどターゲットは絞れて来ましたね」

「でもまだ全体の50パーセントくらいしかまわっていませんよ」

誠の言葉に納得したように頷くラーナ。そしてカウラが駐車場から車を出そうとした瞬間に緊急用の端末が起動して事件の発生を告げた。

『豊川駅東口で傷害事件発生！各員現場に急行せよ！繰り返す・・・』

『

「どうしますか・・・」

誠の顔を見るとすぐにラーナは自分の端末を起動させる。すぐに近くの防犯用のカメラの映像が捉えられた。

そこには右肩を握り締めて転げまわる男性の姿が映っていた。よ

く見るとその隣にはちぎれたばかりの腕が転がっている。

「決まりだな」

答えを待たずにカウラは車を発進させた。ラーナも淡々とダッシュボードからパトランプを出して窓を開いて屋根につけた。

「法術関係なんですか？」

「ともかく傷害事件。しかも腕を切り落として犯人が周りにいないなんて法術関係の可能性が高いですから」

「そういう事だ」

ラーナもカウラも乗り気で車を目的の駅前に向けて走り出させていた。

『おい、そつちも現場に向かうのか？』

画面が開いて要の活気に満ちた表情が目飛び込んでくる。

「こついつ時は生き生きしているんだな」

『余計なお世話だ』

要の言葉にこちらも妙に生き生きしているカウラは車を緊急速度で走らせて行った。

誠達が到着した時はすでに現場は所轄の警察が縄張りして捜査を開始しているところだった。

「よう、遅えじゃねえか」

すでに到着していた要がそう言つと雨に濡れながら誠達が車から降りる様子を眺めている。

「アイシャはどうした」

「ああ、アイツなら車だよ。なんでも調べ物があるんだと」

要は東都警察の制服の上のコートからタバコを取り出すがすぐに捜査官に目をつけられて仕方が無いと言つように仕舞いこむ。

「突然空間が切り裂かれて気づいたら大学生のあんちゃんの腕がもげてたそうだ」

そう言つと要は捜査員達が仕切りと集まって機器を並べて調査をしている現場を指差した。降りしきる雨の中、赤い血が明らかにここで犯罪が行なわれたことを示していた。

「被害者に法術適正は・・・」

カウラがそう言つた所でアイシャが渋い表情で登場した。

「被害者は宮野信二。二十二歳大学生。法術適正は無し」

「つまり自作自演は無し。完全な傷害事件だ」

そう言つと捜査責任者に挨拶をしているラーナを見やる要。

「うちの追つてる星か・・・まあその可能性が大なんだがな」

「確かに珍しい能力みたいですからね」

誠の言葉に満足げに頷くとようやく責任者と話をつけたラーナが誠に向かって歩いてきた。

「皆さん、やはり法術使いの犯行のようです。近隣のアストラルゲージのデータを本部に転送してもらうことで話が付きましたから」

ラーナはそう言うとそのままカウラの赤いスポーツカーに向かって歩き始める。

「おいおい、もうお帰りか？ 何しにきたんだよ、アタシ等は」

そんな要の皮肉にすぐに振り返りむつとした表情を浮かべたラーナ。だが相手が要だけに下手に行ってもごねるだけとわかって少し言葉を選びながら話し始めた。

「繁華街でのアストラルゲージ設置のお話は・・・」

「知ってるよ。法術の違法使用を防ぐ目的であつという間に広がったからな。元々民間企業にまで法術の噂が広がってたとか言ってるマスコミが大騒ぎしたあれだろ？」

「ええ、そのあれです」

そう言うつとラーナは街灯を指差す。LEDの電灯の下に小さな見慣れない箱が誠にも見えた。

「この反応のデータを転送するならわざわざこんなところに来なくても・・・」

「西園寺大尉。捜査の基本は現場を見ること。これは覚えていく

ださいね。すべてにおいて・・・」

「分かったよ！つまりアタシ等にここを見せたかったんだろ？雨がきついんだから帰るぞ」

そう言うときまだ不満そうに要は自分の銀色の車に向かう。アイシヤも同じく納得できないと言う表情でそのまま要についていった。

「もしかして僕が来るのが重要だったんじゃないですか？」

年下のラーナに誠がそう言うとき彼女は驚いたような表情で彼を見上げていた。

「法術使用の場合、アストラル系の変動の残滓が残るらしいからな。神前ならそれを見分けられると踏んだのか。見たところ無駄だったようだが」

カウラはそう言うとき赤い車に向かう。ラーナは今度はカウラにも驚いたような表情でその後続いた。

「鋭いですね。今回はこれまでよりも大事ですから。波動の残滓が残っていれば最低でも能力発動を引き起こした人物の特定くらいはできるかなあと思って・・・」

「なら無駄にならないように神前の感想を聞こうか」

「特に・・・すみません。役に立たなくて」

体を折り曲げながら助手席に滑り込む誠の言葉にラーナは少しばかり残念そうに頷くとそのまま助手席を起こしてそこに体を押し込

んだ。

「神前のおかげだな」

豊川署の狭い部屋に戻ってアストラルパターン解析の結果を見てカウラは頷いた。

「神前曹長のパターンは特徴的ですからね。それに反応して確かにこの部分で別の法術師の反応パターンがあるわけですから・・・」

ラーナは端末の画面を指差してニヤリと笑う。その表情に誠も安堵の息をついた。

「あの場所に間違いなく法術師、しかも特殊な能力を持った人物がいたわけだ・・・」

「近くの防犯カメラの映像。これを証拠に開示を頼むことはできないの？」

要もアイシャもすっかり乗り気でラーナを見つめる。

「任意になるでしょうが・・・事件が事件ですからね。自治会とかには私が手を回しておきますよ。まあ私達でなく所轄の仕事になると思います」

「まあな。何台有るか分からんがそれなりの数があるだろうっからな。それとアタシ等が歩き回って見つけた要注意人物と照らし合わせればかなりの確立で容疑者を絞り込めるんじゃないかな」

「希望的観測だな」

「うるせえよ！」

ようやく活気が戻ってきた要。それにからむカウラの表情も明るい。誠もこれまでの手探りで何もできないと思っていた自分達の手に入れた手柄にわくわくしていた。

その時不意にドアを開くものがいた。

「あの・・・」

それは杉田と言う署長の腰ぎんちゃくだった。

「なんですか？定時を過ぎたら帰ってくれとか言っんですかね」

珍しく強気に構えるラーナ。だが杉田は首を振って否定した。

「いえ、証拠が揃ったのは知っていますから」

その言葉に誠は嫌な予感がした。

「証拠が揃った？まだ容疑者も・・・」

「容疑者が自首して来ましたから」

杉田の突然の言葉に誠達は呆然として立ち尽くしていた。

「自首マニアじゃねえのか？下らねえ！」

「いえ、ちゃんと法術適正が出ていますし・・・」

杉田の言葉に要はいらだつたように足踏みをする。その高圧的な態度に白髪の混じった頭を掻く杉田。

「法術適正でもその能力の方向性はかなり違うはずですよ。検査されたんですか？」

そんなラーナの言葉にぽかんとする杉田。

「でも法術適正がありますから・・・」

「その当たりを深く判断できる専門家の意見は？」

カウラの言葉にまた杉田はぽかんとする。

「でも・・・法術・・・」

「杉田さん・・・出て行っていただけます？」

珍しい殺気がこもったアイシャの言葉。それを聞いて杉田はしかたがないというように部屋を出て行った。

「馬鹿かアイツは」

「西園寺大尉、馬鹿は無いですよ。まあ地方の警察官僚からしたらあの程度で済んでるだけましでしょ？」

そう言うところならそのまま自分の機の端末に飛びつく。だがすぐに呆然と天井を見詰めて黙りこんだ。

「止められたか、メインコンピュータとの接続が」

カウラの言葉で先ほどの杉田の言いたいことが誠にもようやく理解できた。

東都警察の制服を貸与されて勤務している誠達も所詮は同盟司法局という外様の組織の人間である。メインコンピュータとの接続と言う特権はできるだけ与えたくない。今、とりあえず容疑者が自首してきたということで捜査をすべて東都警察が行なうことになれば外様の誠達に情報を流す必要もなくなると初日に顔を見せた喰えない署長が判断したのだろう。

「でも・・・本庁の連中が動けばその自首した人間が犯人かどうかすぐに分かるわけね」

アイシャの言葉に頷くラーナ。そしてなぜかその言葉を聞いてカウラが端末に飛びつき捜査を始めた。

「どうする気だ？」

「なあに、人脈を使うだけだ。隊長の真似というところかな」

エメラルドグリーンのポニーテールを何度か撫でながらカウラは本庁の機動隊への通信の為の準備を始めていた。

次の日は誠達は全員非番だった。要ならそのまま一人で出勤するだろうと思っていた誠は朝目覚めて寮の食堂に普通にうどんを食べる要を見て意外に思ったほどだった。

「なんて顔だよ。アタシが一人で暴走するとも思ってた顔だな」

タレ目で一度誠を見た後、もみ上げの辺りが長めになっている髪型のせいでそのままうどんの汁に付きそうになる髪の毛を気にしながらうどんを啜る要を呆然と眺めていた。

「どうしたのよ、誠ちゃん」

背中に声を受けて誠が振り返る。そこには朝のシャワーを浴びてすっきりしたような顔のアイシャがいた。

「皆さん・・・」

「カルビナ待ちだ。揃ったら出かけるからすぐに食事を済ませろ」

エメラルドグリーンの髪を後ろで纏めながら歩いてきたカウラ。彼女はそのまま厨房に足を向ける。

「でも・・・非番だと・・・」

「非番だからなんだよ」

誠の口答えにうどんの汁を飲み終えた要がにらみつけてくる。

「いえ、なんでもないです」

「嘘よね。何かある顔よ」

そう言いながらアイシャも紺色の長い髪をなびかせながら厨房の前のテーブルに置かれたご飯をトレーに乗せた。

「食べちまえよ。さつさとな」

要に言われるまでも無く誠も食事のために食堂に来たわけでしょうやくわれに返ってアイシャの後ろについて食事をトレーに乗せていく。

「でも非番の日に捜査なんて・・・」

「普通はやらないけど・・・うちは普通じゃないでしょ」

デザートデザートの蜜豆みつあめを手に取りながらアイシャが振り向いてひまわりのような笑みを浮かべていた。

「遅れてすいません！」

「良いわよ私達も見ての通りこれから食事だから」

私服の皮のジャケットを着たラーナはいかにも申し訳ないというように椅子に座ったばかりのアイシャの正面に腰を落ち着けた。

「どうせ命令の範疇を超えた話になるんだからもう少し楽にした方がいいな」

「おい、カウラ。いつからそんなに話分かるようになったんだ？」

要の皮肉にこめかみをひくつかせながらカウラは誠の隣の席に腰掛ける。

「話分かるも何もベルガー大尉には本当に感謝ですよ。東都警察機動隊から警察のサーバーにアクセスできればかなり詳細な分析結果を見れますから」

「機動隊？サーバー？」

突然のラーナの言葉に誠は啞えていたソーセージを落とすところだった。

「機動隊の隊長をしているカウラちゃんの友達のエルマさんがいるでしょ？その人にお願いしたら上には内緒と言うことで手配してく

れたのよ」

「でも良いのかねえ・・・機動隊のパスでサーバーに入るってのは本来拙いんじゃないのか？」

うどんの汁を飲み終えた要の一言に周りが凍りつく。

「要ちゃん・・・正気？」

「いつものことだ。自覚が無いんだろうな。自分が命令違反ばかりしていることについては」

アイシャとカウラの皮肉に明らかに気分を害したと言うように要は立ち上がるとどんぶりを持って厨房に向かう。

「でも・・・東都警察の本部に行くんですね。パスとかは大丈夫なんですか？」

今度は誠の言葉にアイシャ達はきよとした顔で誠の顔を見つめた。

「馬鹿だろオマエ。うちの冷蔵庫から機動隊のパスで警察のサーバーにログインしてそのまま今回の事件のアストラル波動計測のデータを覗くんだよ」

「それとこれまで何度か警察も私達の知らないデータを隠しているでしょうからそちらも見てもようと言っわけ」

要とアイシャの言葉に今ひとつ納得が行かないまま誠は静かに味噌汁を飲み始めた。

「秘密を探るつてのはさあ・・・わくわくしねえか？」

「貴様は子供か？」

「子供で結構！」

ノリの悪いカウラを馬鹿にするように要が手を振り回す。驚いた整備班員がかわそうとするがよけきれずにそのまま顔面にサイボーグの怪力でのパンチが入った。

「あ・・・」

よく見ればそれは部隊最年少の整備班員の西高志兵長だった。

「ごめんね・・・馬鹿が暴れて」

まるで誠意の感じられないアイシャの謝罪。周りの整備班員の駆けつけるのが遅いことには理由があった。

保安隊実働部隊。汎用人型兵器『アサルト・モジュール』を運用する部隊は全部で四つある。第一小隊は保安隊副長と小隊長を兼務するクバルカ・ラン中佐が仕切り彼女を遼南内戦のエース、ナンバルゲニア・シャムラード中尉と伝説の傭兵と呼ばれてきた吉田俊平少佐が支えている最強の布陣だった。当然第一小隊の評価が高いので他の人材には自由度があると内外でもささやかれていた。

結果が第三小隊と第四小隊の編成に現れた。第三小隊は嵯峨の次

女である嵯峨楓少佐。胡州海軍での同性を巡るさまざまなスキャンダルのヒロインとして悪名を轟かし、お荷物として保安隊に配属されたと言うのが誠にもよく分かる人物だった。

そして第四小隊。こちらは政治的意図でアメリカ海軍からの出向者が三人配属されていた。そして彼等が運用する現用アメリカ海軍仕様のアサルト・モジュール『M10』の運用指導のために技術士官が特別に配属されていた。

それがレベッカ・シン普森中尉。眼鏡と部隊最大で要に『おっはいお化け』と呼ばれる美女でしかも彼女は西とは非情に仲がよくいつも行動を共にしている。

整備班員にとって女性隊員といえば技術部長の神と崇め奉られている許明華大佐の高圧的でサディスティックな扱いに慣れてきたところに現れた女神をあっさり若いのにさらわれたと言うことで腹の虫が収まらないのは当然で、誰もが西には思うところがあった。

「誰か助けてあげなさいよー」

明らかに助ける気の無いアイシャの言葉に呆れた笑顔を浮かべるとカウラは仕方なく倒れて目の所を押さえている西に手を差し出した。

「それじゃあ行くか！」

「西は放置か？」

要が立ち上がるのを見て恨めしそうに彼女を見上げる西とカウラ。なんともいえないというように呆れて立ち尽くすラーナ。

「要ちゃん誤りなさいよ。大人でしょ？」

そんなアイシャの一言に要の顔がゆがむ。

「分かったよ・・・すまねえな」

「ええ、僕もぼんやりしていましたから」

「そうだよ！ぼんやり・・・」

「もう良いわ。行きましょ」

アイシャはこれ以上要が何を言い出すか分からないと悟って要の腕をとった。誠とカウラは呆然と彼女達を追う。

「一応食事くらいはさせてくれるんだろ」

「ええ、でも西園寺大尉はいいとしてクラウゼ少佐は・・・」

心配そうなラーナを見ながらカウラは平然と食事を続ける。そし

てそこにアイシャが当然のように戻ってきた。

「いやあ・・・要ちゃんは簡単ね。喫煙所まで連れて行けばそこですぐにタバコを吸って終わりなもの」

「それは良いから早く食え」

「はいはい」

アイシャはすぐにテーブルに座ると食事を再開する。食べるのが早い誠とカウラはすでに食事を終えて立ち上がるうとした。

「待ってくれても良いんじゃないの？」

「片付けるだけだ。神前、とりあえず茶を入れてくれないかな」

誠の食器の乗ったトレイを奪い取ったカウラの言葉を受けて誠はそのまま部屋の隅に置かれた急須に向かって歩き始めた。

次々と時間とあつて隊員達は急いで食堂を後にする。なみだ目だった西も立ち上がり頭を下げてから食堂から出て行った。

誠は静かに急須に湯を注ぐとそのまま近くの湯飲みを取ってカウラ達の待つテーブルに向かう。

「誠ちゃん・・・私のも！」

アイシャに言われてそのまま手にした急須とカウラの湯飲みをテーブルに置くとそのままと来た道を返して湯飲みを取ってテーブルに戻る。

「本当に・・・神前曹長、いつもお疲れさまです」

そんなラーナの気遣いの言葉を聞いて苦笑いを浮かべる誠。

「いつものことですから」

「そうだな、いつものことだ。ついでにアタシのも頼むわ」

戻ってきた要はそう言うのとどっかりと椅子に腰掛ける。座ったばかりの誠はまた立ち上がり湯飲みを取りに向かった。

「そう言えば機動隊のパスでサーバーにアクセスするんだよな。機動隊の部隊長権限でどこまで入れるんだ？」

「要ちゃん・・・何の為に要ちゃんがいるのよ。そういう時は・・・」

」

「おい、アイシャ。アタシを犯罪者にしたいのか？」

アイシャの明らかにハツキングしろと言う態度に苦笑いを浮かべる要。だが席に戻った誠はどうせ証拠が見つかるまで止めても要がやたらとアクセスする光景を予想して苦笑いを浮かべた。

「じゃあ、皆さんよろしいですか？」

「茶ぐらい飲ませろよ」

「遅く来て何を言ってるのかしら」

「潰すぞこのアマ」

アイシャと要の掛け合い漫才を見ながら仕方が無いと言うように笑うカウラと誠は立ち上がった。要も湯飲みを置くとそのまま静かに立ちあがる。

「神前、かたしておけよ」

要はそついい残してラーナ達と一緒に食堂を出て行った。置き去りにされた誠は厨房の当番の同僚達から冷ややかな視線を浴びながら仕方なく湯飲みを手に荒いものの棚に運んだ。

一日経ってようやく水島の心は落ち着いてきていた。

突然目の前のサラリーマンの意識に介入した瞬間に男の能力が発動してそのまま切り裂かれた空間と一緒に腕が転げ落ちる。倒れこみうめく男。突然の出来事に慌てて泣き叫ぶ通行人。そのまま走り去らなかったのはほとんど奇跡だった。

「やっぱり・・・同盟も東和政府も何かを隠しているんだな・・・」

法律書を置いた机に向かっていてもそのことばかりが気になってくる。

人体発火は以前から都市伝説として知られていた。最近では一部のテロ組織は法術の存在を同盟機構が発表する以前から知っていて運用していたことは当然の常識だった。意識介入。いわゆるテレパシーについてもその後のプライバシー対策の為に成立した法案を見れば政府は知っていたと考えるのが自然だった。そして一応法律家を目指す水島にもそれはよく分かる能力でこれまでも他人の能力を借りて発動する際には気を配るところがあつた。

しかし今回は突然空間が切り裂かれていた。

まるで知らない法術の発現。水島は結局そのまま野次馬の一人として警察の捜査が一段落するまでの6時間ほとんど現場に立ち尽くしていた。

「しかしあの切れ味・・・色々使えそうだな」

突然湧き出てくる独り言。その能力が強力で簡単に発動するものだったことに気づくと不意に水島の顔には笑みが浮かんできた。

「色々使える・・・色々使える・・・」

笑みが止まらない。行政訴訟に関する判例集は次第に水島の『色々使える』と言う言葉に埋め尽くされていく。鉛筆を持った水島の手。まるで意思を持ったように同じ言葉を書き連ねていく。

「もしかしたら神にでもなったつもりなのかな」

突然の背中での声に水島は驚いて振り返った。

そこには当然のように以前東京都であったアメリカ大使館の関係者の少年が立っていた。ヤンキースの帽子。噛み続けるガム。それらの典型的すぎて笑いが出てきそうな特徴について水島も驚きから笑顔に表情を変えていた。

「そんなに驚かなくても良いじゃないか。知りたいんだろ？あの切れ味とあの力で何ができるか」

「つまり今の君のようなことかな？」

冷静に当たりを觀察して水島はそうつぶやいた。明らかに自分の脳裏には昨日の血まみれのサラリーマンに感じた感覚と同じ雰囲気があたりに漂っていた。

腰を抜かした水島に一步一步向かってくる。

「ど……どうするつもりだ……」

動揺する水島の様子に満足げな少年。仕方なく水島は静かに座りなおした。

「靴で上がるのは感心しないな」

「おっと……大使館の私室からなので……失敬！」

そう言つとすばやく靴を脱いだ少年はそのまま腰を下ろす。

「アメリカ大使館で暮らしている……信じろと言われても……」

「よく覚えていたね……なんだか難しい本が一杯」

少年はそのまま四足で歩いてくると水島の机の上を覗き込む。

「一応法律家を目指しているからな」

「おじさんが？」

そう言って笑う少年の頬には悪意が見て取れて水島はそのまま黙り込んだ。

「それより僕についてくれば厚遇してもらえんと思うのにな・・・」

「モルモットとしてだろ」

水島のつぶやきににんまりと笑う少年。そして彼はそのまま腕の通信端末を開いた。

「見てごらんよ。おじさんが能力暴走を引き起こした人。死んじやったよ」

少年の言葉に水島は彼の端末も開いた。しかしそのような情報は何度検索しても出てこない。

「おじさんのじゃ駄目だよ。僕のは一応ネットしている範囲が広いからね。警察や病院を検索すれば出てくるんだ。便利でしょ？」

淡々と語る少年。水島は少しばかり諦めたように肩を落として少年の端末に移る箇条書きの被害者の死を知らせる文書を眺めていた。

「ついに死人か・・・」

要の顔が緊張する。

保安隊豊川基地。そのコンピュータルームに着いた誠達はその二
コースに眉をひそめた。

「いつかは出ると思っていたけど・・・早かったわね」

「そういう問題じゃないだろ・・・西園寺。そのまま普通に東都警
察警備部機動隊第三中隊にアクセスしろ」

アイシャの緩んだ笑いもカウラの緊張した言葉に吹き飛んだ。ラ
ーナと誠が見守る中、要はそのまま端末の前に腰掛けると首筋のジ
ヤックにコードを挿して端末を起動させる。

「普通にそのままログインすればいいんだな？」

「安心しろ、エルマも多少はサポートしてくれるはずだ」

そんなカウラの言葉ににやけた笑みを浮かべる要。その目の前の
端末がとても追えない速度で切り替わり始める。

「機動隊・・・第三中隊つと」

要のつぶやきと同時に飾り気の無い画面が映し出される。

「そのまま右下の空欄に・・・」

「8954356か？アタシでもパスワードが拾えるんだからかなり楽勝なんだな」

「そう言いながら枝は残さないでよ」

アイシャに茶化されたのも気にせず要は本庁の資料室にアクセスした。

「法術系の・・・アストラルゲージ・・・」

「ずいぶんと数だけはあるのね」

東都一円を示した地図には満遍なく設置されたアストラルゲージの位置が示しだされた。それはほとんど一つの町内に一個と言う数のものだった。

「これだけ設置して犯人が捕まらないのか？職務怠慢だろ、東都警察は」

「法術適正がある人が通ればある程度反応しますから。同じパターンのすり合わせなどの技術は同盟司法局もとうと警察には教えていないので・・・」

「縦割り行政の弊害って奴か？」

ラーナの言葉に苦笑いを浮かべながらこれまで演操術による法術暴走が起きた場所近くのアストラルゲージのパターンを読み込み始めた。

「かなりノイズがあるんじゃないのか？」

要もまた同じくデータの照合を行っていた。証拠になるのは昨日の殺人と変わった法術暴走事件。そこでの被害者の法術発動の際に引き起こされた波動を取り去って演操術者のアストラルパターンはすでに採取済みだった。

「神前曹長やナンバルゲニア中尉クラスならすぐに分かりますが・・」

「急ぐことは無いだろ。慎重に進めてくれ」

カウラはそう言うとそのままドアに向かう。

「カウラちゃん？」

「ああ、コーヒーでもいれてこようと思ってな」

その言葉に目を点にするアイシヤ。だが次の瞬間には満面の笑みといったもの流し目が顔に浮かんでいた。

「進歩したのね、カウラちゃん」

「馬鹿にしているのか？」

捨て台詞を置いてカウラが出て行く。要とラーナはそれぞれデータの照合作業を続けていた。

「やっぱりノイズが多すぎるな・・・本当に法術師の発生割合は2パーセントなのか？」

「一般人でも感情の起伏によってアストラルパターンの異常は起きますから。どうしてもそういうものまで拾っちゃうんですよ」

要の泣き言に付き合うラーナ。誠とアイシャはただ次々と流れていくアストラルゲージを眺めているだけだった。

「でか・・・」

突然の要の言葉にラーナの手が止まる。そしてすぐに要が検索した四件目の放火事件の現場のパターンに目をやった。

「これは・・・でも大きすぎますよ・・・嵯峨大佐でもいたんですかね」

「アタシに聞くなよ」

誠も目にしたパターン。それはアストラルゲージが完全に振り切れるほどの反応を見せていた。

「それは別件でしょ。次に行つて頂戴よ」

投げやりにそう言ったアイシャに要はにらむような表情で見つめ返した。

「いいのか？」

「良いも悪いも私はその法術適正者には関心が無いもの」

「関心が無いって・・・」

「止めておけ」

憤る要。マイペースのアイシャ。二人の間に立ってカウラは苦笑いで隣で作業中のラーナに目をやった。

「私達の任務はすべての法術適正者を監視下に置くことじゃありませんから」

「そ・・・そうだな」

要の視線が誠に向かう。誠はただ頭を掻きながら作業を続けるラーナを見つめていた。

「演操術系のパターンは特徴的ですから・・・」

それだけ言うとそのまま作業を続けるラーナ。要も仕方なくアストラルゲージを眺め始めた。

「共通項って・・・どうやったら分かるの？」

「β波が特徴的です。一般人の約一万倍の強さで出ますから。パ

イロキネシストや領域把握系の法術ではほとんど見れませんが空間干渉系の法術発動時にはそれなりに出ます」

「ふうん・・・それって法術発動時以外にも出るの？」

「他の法術と違って意識しなくてもある程度発していますから・・・出た！」

ラーナの叫びに視線が彼女に集中した。

「港南区の放火未遂事件。ちゃんと出てますよ」

そう言うとならなは画面を事件直後の映像に切り替える。ごみの山が半分ほど焦げた状態の現場と結局は不起訴になった容疑者の顔写真が映し出される。明らかに悪人と言うような表情の頬に傷のある男。思わず誠は苦笑いを浮かべた。

「おい、こいつが犯人じゃねえのか？」

「違いますよ。意識をトレースした結果この人物にはこの場所で放火をする理由がありませんし・・・」

「意識トレースか。実用になっているんだな」

法術の研究の急激過ぎる発展で得ることができた脳反応をトレースしての意識を読む技術。おかげで警察の取調べの手間はかなり少なくなっただと誠も聞いていた。

「で・・・一箇所じゃ決まらないだろ？続けんぞ」

要は感心すること無くそのまま自分の端末に目を移して作業を開始した。

「・・・でデータ照合はできた。後は・・・」

すでに夕方だった。要は食事もとらずに検索を続け、ラーナは何かパンをかじりながら端末で地味な照合作業を続けた。そして東都の一連の法術暴走事件が一人の法術師によって引き起こされたこと、その人物は豊川で死者を出す法術使用を行なったことがわかった。

「本人を見つければ簡単に話は済むがな・・・どうやって見つける？」

カウラの言葉に全員が呆然としていた。法術適正のある遼州人は全人口の一割程度。近隣の都市を含めれば対象となる人物の数はとても誠達では手がおえない。

「これは資料を豊川署の面子にたたきつけるのが精一杯か・・・」

そううなだれたカウラ。突然全員の端末のモニターが消えた。

「俺の仕事になりそうだな！」

聞き慣れた叫び声がすべてのスピーカーから響いた。

「吉田の馬鹿か・・・」

「馬鹿？それなら手を引くぜ俺は。豊川署の署長はそいつを有効に使ってくれるか・・・微妙なだけだな・・・」

「いえ！すみません！調子に乗っていました・・・馬鹿少佐」

相変わらずの減らず口の要。画面が戻るとそこには額タオルを巻いている姿の吉田俊平少佐が映っていた。

「農作業？」

『仕方ないだろ？シャムがやるって聞かないんだから。今のうちに土と肥料をなじませないと来年の実は保障されないんだそうな』

背後に耕運機のエンジン音が響く。思い切り脱力しながら誠達は画面を覗き込んだ。

「今更出てきて何するつもりだよ」

要の言葉は冷たい。確かに以前から何度と無く協力を頼んでは断られていただけに誠も吉田の真意が図りかねた。

『法術師のアストラルパターンデータにはうちはフリーパスで入れるからな。照合するデータの件数は俺クラスじゃないと扱えない規模になるだろうからな』

「いつそんな特権ができたんだ？」

『同盟厚生局とやりあったときに貸しを作ってくれたのはお前等だろ？そのとりたてとしてみれば安いものさ』

要の問いに答えながら吉田はいい顔で額の泥をぬぐっていた。

「なるほどねえ・・・じゃあ後は頼むか」

要の声に吉田が嫌な顔を浮かべていた。

『まあ・・・さっさと帰れよ。俺が何とかして明日には結果を出せ
ると思うから』

端末の画像が途切れる。カウラが大きいため息をついた。

「ベルガー大尉。所詮我々でのローラー作戦なんて無意味ですから」

「分かっているが・・・なんだか気になってな」

カウラはそう言うと言の首のネクタイを緩める。

「何でも自分で背負い込むのは止めた方が良いわよ」

「なんだよ、アイシャ。ずいぶんと知った風を気取るじゃねえか」

そんな要の言葉にやりと笑うと端末を仕舞うアイシャ。カウラ
や誠も端末の終了作業を行なっている。

「で・・・簡単に分かるものなのか？」

ネクタイを外したカウラの問いに苦笑いを浮かべるラーナ。

「証拠として採用できる範囲の情報があるかどうか・・・」

「そうだよな。吉田のおっさんは犯人を見つけましたというかもしれないが証拠が無ければ逮捕と言うわけには行かないからな」

「あら、要ちゃん。『疑わしきは罰せず』と言う刑法の基本も知ってるのね」

再びチャカしたアイシャの細い目を要がたれ目でにらみつけている。

「お二人とも！とりあえず終わりにしましょうよ」

誠の言葉で二人は舌打ちしながら離れていく。気分が悪いと言うように要は終了した端末から首につながるコードを抜くとそのまま立ち上がり出て行った。

「単純！」

うれしそうに笑いながらアイシャはエラー画像が出た誠の端末を軽くいじって終了させてやっていた。

突然のドアを叩く音で誠は目を覚ました。

「なんだよ……」

だがすぐにその理由を思い出すと共に外にるのがカウラだと直感した。要やアイシャなら怒鳴り込んできているはずなのである程度予想がつく。

「すみません……ちょっと待って……」

そう言つて布団を払いのけて立ち上がったところでドアが勝手に開いた。

「のんびりしやがって……」

呆然と立ち尽くすカウラの隣の要。誠もいつものことながら呆れたように要を見つめていた。

「吉田さんの調査が終わったんですか？」

「まあ、そんなところだ。とつとを着替えて食堂に來い」

要はそれだけ言つと立ち去る。立ち尽くしていたカウラと誠の間に気まずい雰囲気が漂った。

「そのジャージ。ちゃんと洗濯しろ。臭いぞ」

それだけ言い残し消えていくカウラ。

「ドアぐらい閉めてくれても……」

誠は直感でそのままドアに伸ばした手を止めた。すぐにその手は何物かに強く握られている。

「クラウゼ少佐……」

ドアの影のアイシャの紺色の長い髪に誠はため息混じりにその口を開いていた。

「びつくりした？」

「いえ、慣れましたから」

「そうつまらないのね」

誠の手を離してそのまま消えていくアイシャ。誠は仕方なくそのまま戸を閉じると着替えを再開した。

とりあえず黒い寝間着代わりのジャージを脱いで美少女戦隊モノのＴシャツに袖を通す。

「はあ・・・吉田少佐の検索結果か・・・」

ため息をつくと今度はジーンズに足を通した。そのまま寒さに耐え切れずにセーターに袖を通す。一月も終わり。地球と同じだと言う公転周期を持つ遼州の日差しもなぜか冷たい。

そのまま廊下に出る。住人に整備班員の占める割合の高い寮は出勤時の騒動の中にあつた。廊下を歩いても誠の隣を駆け抜けていく技術下士官が三人もいた。階段を駆け下りるのはとりあえずの演技。そしていつものように誠は食堂のドアにたどり着いた。

「遅い！遅い！」

カウラが珍しく大きな声で誠に叫ぶ。彼女の隣には要とアイシャ、そして都内のアパートから来たらしいラーナの姿もあつた。

「緊張感が足りないんじゃないですか？」

ラーナのきつい一言に頭を掻きながらカウラ達の座るテーブルに席を確保する。

「結果は出たんですか？」

そんな誠の言葉にカウラ達は顔を見合わせた。

「法術適正があつて時期的に豊川付近に移住している人物のピックアップはできたんだが・・・」

「でもだいたい絞り込まれてきたじゃない。ローラー作戦とかをやると思えば労力は雲泥の差よ」

「まあ・・・確かにそうだ」

浮かない顔のカウラ。納得したようなアイシャ。要は今ひとつ納得できないと言うように腕組みをしている。

「ともかく対象はかなり絞られました。後はそれぞれのアストラルパターンを検出。そして符合した人物の行動を追っていけばいいんですよ」

「簡単に言つなあ、お前さんは」

ラーナの言葉に要が眉をひそめる。そして誠も今ひとつ理解できずについ朝食の乗ったトレーを持って珍しそうに自分達を眺めている島田と目があつた。

「俺は・・・とりあえずしばらく無理だから」

「あてにしてねえよ」

気を利かせた島田の言葉に噛み付く要。なんとも雰囲気が悪くないことで誠も少し状況が読めてきた。

「人数が多すぎるんですね」

その一言にラーナは端末の画像を誠にも見えるようにしてみせた。
そこには15人の男女の写真と経歴が並んでいるのが見えた。

「この全員に『警察のものです……失礼ですがアストラルパターンのデータの計測をお願いできますか？』と言って回るわけか……殴られるぞマジで」

要の言葉。そしてアイシャがため息をつく。

「でも……任意の調査をお願いすることは……」

誠の一言に全員の生暖かい視線が誠に向けられた。

「おい、この元となる資料。もし星を検挙して証拠に使うつもりか？どれもあのロボ少佐の違法なアクセスで見つけた資料だ。証拠どころかアタシ等が大悪人に仕立て上げられて終わりだよ」

「さすがの西園寺もそのくらいは分かるんだな」

「そのくらいって何だよ」

カウラと要がにらみ合う。誠もようやくこの15人を一人に絞り込むことの難しさに納得した。

「じゃあ……全員の行動を」

「だから！誠ちゃん。なぜこの15人なのかを知られたら拙いわけよ。それに下手をすれば他の組織が動き出しているかもしれないしね」

「それはあるかもな」

いつの間にか二人して沢庵が山と詰まれた皿を突付いている要とアイシャ。その二人を見ながらアイシャの言葉が容易ならざる事態を予想していることを理解した。

「最近聞く『ギルド』ですか？」

誠の言葉に一同は沈黙する。常に誠達の能力に関心を持っている遼州民族主義の非合法組織。その名前はすでにタブロイド紙に名前を載せ始めるほどの活動を始めていた。さらに口にはしないが地球諸国や外惑星のネオナチ組織、さらに以前の同盟厚生局のように同盟組織内部でもこの事件の主犯の能力は手に入れたいものだとはすぐに察しがついた。

「つまりだ。アタシ等の仕事はこの15人の全員の身柄を安全に保ちつつ、その中でこの前のアストラルパターンを持った人間を特定して生きたまま逮捕することだ。分かるだろ？」

要の言葉に誠はつばを飲み込む。そして事態がかなり厳しい段階にきていることを理解した。

「安全を守るって・・・犯罪者・・・」

「馬鹿か？今回の違法法術行使はすべて同一犯の犯行と言うことはアストラルパターンデータで分かったことだろ？それとも何か？このデータ自体に問題が・・・！」

突然要の表情が変わった。彼女の言葉でカウラとアイシャの顔色も変わる。

「能力演操のデータは少ないですから。それが同じ人物によるものかはなんとも・・・」

ラーナの言葉に全員が言葉を呑んだ。これまで同一犯と思っていた事件が複数による犯行なら・・・そう考えるとすべての捜査が無駄になるように思えてきた。

「そりゃあねえな」

突然端末のスピーカーから聞こえてきたのは嵯峨の声だった。いつもの嵯峨の監視癖を思い出したが誠が周りを見渡せば要もアイシヤもカウラも救われたような顔をしていた。

「吉田から聞いたよ。演操術系の法術のデータなら今そちらに送ったぞ。まあこちらでも証拠としては使えない某国の秘密実験データのコピーだからな。つまり犯人を逮捕して自白させない限りこの事件は解決しないわけだ」

そして嵯峨の言葉が終わる。

誠にも意味は分かった。状況証拠が揃っても意味が無い。犯人を特定するだけでも無駄。すべては生きている犯人を逮捕して自白をさせ、それにあった承認や証拠を別にそろえなければ事件は解決しない。

「蜂の巣にはできないわけだな」

要は私服を着ても懷に下げている愛銃を叩いた。その滑稽な動きにカウラが微笑む。

「そう言う事です。多少の捜査の工夫が必要になると言うことで・・・ちよつとこのデータを嵯峨茜警視正に送りたいのですが・・・」

遠慮がちなラーナの言葉に要とカウラが大きく頷く。ラーナはそれを見ると再び端末にかじりついた。

「茜のお嬢さんのプロファイリングが終わるまでは・・・」

要が周りを見渡す。すでに彼女の言葉が分かっているカウラとアイシャが頷く。

「とりあえず15人の現在の住所を確認。見つからない程度にその現状を観察していつでもプロファイリングの結果に対応できるシミュレーションを行なう」

「カウラ。それだけわかってりや十分だ。飯にするぞ！」

要は満足げに握りこぶしを向けてきたカウラの右手に自分のこぶ

しをぶつけた後、すでに定時を過ぎて閑散としてきた食堂の厨房に向かつて歩き出した。

「隊長は悪人ですね・・・」

早朝、まだ部隊には人影は少ない。そんな中『ゴミ屋敷』の異名のある保安隊隊長室で通信端末の電源を切る嵯峨惟基の姿があった。それを横目で見ながら少し前までコンピュータ室にいたシステム担当部長である吉田俊平のにやけた顔がある。

「まあな。あいつ等も少しは成長してもらわにやらねえよ」

「ずいぶんと気長ですね」

そう言いながら手元で器用に作っていたココアの中にお湯を注ぐ吉田。ミルク無しでは飲みたくないと言うように嵯峨は目をそむけて立ち上がった。

「なあに気長なもんか。俺の本音じゃまだまだアイツ等の成長は遅すぎるよ」

嵯峨が伸びをするのを見ながら吉田はぬる目のお湯でココアを溶いたものを口に含んだ。

「美味くないだろ？」

「ええ、まあ」

咳き込みながらつぶやく吉田をにんまりと笑いながら嵯峨は眺めていた。

「ですが本当にゲルパルトや『ギルド』は動かないんですか？」

吉田の問いにしばらく考えた後嵯峨は椅子に腰掛けて目をつぶって腕組みをした。

「ゲルパルトについては現在数名の法術師を抱えてその調整にてんてこ舞いだと言う情報があつてね。それを考えれば元々遼州人を信用しない連中のことだ。手を出す可能性は少ないな。それに対して『ギルド』は法術師集団だ。人に自分の力を使われるのは面白い話じゃないだろ？」

「ずいぶん情緒的な話ですね。情緒で政治を語るのは最悪の馬鹿野郎と言っている口から出る言葉じゃないですよ」

そんな皮肉に嵯峨は苦笑いで答える。

「俺だつて連中が介入しない確証は欲しいんだけど・・・それほどはつきりと動きを見せてくれるほど甘い連中じゃないしな。そして俺は地球勢力については何も言つてないぜ」

嵯峨はそう言いながらゆっくりとココアを口に含む吉田を見つめていた。

「隊長、飲みたいんですか？」

吉田の問いに嵯峨は大きく頷いた。

四月から始まる法科大学院の授業に向けて、水島勉は予習に怠りが無かった。

元々今度入学する母校の社会学部出身と言うこともあり、東和でも有名な法学部の授業を専門で何件か受講していたので気分は楽だった。

彼の隣ではテレビが音も無く光っていた。とりあえず勉強の合間にちらちら見る。それが昔からの水島の勉強法だった。そしてそこに先日の異常な法術を展開して腕が取れるのを目撃した自分の能力の被害者の姿を見て少しばかり筆を休めた。

「死んだのか」

実感が沸かなかった。実際水島にすれば異常な法術の力を制御できずに慌てていたら一瞬現れた空間に能力者の腕を持っていかれたような感じがするだけだった。

初めての感覚。痛みのにたつつ能力者の苦痛が頭の中に流れ込んできてしばらく動けなかったことを覚えている。

「これは違法法術展開罪が適用対象だな。僕はただ・・・」

思わず独り言でも言い訳をしている自分。そして自分の能力を買っているらしいアメリカ大使館付きの武官を名乗る少年。

少年の話も正直昨日の闖入が無ければ信じてはいなかった。人体

発火や読心術など、発動に警察の許可が必要とされる法術は知っていたが、空間を歪めて場所を移動したり空中に立ったり何かを切り裂いたりできる能力があるとは水島も予想はしていなかった。

テレビのニュースが切り替わり天気予報が始まる。それを見ると再び水島は民法の判例集に目を落とした。

文字が見えなかった。

人の死。しかも予想もしていない事故のような人の死が自分の中で広がっている。元々友人を作るのが苦手で孤立しやすいところからリストラを食らった自分の人生を考えると人の死に出会ったのは父が去年全身に転移したガンで死んだ時くらいの記憶しかない。

「簡単に死ぬんだな、人は」

まるで先の大戦の時の台詞だと自分の独り言に笑ってみせる。それでも不安感には耐えられないものがある。

「警察は動いているだろうな・・・でもこんな能力はそう無いんだ・・・法術犯罪で違法発動が決められている力にはこんな力はないし・・・」

もう一度言い聞かせるが、すでに勉強をできるような心理状態では無く、そのまま身を布団に投げて朝寝を気取りたい衝動に駆られてそのまま立ち上がると先ほどもしまった布団を押入れから取り出しにかかった。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 112

「計十五名」

カウラの言葉に頷くべきかどうか誠は迷っていた。ラーナの指示で杉田という警視を呼んで現在の容疑者の絞込みのプロセスを説明するが、まさか吉田の直接東都保険局にハッキングしてデータを取り出したということは言うわけにも行かず『同盟厚生局の資料』と言う言い訳で何とか説明しようとしたが、明らかに杉田は胡散臭い目つきでモニターを動かすカウラを眺めていた。

「問題にならないですね。馬鹿馬鹿しい」

そんな杉田の一言に要が飛び掛りそうな勢いで立ち上がろうとするのをアイシャが何とか制した。しかし誠も要の気持ちはよく分かった。

「犠牲者が出てしまったんですよ・・・」

「それは分かっているんですが・・・これではこの十五人ですか？この誰かが自首してくれない限りはそのまま証拠不十分で二週間で釈放ですよ」

「んなことは分かってんだよ！」

要はついに切れて机を叩き折ってしまった。その轟音と迫力でさすがの杉田も飛び上がったとつさる。

「しかし・・・もしこの事件の犯人に興味を持つ人物が接触を図っ

たとしたらどうします?」

「クラウゼ少佐・・・いや、警部。言っている意味が分かりませんが・・・」

「分かりませんじゃなくて分かりたくないって意味なんじゃありませんか?」

切れ長のアイシャの目が凡庸な顔立ちの杉田を捕らえた。しばらく目をそらし、頭を掻きながら考えた振りをしている杉田。その様子がさらに要をいらだたせて立ち上がる口実を与える。そして当然のように驚いた杉田が椅子を後ろに下げた。

「実際前の『同盟厚生局事件』を見れば分かるようにゲルパルトの非合法テロ組織やベルカンや東モスレムのイスラム原理主義勢力による法術師の開発や取り込みの動きがあるのはご存知ですよね」

アイシャの落ち着いた言葉遣いに何とか要におびえる心を奮い立たせるように杉田は椅子を元に戻した。そして口を開こうとするところでアイシャはそれを制するように言葉を続けた。

「現在私達同盟司法局でも他者の法術適正を発動させると言う今回のような能力を持った例を確認してはいません。我々にとってもまた今回の容疑者の能力はきわめて興味深いんです。それはどの組織にとっても同じことだと言うのが専門家の一致した見解です」

『専門家の一致した見解』と言うアイシャの言葉に要が噴出しそうになるのを必死にこらえている姿がおかしくて誠は思わず噴出したが、冷酷そうに見えるアイシャの細い目ににらまれてそのまま黙り込んだ。

「つまり・・・法術に関心を持つ組織が本当に実在するとして、彼等がこの十五人との接触を図ると言いたいんですね」

さすがにここまで言われて杉田は苦々しげに話しの序の口に当たる前提条件をようやく認めてみせた。

「確かにそうですが・・・」

「まだ何か？別件逮捕や予防検束をお願いするつもりは無いですよ。戸別訪問もありません」

アイシャの言葉に大きいため息をつく杉田。それを見てまた要が噴出しそうになっているのが誠の腹筋を刺激する。

「それとなく監視してください。それと・・・」

そう言って立ち上がったアイシャは部屋の隅の大きな箱に向かう。誠も見ることが無いいつの間にか置かれた上下一メートルほどの箱をアイシャが持ち上げようとする。

「ちょっと！その怪力二人！」

「誰が怪力だ！」

誠はアイシャの助けに向かうが売り言葉で挑発された要は叫ぶだけで立ち上がる気配も無い。仕方なくアイシャと箱を持ち上げようとしてみた。結構な重さと中に入った多くの小箱が箱の上から見えた。

「菱川精密機械・・・」

誠は隙間のラベルを見て読み上げる。二人で運ぶ大きな箱に杉田は興味を示しているようだった。

「これが・・・簡易型のアストラルパターンゲージです」

テーブルの横に箱を置くとアイシャはその中の一つ。二十センチ四方くらいの小箱を取り出した。思わず立ち上がる杉田。そしてアイシャは彼の興味深そうな瞳を一瞥した後その一つを取り出し開封した。

緩衝材に包まれた小型の弁当箱のようなものが誠の席からも見えた。そして渡された杉田はいくつかのモジュラージャックとディスプレイのついたアストラルゲージをまじまじと眺める。

「警邏隊にこれを持ってパトロールさせるくらいのことではできませんわよね」

「ええ・・・そのくらいのことなら・・・」

そう言いながら珍しい機械に興味深げに見る杉田。

「これでこれまでのすべての犯行現場で観測されたアストラルゲージの値と一致する人物を特定していただければ結構です。後はうちのお仕事ですから」

「はあ」

アイシャの自信に満ちた言葉にただ呆然と杉田は頷くしかなかった。

「それでは警邏の担当者と話を詰めますので・・・この機材は？」

「すべてお持ちいただいてもよろしいですよ・・・なんでしたら運びましょうか？警邏課まで」

「いえいえ・・・」

アイシャのサービス精神に杉田はきびすを返すとそのまま部屋を出て行った。先ほどまでイライラを溜め込んだ表情をしていた要がにんまりとタレ目をさらに酷くしている。

「なに？その顔」

「いいじゃねえか」

要とアイシャ。二人ともニヤニヤしながら席に戻った。カウラは何とか乗り切ったと言うように慣れない東和警察の襟の形を気にしながら席に戻る。

「これで一段落・・・と言いかしばらくはすることがなくなるわね」

「そうか？いきなりドカンと本命にぶち当たるかもしれねえぞ」

「それだつてしばらくは地道な市民との協力関係を築いている豊川警察署の皆さんによる各種の事前調査の後でしょ・・・あれの出番は」

そう言って先ほどの箱の隣の黒いケースを指差すアイシャ。そしてその姿から誠も中身が大体想像がついた。

「ショットガンですか？」

「低殺傷性のね」

誠の質問にあっさり答えるアイシャを見るとすばやく要が立ち上がる。慣れた調子でその一番上のケースを運んできてテーブルの上でふたを開く。

「オレンジ色ね。ずいぶん派手じゃないの」

「ローリーサルウェポンにはこういう色で区別をつける必要が有るんだよ。元々低圧の制圧弾やゴム弾を使用するんだ。実弾入りのショットガンと同じ色だといざと言う時に泣きを見るからな」

そう言つと要はショットガンを取り出しすばやくそのフォアエンドを握り締めて引く。

「弾はこの装備課からの支給になるな」

カウラの一言に要の笑顔が曇るのが誠にも分かった。

「弾はキムの支給が良いね。あいつなら間違いない」

要の言葉にカウラも頷きつつも複雑な顔をした。

「一応これも東都警察の借り物だ。違う系統の弾丸の使用許可など出ないだろうな」

そう言うカウラを無視して銃を構える振りをする要。その表情は冴えない。

「確かにキム君の選んだ弾なら信用できるけど・・・元々こういう非殺傷銃器の扱いなんて素人の東都警察の下っ端のこの署の銃器担当者の選んだ弾でしょ？いざと言う時不発で泣くのは私達だからねえ・・・」

アイシャの表情も冴えない。誠はわけも分からず目の前に置かれたオレンジ色の塗装が施されたショットガンを眺めていた。

「そんなに不発とかが多いんですか？打撃性の銃弾って・・・」

「オメエははじめはリムファイアの22LRのルガーを使ってたかな。あれよりはましだと思うが・・・」

要はショットガンをテーブルに置くとそのまま座って分解を始める。

「元々低圧力の稼動ということで調整されているはずだけど・・・」

場所によつてはただ色を塗っただけのを支給しているところもあるのよ。そう言うので撃てばこの銃はセミオートも可能だから・・・」

「排莢不良ですか？それとも・・・」

「全部だね。銃で問題になるような出来事はいくらでも起きうる。キムの奴のメンテナンスは伊達じゃないんだ」

珍しく人を褒める要を見て誠は小火器担当にして部隊の二番狙撃手であるキム・ジュンヒ少尉のごつい顔を思い出していた。

「それじゃあ今回も・・・」

「神前。そんなに気にするな。とりあえず手動で対応すれば不発はそのまま無視して排莢すれば問題ない」

「カウラ。甘ちゃんだぞ。相手は必死の法術師。どうなるかなんて読めないんだからな」

要の顔はいつもの残酷さを帯びたまま銃を解体していく。

「どう、要ちゃん」

「油はちゃんとさしてある・・・っていうかこいつは一回も撃ってないな・・・」

「勘弁してよ・・・こいつをセミオートで撃ったら絶対トラブル起こすわよ」

「ならポンプアクションのみで対応しろ」

「冷たいのね、カウラちゃんは」

アイシャはそう言っていると自分の銃も分解を始めていた。

「いやあ、まったく世話になっているね」

それは見た目がどう見ても7、8歳の小柄な少女が言う言葉では無かった。ただし彼女の着ている東和陸軍と同型の制服の襟章に中佐の階級章と胸にいくつもの特技章をつけていることを知れば軍の人間なら彼女がただの少女ではないことはすぐに分かるはずだった。

「クバルカ中佐。こちらこそいい勉強をさせていただいておりますわ。感謝しなければならぬのはこちらの方かも知れませんか」

こちらは東都警察と同じ制服。襟の階級章は警視正。東都の遼州同盟司法局ビルの最上階の食堂のラウンジで出会っている二人でなければ誰かが声をかけるだろうというような美貌の警視正はゆっくりとコーヒースプーンを啜った。

警視正、嵯峨茜は軽く外に目をやった。

「やっぱり見つからねーか。うまく隠れているもんだな」

少女クバルカ・ランは同じくビルの続く東和共和国の首都の街を眺めた。

「辻斬りなんていう古風な犯罪。できる人物が限られているというのにつながらない犯人。上層部は無能と思っているかも知れませんか」

要は長い髪を静かに掻きあげると再びおさげ髪の少女に目を向け

た。

「自分を責めるんじゃないぞ。あの化け物・・・桐野孫四郎か。簡単に捕まるなら司法局の出るまでもなく所轄の連中が誇らしげに連れてきているはずだろ。しばらくは我慢するしかねーよ。それにこの一月被害者が出てねーんだ。これも茜の手柄と言っていーんじゃないのか？」

乱暴だが余裕のある言葉遣い。それが見た目は子供でもこの人物がいくつもの経験をつんだ古強者であることを証明しているように見える。

その少女ランは静かにコーヒーのカップを置くと平らな胸のポケットから端末を取り出して画像を表示した。

「オメーの指示であいつ等がようやく捜査に区切りをつけたらしいや」

表示された立体映像には十五人の容疑者の映像が映し出される。満足げに頷く少女ランと茜。

「実働部隊隊長・・・いえ、保安隊副長としては感無量なんじゃないくて？」

「まあな。あいつ等も多少は使えるようになってきたわけだ」

思わずランの頬に笑みが浮かぶ。それを見て茜もうれしそうな表情を作る。

「さて、これからどう事件を纏めるか・・・期待してるぜ」

ランはそう言う立ち上がる。

「あら、クバルカ中佐」

「いやあ、実はこれから教導隊の連中と打ち合わせだよ。まったく面倒な話さ、人を育てるってのはよ」

らしくないと言うように肩をすぼめたランはそのまま周囲の関心を引きながら手にしたコートを纏めて持ってそのまま食堂から出て行った。

「どうだい」

要はそう言つとモニターを見つめているラーナに目をやっていた。そこには警邏隊のアストラルデータの値がグラフで表示されている。

「そう簡単に見つかれば楽できるんですけどね」

そう言つとラーナは椅子の背もたれに体を預ける。軋む椅子。その音に驚いたようにラーナは背筋を伸ばした。

「ある程度絞り込めれば後は私達でもどうにかなるだろ」

カウラの言葉にアイシャも頷く。その浮かない様子に誠はアイシャのモニターを見たがそこではネットオークションで同人漫画を落とそうとしているらしい様子が見て取れた。

「他人任せつてのは・・・どうもねえ」

そんな要の言葉に全員が同意するような雰囲気をかもし出している。誰もが部屋に閉じ込められてこうしてデータだけを与えられる情況に飽きてきていた。

「後定時まで30分か・・・久々にあまさき屋を冷やかすか？」

「それはいいんだけど・・・よかったのかしら。支給されたシヨットガンを全部隊に送っちゃって」

アイシャの言葉にカウラとラーナの視線が要に向かう。要はめんどくさそうに椅子に腰掛けると端末を起動していた。

「犯人に逃げられたら終わりだろ？良いんだよ。名人は道具も選ぶもんだ」

「誠ちゃんも名人に入れる訳？」

冷やかすようなアイシャの声に誠は要に目を向ける。要は一瞥した後大きくため息をついた。

「そんな・・・僕だって多少は上手くなっただけですよ」

「多少はな・・・だかそれじゃあ本番にはどうなるかわからねえ」

「西園寺。突入の時は神前と組んだらどうだ？」

カウラの冗談に要はいかにもめんどくさそうな表情を浮かべる。その顔を見て誠はいつもどおり落ち込んだ。

「それもこれも・・・ちゃんと犯人が見つかったから話ですからね」

相変わらずラーナは画面に張り付いたまま手にしたせんべいを口に放り込んでいた。

「アストラルパターンデータ。便利ですよねえ」

突然のアイシャの言葉に視線が彼女に集中する。

「だってそうじゃないの。確かに法術の研究は誠ちゃんが全世界的に存在を示しちゃった『近藤事件』の前から進んでたけど・・・それにしてもなんだかどんだ対応製品が出てきて・・・恐くならない？」

「まあな。その筋の専門家はうちじゃあヨハン・シユペルター中尉殿だが・・・あのデブ。絶対に本当のことは言わないからな」

アイシャに言った要の言葉の中のヨハンのことを思い出して誠が噴出す。外惑星の国家、ゲルパルト共和国出身の若干成人病が気になる体型の大男を思い出すと自然と誠は笑いが浮かんでしまった。だがヨハンが法術に関する専門家だと知ったのは『近藤事件』での胡州海軍の演習空域で誠が叛乱軍の近藤中佐貴下の部隊と衝突する直前の話だったことを思い出した。

「やつぱりどこまで研究が進んでるのか・・・気になるな」

「あら、カウラちゃんもそういうこと気になるわけ？意外と『研究が進んでるんだから良いじゃないか』とか言い出しそうなのに」

「そうでもないさ。私だって想像の範疇を超えた力が存在してその力がどのように使用されるか分からないと言うのは不気味に感じるものさ」

「ふーん」

カウラの言葉に納得してみせたアイシャの視線は自然と誠を向いた。

「僕だってこんな力は知ったのは例の事件の直前ですよ」

「私は知ってましたよ」

モニターに目を向けたまま手を上げるラーナ。その突然の行動に要が立ち上がる。

「どこでこいつが法術使いだって・・・」

「一応トップシークレットですから」

「けっ！つまらねえな」

ラーナの事務的な反応に舌打ちをした要を見て笑みを浮かべるアイシャだが、その目は笑っていないかった。

「ラーナちゃんを知っていたってことは・・・その筋の人の間では誠ちゃんて有名人だったの？」

「さあ・・・」

またとぼけるラーナ。相手を読めるアイシャは何を聞いても無駄だと思っただけのまま黙り込んで席に体を押し付けた。

「僕の力の話はここですることじゃ・・・」

誠の言葉に不思議そうな顔をする要がいた。めんどくさそうに一度視線を外した後ため息をつく。

「ここまでの話の流れと事件の容疑者の能力で分からないか」

カウラのその言葉。ようやく誠は結論に行き着いた。

「僕を外すと言うことですか」

ある程度は誠にも分かる話だった。相手は法術師の能力を奪って暴走させることで世間に何かを伝えたいと思っている愉快犯であることが想像できる。ならばその法術師の再発見のきっかけを作った誠の能力を暴走させることが犯人の最大の喜びにつながるだろうことも想像できた。

「でも・・・外したら隊長がこの面子で東都警察に私達を出向させた意味が分からなくなるじゃない」

「そうだけだな・・・」

アイシャのフォローにもただ要の表情は曇るだけだった。誠の能力は干渉空間展開と領域把握能力の二種が確認されていた。干渉空間を展開し、その中の存在を有る程度意のままに操れる。それは先日死者を出した事件を見ればかなり危険な能力だった。そして領域把握能力をハッキングして他の隊員の意味を読み取られてしまえ

は逮捕どころの話ではなくなる。

「法術師を使いこなせ・・・相手が誰でも・・・そう言いてえのは分かるんだけどさ」

再び要がこめかみの辺りの長い髪を掻きあげる。沈黙がその場を支配した。

「でも私も法術師ですけど？」

ラーナは相変わらずモニターから目を離さずにそうつぶやいた。思い出したような要の表情。そしてアイシャがうれしそうに頷く。

「要ちゃん。ラーナちゃんも捜査から外すつもり？」

「こいつは慣れてるから良いんだよ！」

「慣れてるって・・・この種の法術師が発見されたケースはほとんどありませんけど」

そんなラーナの言葉に要はさすがに頭に來たようで手を上げかけたものの静かに右の握りこぶしを静かに下ろした。

「ああ、ようやく我慢を覚えたか」

「うるせえよ」

カウラにチャカされて要は苦笑いを浮かべていた。

監視されている。水島はそう思うことが多くなった。

豊川市の中央図書館。ようやく住民登録も済ませて利用のパスを手に入れた彼だが明らかに視線のようなものを感じていた。

『誰も知らないはず・・・』

休憩室の周りの無神経な高校生達の間違った声に苦虫を噛み潰しながらそのまま奥の自習室へと向かう。

社会人失格の烙印を押された自分が彼等を注意することなどできない。そう思いつつ周りに法術師を探している自分がいた。

『あまり力は使うべきじゃないな』

先日力を乗っ取った相手の暴走と死を知って少しばかり臆病になっている自分を思い出して苦笑いが自然と湧き出てきた。

「おじさん」

突然背中から声をかけられる。そこには見慣れた少年の姿とはじめてみる女性の姿があった。

「君・・・」

自分の言葉が震えているのが分かる。二人ともアジア系。それだけはなんとなく分かった。女性の黒い長い髪とそれに似合う黒いオ

「バーコート。暖房の効いた室内だと言うのに汗一つかかず黙ったまま自分を見つめている。」

「紹介するよ。僕の姉役のキャシーだよ」

「初めまして……」

女性が思ったよりも若いことが声を聞いて分かった。仕方なく水島も軽く頭を下げた。

「キャシーも僕等と同類だから」

気軽にそういう少年だが、その顔を見た瞬間に頭の中に違和感を感じて水島はよろめいた。

「……彼女は……」

「しつこいなあ。おじさんと同類だよ」

少年の笑みが残酷に広がる。水島はきつめの視線が特徴のキャシーと呼ばれた少女に目をやった。

「悪戯をされると困りますから。私が忠告をしに来ました」

キャシーはまるで氷のように一瞬だけ笑みを浮かべると水島が取り落としたノートと筆入れを取り上げた。

「何を・・・と言っても無駄か」

『そうですわね』

突然頭の中に介入してきた思考に水島は驚いて手にしていた本を落とした。すぐ拾い上げながらもその目は口を閉じている少女に向かっていた。

『あなたにはもう選択の余地は無いんです。分かりますか？』

キャシーの目は冷たく水島を見つめていた。はじめてみる感情の死んだような女性の目にただ呆然と座り込む水島。誰もが奇異の目で見るが立ち上がる気力は沸いてこなかった。

『演操系の法術は使用するタイミングによっては前回の様な悲劇につながります。きちつとした訓練とそれを行なえる組織。それが今のあなたには必要なんです』

「米軍につけと言うのか？」

ようやく言葉を搾り出した水島を断罪するようにキャシーが頷く。だが水島は彼女が明らかに不自然な存在だと言うことに気づいていた。それは隣でガムを噛むクリタ少年にも言えた。

『実験動物にされる・・・ごめんだよそんなのは』

『何度も言っているではないですか。あなたには選択の余地は無い・

・まあ考える時間は必要かもしれませんが』

それだけ脳に直接語りかけたキャシーは足早に図書館の外へと続く廊下を歩いていく。そのぶっきらぼうな態度に辟易したような表情を浮かべた後、クリタ少年はにんまりと笑ってそのまま少女の後に続いた。

プレッシャーが解けたようによろよろと水島は立ち上がった。誰も彼等の間にやり取りがあつたと思えないと言う表情で人々は通り過ぎていく。

『米軍でモルモットになるか・・・遼州で犯罪者になるか・・・』

自分が後戻りできないところに来ていることによやく水島は気づいていた。そしてアメリカ力軍以外にも自分の存在が知られているのかもしれないと想像した。

『米軍が監視してくれているなら安心だな。とりあえず考える時間はくれたわけだ。その間にどう言う要求をしてくるのか確認するのも悪くない』

そう思いなおして水島はそのまま荷物が置いてある図書館の自習室に向けて歩き始めた。

待つ。これが苦手な人が多い。

誠は目の前の頭を掻き毟って暴れだしそんな女性を見ながらその事実を再確認していた。

「なんだよ」

「なんでもないですよ」

「その面がなんでもない面か？」

「止めなさいよ！要ちゃん！」

アイシャの声に立ち上がりかけた要が息を整えるように深呼吸をして誠の目の前の席に腰を下ろす。誠はそれを見てようやく安心して目の前の端末に記されているアストラルゲージのグラフに目を向けた。

「西園寺。気持ちわかる」

「わかって貰いたかねえよ！」

気を使ったカウラの言葉にも不機嫌に対応する要。誠も思わず苦笑いを浮かべるがすぐに察してにらみつけてくる要の視線を避けるように身を伏せる。

すでに警邏隊の巡回が始まって二日。いや、まだ二日と言つべき

だと誠は思っていた。直接の接触を避けながらのパトロールでのアストラルゲージチェック。そう簡単に犯人への道が開けるとは誠も思っていなかった。苛立ちの絶頂の中にいる要も理性ではそのことは分かっているだろう。しかし彼女は明らかにいらだっていた。

原因は昨日からこの捜査方法を提案したラーナが東都の同盟司法局に呼び出されていることだとは誠にも分かっていった。本来は彼女は同盟司法局法術犯罪特捜本部の捜査官であり、その部長嵯峨茜警視正の補佐が任務のはずであり、茜が追っている連続斬殺犯に関する情報があればいつでもそちらに出張することが誠達の豊川署への出向の条件でもあった。

「うわー疲れるな！」

「何もしていない人は黙っていてよ！」

「なんだ？アイシャ。アタシとやろうつてのか？」

「ホントに要ちゃんは脳筋ね・・・付き合ってらんないわ」

「なんだと！」

今度はアイシャに喧嘩を売る。さすがにモノクロの画面でグラフの針の動きばかりを追っていて疲れたのは要ばかりではなかった。アイシャもいつもなら聞き流す要の啖呵につき乗ってしまった自分を恥じるように静かに席に着いた。

「なんだか引つかかるんだよな・・・」

相変わらず要は冴えない表情で画面を見つめていた。豊川市の主要道路を走る警邏隊のパトカーの位置が彼女の画面の正面で展開している。何度とない要のため息に誠もカウラもうんざりしたような表情を浮かべていた。

「引つかかるも何も・・・これ以外に方法があるなら教えてくれ」

さすがに頭にきたカウラは手を後ろに纏めたエメラルドグリーン
の髪に持つていくとそうつぶやいた。呆然と顔を上げる要。その目
にはこういう時らしく生気が無かった。

「アタシ等の使っている計器。当然小売はしてないよな」

「私が答えるんですか」

めんどくさそうなラーナ。しばらく考えた後ようやく口を開いた。

「当たり前の話ですよ、それは」

ラーナの回答に画面から目を離さずに満足げに要は頷く。そして
そのまま誠の顔を一瞥すると再び画面をモニターに向けた。

「法術関連の学会とかでは話題になっているのかな、このアストラ
ルゲージとかは」

「当然じゃないですか・・・！」

要の質問に気づいたことがあるというようにラーナが顔を上げる。その様子でカウラとアイシャは大きく頷いて顔を見合わせた。

「法術関係の研究をしている国の機関ならどこでも同程度の製品は作れる。そして事件を取り上げた新聞に目を通す程度の余裕のある東都の大使館の武官を抱えている国なら・・・」

「私達より先にターゲットにたどり着いてもおかしくないわね」

カウラとアイシャ。二人の言葉に誠はようやく結論を知ることになった。

「それじゃあ・・・急がないと」

「だからこれが一番早い方法なの！焦っても仕方ないわよ」

「クラウゼ中佐・・・」

泣き顔で誠はアイシャに目をやるがアイシャはかまつつもりは無いというようにそのまま画面に目をやっていた。

「後は天運だけだ」

カウラもまた誠をフォローするつもりは無いと言うように画面を眺めながら冷えたコーヒーを啜っていた。

一人の黒いトレンチコートを着た男がベンチに腰掛けていた。

冬晴れの空。誰もが着ているコートやマフラーを押さえて北風に耐えている中、男は長細い筒を持ったままじっと目の前の鳩に菓子パンをちぎっては投げる動作を延々と続けていた。

「旦那！桐野の旦那！」

派手なラメ入りの赤いスタジウムジャンバーを着たリーゼントの男が彼に声をかけた。だが桐野と呼ばれた男は無視して鳩にえさを投げ続けた。

「いやあ、冷えますね」

無視されてもスタジャンの男は桐野に話を振ると手にしていた暖かい缶コーヒーを差し出した。

「冬は冷えるものだ。胡州が懐かしいと俺が言い出すと思ったのか？北川君」

缶コーヒーを手にすると桐野孫四郎はブルタブをゆっくりと引き上げる。カチンと響く音に驚いたように鳩が一度桐野の足元から去るが喰い残しのパンを見て再び彼の前にたむろする。

北川公平はしばらくその様子を確認した後、どんな言葉も桐野の関心を引けないと諦めて自分の分の温かい紅茶の瓶のふたを開ける。

「豊川市・・・あのラスコー陛下の地元ですよ。乗り込んだのは良
いが・・・」

「手ぶらで帰れば御前が悲しむな。一応知り合いに部屋を借りた」

「旦那が？知り合い？よくそいつで斬られなかったもんだ」

驚きの表情で北川が桐野の手の横に置かれた筒に目をやる。その
中身、備前忠正の存在を知っている北川は桐野のリアクションを諦
めて彼の前にたむろする鳩に視線を落とした。

「我々にとっては不愉快極まりない法術演操術者・・・大人気のよ
うですよ。アングラサイトにその情報を売り渡した南米の工作員崩
れの死体が港北に上がったそうです」

「遊びか・・・何かのメッセージがあるのか・・・ともかく会って
見るのも悪くない」

桐野の言葉に北川の笑顔が崩れる。そしてそのまま鳩に目をやる
と一羽の鳩が突然もだえ始めた。

鳩は声も立てず、何かに首の辺りを握り締められたようにもだえ
始めた。北川が驚いて桐野の表情を見るがそこにはもぬけの殻のよ
うにじっとその鳩を見つめている悪鬼のような男の姿があった。

「桐野の旦那・・・」

北川が口を開いた瞬間。目の前でもだえていた鳩の首がぽとりと
落ちた。

思わず北川は周りを見渡した。駅近くの公園だが寒さと平日の日中と言うことで誰も異変に気づいたものはいなかった。

「旦那！」

「なあに、ちよつとした悪戯さ」

そう言つと桐野は立ち上がる。北川は言いたいことは山ほどあったが口の中にそれを飲み込んで歩き出した。

「太子もご立腹ですよ。東都に来て何人斬つたと思つてるんですか？」

小声でつぶやいては周りを見回す北川。そのおびえた表情に余裕のある笑みを桐野は返す。

「俺は人が斬れるから太子に飼われてやっているんだ。斬れなくなればおさらばさ」

そう言つ桐野に北川は大きいため息をついた。そして周りを見渡すが豊川駅前南公園。ベットタウンの日中。しかも真冬と言うことで長い筒に黒いレンチコートと後ろに纏めた黒い長い髪と言う明らかに異質な桐野の姿ですら通りを急ぐ中年女性やランドセルを背負った小学生ですが気がついていないように見えた。

「それより・・・悪戯をしている馬鹿。見つけたとして・・・斬つてもいいのか？」

赤信号に立ち止まった桐野の言葉に北川は頭を抱えた。

「いいわけないじゃないですか！どうせ自分の力も知らない馬鹿が先日の政府の愚策である法術適性検査の無料化で受けてみたら適性があつて社会に牙でも向いているつもりなのが見え見えですよ。そんな奴……」

「別にどんな奴でも良いんだ。斬って良いのか？」

「駄目です」

北川の言葉に何度か頷いた後、桐野は信号が変わったのを確認して歩き出した。

「旦那。どこに行くつもりですか？」

「どこ？別にどこでもかまわんぞ」

「はあ……」

淡々と答える桐野の言葉に北川はため息をつくとそのまま桐野のポケットに突っ込んでいる左手を取った。

「とりあえず協力者の所に行きましょう。旦那はただでさえ目立つんだから……」

そのまま腕を引っ張る北川を死んだ表情で見つめながら桐野はそのまま繁華街のアーケードの方へと歩き出した。

「よー！仕事は順調か？」

定時丁度。どう見ても小学生のピンクのダウンジャケットを着た少女の声で誠は我に返った。

「姐御・・・隊は良いんですね」

要がやけに上機嫌で豊川警察署の古びた建物の奥の暗い部屋には似つかわしくない満面の笑みの上官クバルカ・ラン中佐に声をかける。

「おー。問題児がここに集まってくれたからな。静かなもんだよ・・・ラーナ。調子はどうだ」

そう言つとランは手にしていた袋から缶ビールを取り出した。そのまま画面から目を離さないラーナを見てにやりと笑ったランはビールのプルタブを引いた。

「いいのかよ、餓鬼が部下の出向している警察署で飲酒してるぞ」

「余計なお世話だ馬鹿野郎」

要にチャカされてもランは上機嫌にぐくりぐくりとビールを飲む。誠は彼女が戸籍上は39歳であることを以前書類で見せられたときの衝撃を思い出した。

「何か良いことでもあったんですか？」

さすがにこういうことには厳しいカウラがさらにバッグから二本目の缶ビールを取り出すランを見て苦笑いを浮かべながら声をかける。

「まあー吉田の野郎との賭けに勝ったからな」

「あの電卓と賭け？」

要が思わず黙ってモニターを覗いていたアイシャと目を合わせて戸惑う。戦闘用に調整された義体のサイボーグの要も戦闘用に遺伝子操作で生み出されたアイシャやカウラもすでに集中力の限界を迎えていた。誠が目を向けても三人とも憔悴しきっているのが分かる。それを見抜いたとでも言うような笑みを浮かべたランは二本目の缶ビールのプルタブを引いた。

「おう、今回の捜査でいつオメー等が正しい捜査手法にたどり着くかってな。茜の読みどおり。おかげで今日は運転手付きで飲みにいける」

「勝手に飲んでろ！餓鬼！」

そう叫ぶと要はそのまま自分の席に戻ろうとした。だがその手をランの小さな手が握り締める。

「おいおい、根詰めすぎだぜ。これから長いんだ。今日は終わりにして飲みにも行こうじゃねーか」

「それランちゃんのおごり？」

アイシャが飛び上がるようにして立ち上がる。それを見たランは満足げに頷いた。

「ならいいか！」

突然立ち上がる要の行動は誠達にすでに予想されていた。にんまりと笑いながら誠に絡みつく要。さすがにカウラやアイシャの目があるのが気になるが暴力サイボーグに逆らう度胸は誠には無かった。

「いいわけ有るか！いつ犯人が特定されるか分からないんだぞ！」

カウラの言葉にアイシャも頷きそのままビールを飲んでいる少女のように見えるランをにらみつける。

「オメー等……一応司法捜査官であることが保安隊の身分を保証してるんだぞ……法令をちゃんと読んどけ」

「クバルカ中佐のおっしゃるとおりですね。たとえ容疑者が特定されても裁判所の令状が出ない限り私達は指一本触れられませんから」

ランの言葉に頷きながら端末を終了するラーナ。そして彼女が顔を上げたときに彼女の同盟司法局法術特捜での上司に当たる嵯峨茜警視正が狭苦しい部屋に入ってきた。

いかにも珍しそうに古ぼけた机や痛んだ壁を眺める紫色の着物が似合いすぎる茜に誠達は見とれていた。

「皆さん……あまさき屋は抑えましたわよ。急ぎましょう」

「けっ！」

明らかに場違いな格好と上品な物腰は対極に立つ要の声と同調して全員をアフターファイブモードへと切り替えていた。

「じゃあ・・・ラーナちゃん。先に着替えてるわよ」

アイシャはそう言うのと恐る恐る端末を終了しているカウラを引っ張って廊下に向かう。要もニヤニヤ笑いながらその後が続いた。

「クバルカ中佐、神前曹長。ちょっとラーナと話がありますから」

遠慮がちにつぶやく茜の言葉に棒立ちの誠の腕を撮ってランが誠を廊下に連れ出した。

「あいつ等も色々あんだよ。とりあえず着替えて来いや」

そう言われた誠は不承不承定時ということで更衣室に向かう事務職員の流れに続いて建物の奥の男子更衣室に向かった。

明らかに異物のように思われている誠。それぞれににやけて雑談を続ける署員から離れて一人更衣室で着替えをしていればさすがにホームだった保安隊の隊舎が恋しくなってくる。

「それで・・・うちの家内がな・・・」

囑託職員のような白髪の男性署員が年下の巡査部長に身の上話をしていた。最年長が46歳の嵯峨と言う保安隊では味わえない空気を感しながらジャケットを羽織る誠。そんな中で突然派手に扉を叩く音が誠の耳に飛び込んできた。

『出て来いよ！神前！』

あまりの激しいノックに驚く署員。そしてその視線は必然的に誠へと注がれた。驚いた誠は慌てて着替えを済ませると走り出す。

「すみません・・・お騒がせしました・・・西園寺さん！」

「なんだよ遅いテメエが悪いんだろ？」

迫力のある面持ちで誠を見上げる要。その隣には髪を結びなおす途中で出てきたと思われるカウラとコートの襟を整えているアイシヤがいた。

「そんなに急いでどうするんですか！」

「いいんだよ。酒がのめるんだから」

「アタシはオメーのボトルまで頼まねーからな」

満面の笑みの要に突っ込みを入れるラン。周りの帰宅しようとしている女性署員の痛い視線が誠に向かってきていた。どれも殺気が感じられて誠はひたすら居づらい感覚に襲われる。

「でも・・・本当にいいんですか？」

「何がだよ」

相変わらずビールを飲んでいるラン。誰も小学校低学年にしか見えない彼女を注意しないのが不思議に見える光景に誠は少し違和感を感じていた。

「だって警邏隊の巡回は深夜もあるんじゃないですか？その深夜に反応が出たら・・・」

誠の言葉に小さなランはそのまま誠の腹の手前まで歩いてくると大きくため息をついた後まるで子供のように見上げる。

「令状がないとなんにもできねーのは説明したろ？それとだ。警邏隊はアストラルゲージについてちゃー説明なんて受けてねーんだ。吉田に確認させたがあの杉田とか言うここの署長の腰巾着だが・・・かなりの食わせもんだぜ」

「なんだ？アストラルゲージの説明なんてまるでしないで警邏隊の車に取り付けさせたのか？」

「西園寺。いい勘だ・・・って仕事の話は野暮だな。行くぞ！」

そのまま玄関ロビーに向かう小さな体。誰もが不思議そうにその後ろを誠達が歩くのを不思議に思っているようでいたい視線が突き刺さるのを感じる。そして玄関ロビーではさらに和服の茜と赤い糸でいくつも刺繍をされた黒いベストに白い袖の服と言う遼南高地部族の民族衣装のラーナが待ち構えていた。

「お疲れ様ですわね」

「まあな・・・」

茜の言葉に要が頷く。誠が周りを見渡すと着物と遼南民族衣装の組み合わせの人間がロビーに集まっている状況でかなり周りの注目を集めているのが分かった。

「それじゃー行くぞ」

先頭を歩くラン。渋々その後をカウラがついていく。

「ちっちゃい姐御がいると飲みに行く感じがしねえな」

「聞こえてるぞ！西園寺」

上機嫌でランが振り向く。さすがに三本の缶ビールは小さなランの体にアルコールを回すには十分すぎる量だった。すでに顔は真っ赤で上機嫌で自動ドアを抜けていく。

「ベルガー。ラーナをこっちで連れて行くから神前達を頼むわ」

ランはそう言うそのまま車止めに停めてある茜の高級乗用車に足早に向かう。仕方が無いと言う表情のカウラはそのまま裏手の駐車場に向かった。

「でも本当に良いのかねえ・・・外野の連中が動き出しているんだ

る？」

「西園寺さん。外野って・・・」

ぼんやりとつぶやく誠を要のタレ目が見上げてくる。

「誠ちゃん。同盟厚生局の時を忘れたの？地球やテロ組織。同盟非加盟国・・・いいえ同盟機構の内部組織の連中も今回の星を狙っているのよ」

「それは分かるんですが・・・」

赤いカウラのスポーツカーが夕闇に照らされているのを見ても誠も要もしつくり行かない感覚が続いていた。

「逆に考えるとこれだけ注目を集めればそれぞれの組織は動きづらidだろうな。法術関連の特殊部隊の派遣は一般部隊に比べれば相当なコストとリスクが要求される。情報収集も然りだ。手駒の少ない法術師をやりくりしての調査。しかも獲物を横取りされる確率が高いとなれば手を出せる勢力は相当限られてくる」

カウラはそう言うとそのまま自分の車のドアを開いた。いつものように助手席の扉を開いてシートを倒すと後部座席に乗り込む要。

「確実に食いつくのは『ギルド』と東モスレムの原理主義者連中・・・それにゲルパルトのネオナチくらいなものか？」

自分の隣に誠を引きずり込んだ要は苦笑いを浮かべながらつぶやいた。

「じゃあ良いから車を出せ」

「指図するんじゃない」

いつの間にか覚えたカウラの苦笑いが誠の目に飛び込んでくる。
ヘッドライトに照らされた駐車場。車は静かに走り始めた。

「要ちゃん・・・いつものは無しにしてね」

「なんだよいつものって・・・」

要に伝説の流し目を向けるアイシヤ。呆然と誠は二人を見つめていた。

「誠ちゃんのビールにウイスキーを突っ込んだりすることよ」

「ウイスキー？アタシはウイスキーは飲まないぞ」

「ジンでもウォッカでも同じよ！」

飲むと暴れる。誠の酒癖は有名だった。当然要は面白がつて遠慮しながら飲む誠のコップに細工をする。そして出来上がった誠は何度となく全裸で寝ているところを目撃されていた。

「僕もお願いしたいんですが・・・」

「何を？」

要は相変わらずとぼけていた。カウラは苦笑いを浮かべながら大通りへと車を進める。次第に冬の空は黒味を帯びて町を闇へと導いた。

「なんだか不気味な感じがしないか？」

「なんだよカウラ。ずいぶん感傷的な物言いじゃねえか。オメエも少しは進歩したんだな」

「酷いわよ、要ちゃん。私達だって心が有るんだから」

人造人間であることを指摘されるたびに嫌な顔をするアイシャが振り返る。要は隣で小さくなっている誠を突付きながら苦笑いを浮かべていた。

「でもこの街に例の星がいるんだ。しかも誰にも知られず次の悪戯を準備している・・・」

「悪戯？そんな簡単なものかよ・・・」

「簡単に感じる人種もいるんでしょ」

加速するスポーツカーの中でアイシャは珍しく真剣な表情を浮かべてそうつぶやいていた。

繁華街の警察署を出ればすぐ下町のごみごみした建物の中の道へと入ることになる。久しぶりの定時の退社。街は人であふれている。

「ぶつけないでくれよ」

「誰にものを言っているんだ？」

要の言葉に苦笑いのカウラ。目の前に飛び出してきた小学生に急ブレーキを踏む。

「言っただけだろ？」

「予測はしていた」

いつものようなやり取りに沈黙とグラフばかりに集中していた時間を終えたことを実感する誠。そして再び走り出した車は見慣れたあまさき屋に続く商店街のアーケードの道にたどり着いた。

「ちっちゃい姐御に茜とラーナ。後は誰が来るんだろうな・・・」

「要ちゃんはすっかり乗り気ね」

「当たり前だよ。おごりで飲めるんだ。たつぷり元をとらないとな」

にんまりと笑う隣の席の要に思わず誠は苦笑いを浮かべる。いつ

もどおり駅へ向かう道は渋滞していた。そしていつも通り近くの商業高校の学生達の自転車車が車を縫うようにして道を進んでいる。

「寒いのにご苦労さんだね」

「要ちゃん。私達も近々寒くてご苦労さんなことをするかもしれないんだけど」

助手席から身を乗り出して突っ込みを入れるアイシャ。カウラは苦笑いを浮かべて信号が変わって動き出した車の流れにあわせてアクセルを踏む。

「久々に島田とサラが来るんじゃないかな。それと・・・シヤムと吉田。連中は暇そうだからな」

「でもなんだかシヤムちゃんは白菜がどうか言ってたわよ」

シヤムは部隊の敷地の半分を占める荒地を開墾した。今では隣の菱川重工豊川工場の職員に野菜を販売するまでになっていた。

「サラが来るとなると・・・パーラが運転手役で出てくるな。それと・・・」

「カウラちゃんを見に菰田君達が来るかもよ」

「勘弁してくれ」

カウラのファンクラブ『ヒンヌー教』の教祖菰田のことを思い出すとカウラは渋い顔をしてハンドルを大きく切った。

「いきなり曲がる・・・？」

「どうしました、西園寺さん」

急にコインパーキングに向かって乗り入れた車の中で頭をぶつけてうめいた要の視線に何かが映っているようで誠は彼女の視線の先を見た。

「あそこ、あまさき屋ですよね」

誠が見た先には何かの後のような人ばかりができていた。それぞれ笑顔を浮かべながら立ち去る様子。それを察したアイシャは当然のようにカウラが車を停めたのを好機として扉を開く。

「突然降りるな」

「良いじゃないの・・・誠ちゃんも見たいでしょ？」

「見たいって・・・」

呆然としている誠を車から引つ張り出してそのまま歩き始めるアイシャ。驚いたように車を飛び出した要がその後続く。

「なんだよ・・・オメエは知ってんのか？」

要がそう言うのを聞きながら誠があまさき屋の店先を見るといつものように猫耳をつけてジャケットを着たシヤムと中学校の制服姿

で同じく猫耳を付けたあまさき屋の看板娘の小夏が子供達と握手をしていた。

「何やってんだ？オメエ等」

そう言うとそのまま小夏をにらみつける要。いつものようにそのガン付けににらみ返す小夏。

「知らないの？二人で漫才してるのよね」

「漫才？」

アイシャが当然のように言うので誠も少しばかり驚いた。要もまた珍しそうにシャム達の隣で困った表情を浮かべているラン、ラーナ、茜の三人に目をやった。

「副長・・・良いんですか？」

「おう、着いたか」

「着いたかじゃなくて・・・」

ランも少しばかり戸惑ったような表情で満面の笑みのシャム達を眺めていた。

「まあ・・・仕事が終われば別に良いんじゃないの。それほど任務に支障はなさそうだしな。ただ・・・」

「ネタが分かりませんわ・・・どこで笑ったら良いのか・・・」

ランと茜は首をひねりながらシャム達の後ろの引き戸を開いて店の中に消えていった。

「先にやってるわよ！」

真ん中のテーブルにはサラの赤い髪が揺れていた。すぐに隣にはうつむいてじつとたこ焼きをにらんでいる島田がいる。

「んだ・・・上は？」

「警備部の旦那が宴会だつて」

そのまま自分の脇をすり抜けて厨房に向かう小夏の言葉に頷きながら要は先頭で店に入った。

「あら、神前君達も来たの・・・上は使っているからこちらでいいかしら」

「かまいませんよ・・・それよりシャム。吉田はどこ行った」

猫耳を直していたシャムはランの言葉にしばらく沈黙する。

「俊平は・・・」

そう言いかけたとき奥の上の座敷へと続く階段を降りてくる吉田の姿が入り口で躊躇している誠の目にも入って来た。

「中佐！先に始めさせてもらっています！」

よく見れば吉田の手にはビールを入れたグラスが握られていた。

「上の連中はウォツカだろ？」

「いえいえ。最近はマリアの姐御がうるさくて……ビールでちびちび飲みながら上司の愚痴を……」

吉田はニヤニヤと笑うとそのまま入り口手前のテーブルに腰を下ろしてビールをあおった。

「なんだか嫌な飲み会ね」

「まあシュバーキナ中佐は厳しいですから」

サラのきつい言葉にフォローを入れながらずっとたこ焼きを口に入れるのを躊躇していた島田がたこ焼きを箸でつかむ。

「どれか一個が烏賊なのよ……当たるかしら」

にんまりと笑うパーラ。ようやく島田が何かをかけて烏賊とタコの区別をつける遊びをしていることがわかって納得する誠。

「つまらねえことやってるな」

「ガソリン一回満タンですよ……」

苦笑いを浮かべると島田は真ん中のたこ焼きを口に放り込んだ。

「これは・・・」

「島田君がんばってね!」

厨房からビールを運んできた小豆色の渋めの留袖姿の女将、家村春子の言葉に島田は首をひねった。

「わかるもんかよ・・・女将さん。とりあえずアタシ等もビール」

そう言うつと要は奥のテーブルに着席する。そしてそのまま隣の椅子を叩いた。察した誠はアイシヤ達に照れながら要の指示通りその隣の椅子に腰掛けた。

「女将さん、私とカウラは烏龍茶で」

「はいはい」

そう言うつと春子はビールを島田の隣に置いて厨房へと消えていった。

「分かるのか?」

要の正面の椅子に座りながら振り向いているカウラ。アイシヤは椅子にも座らずに島田を興味深そうに眺めていた。

「うーん・・・」

「正人……」

唸る島田。サラはいつものように島田の名前を呼ぶ。

「降参？降参？」

迫るパーラ。ただ島田は黙ってたこ焼きを噛み始めた。

「馬鹿な遊びをしてるじゃねーか。烏賊？タコ？どっちだっていじゃねーか」

入り口すぐのテーブルを占拠したラン。その正面には珍しそうに島田の悩む姿を眺めている茜とラーナの姿がある。

「お待たせしました！」

セーラー服にエプロン姿の小夏がビールを持ってランに迫る。その後ろには猫耳をつけたままのシャムがコップと付き出しを持って並んでいた。

「シャム！」

「駄目だよ俊平。飲酒運転になるよ」

「付き出しを取ってくれてこと。俺は烏龍茶で良いよ」

そう言つとカウンターに座っている吉田は目の前の箸入れから割り箸を取り出した。

「吉田！オメーは体内でアルコールを分解するプラントを抱えてるはずだろ？」

早速ビールを飲みながら赤い顔のランが絡む。それを一瞥するとカウンター越しに烏龍茶を差し出す板前の源さんからコップを受け取りながら吉田は何度か頷いた。

「軍用義体だから多少の毒くらいは人工肝臓ですぐに解毒はできるけどさあ・・・酔ってる感覚が良いんじゃないですか」

突き出しを口にしながら舐めるようにビールを飲む要の言葉に吉田は頷きつつ箸を進める。

「それじゃなくて！俊平はお偉いさんだからみんなのお手本にならなきゃいけないんだよ！だから運転する時はお酒は飲まないの！」

元気に叫びながらシャムが吉田の隣に当然のように腰をかけた。だがその言葉に思わず店の雰囲気は戸惑いに包まれていた。

「シャムちゃん。約束させたのね」

アイシャの問いにシャムは大きく頷いた。要はそれを見て一度誠の顔をまじまじと眺めた後少し斜に構えるようにして笑みを浮かべた。

「西園寺さん。何が言いたいんですか？」

「いや、なんでも・・・」

「要ちゃんはボトルよね。・・・ラム？ジン？」

「ラムで。それと！食うもん頼もうぜ。アタシは焼きそば！」

要の注文を聞いてそのまま厨房に春子は消えた。手伝いの小夏はエプロンからメモ帳を取り出して周りを見渡す。

「私は・・・たこ焼きにしようかしら・・・カウラちゃんは？」

「鉄板があるんだ。烏賊玉かな」

テーブルの中央の鉄板を覆っていた板を慣れた手つきで外すとカウラは今度は視線を背後のラン達に向けた。

「アタシは豚玉で・・・ラーナもか。茜、どうするよ」

「わたくしは・・・あまりたっぷり食べる気にはなりませんの。つまみ程度で見繕ってくださいな」

「じゃあアンコウ肝のいいのが入ったって源さんが言ってたからそれをメインで行きます？」

「お願いするわ」

ラン達幹部連の注文を受けるとメモを持って奥に小夏は消えた。

「まだ決まらないのか？」

「ちょっと食べたい気分なんで」

機嫌がよさそうなカウラに急かされながら誠はしばらくお品書きに目を向けて黙っていた。

足早に厨房から現れた春子は手にしたラム酒の瓶を要に差し出した。

「飲みすぎないでよ」

「気をつけまーす」

春子の言葉の意味など解さぬようにたっぷりとグラスにラム酒を注ぐ。呆れたようにカウラは要の手元のグラスに目をやった。

「飲みたいのか？」

「まさか・・・」

「はい！お待たせです！」

失笑するカウラを見ていた誠の耳元で手に盆を持った小夏が現れて注文の品をテーブルに並べていく。ついその動作に手元のメニューを取り落とす誠。

「神前の兄貴。しっかりしてくださいよ。それより注文は？」

「豚玉の三倍で」

「誠ちゃん！それアタシの真似じゃないの！小夏ちゃん、私も」

吉田の隣のカウンターでビールを手酌でやりながら叫ぶシャム。

小夏は笑顔を浮かべながら厨房に消えていく。

「上、妙に静かじゃねーか。島田の。法事でもやってんのか？」

ビールを飲んで顔を赤くしながらランがたこ焼きの中身当てに失敗してうつむいている島田に声をかけた。二階を占拠して飲み続けているという警備部の屈強な男達の沈黙。その事態に隣のサラモパ
ーラもランの質問に首をひねる。

「女将さん。アイツ等・・・」

「昼間からだったから・・・潰れてるんじゃないかしら」

阿鼻叫喚の地獄絵図にならずに済んでよかったというような表情で笑う春子。彼女を見ながら誠もビールを飲み続ける。

「しかし・・・アイツ等もマリアの姐さんのお手伝い係だからな・・・
大変なんだろ」

相変わらずカウンターを背にテーブル席の誠達を眺めていた吉田はそう言々と烏龍茶を飲み干した。

「まあうちも大変だけど」

『何か言った？』

要の言葉にランと茜が同時にステレオで叫んでいた。思わずその様子に誠は苦笑いを浮かべた。

「それにしても大変そうだな」

烏賊が入っているたこ焼きを当てられずに島田は懷からガソリンスタンドのカードを取り出してパーラに手渡しながらつぶやいた。

「何？正人君も入りたかったの？」

「そんなことは無いですけど・・・法術を乗っ取る犯人でしょ？俺みたいに死なないだけが取り得の法術師の方が適しているんじゃないかなあと思っただけですよ」

そう言いながら最後のたこ焼きを口に入れる。

「オメーはバックアップだよ。同盟司法局の事件じゃあオメーにぜひ参加してもらえって隊長に言われてたからな。まああれだ、今回はじっくり明華の仕事のやり方を見ておけってことだ」

ランはすでに手酌でビールを飲み始めていた。

「そうだぞ、島田。シャムのクロームナイトや隊長のカネミツの整備の手順とかは明華さんのお手の物だけど代わりがないからな」

「代わり？」

突き出しの小さい烏賊を箸でつかみながらの吉田の言葉に島田はしばらく考えながらつぶやいた。

「正人！明華お姉さんは6月に結婚でしょ？」

「でも・・・寿退職とかする人には見えないんですけど・・・」

隣のサラの言葉に首をひねる島田に思わずサラとパーラがため息をついた。

「結婚すれば・・・子供ができてもおかしくないな・・・まあしなくてもできる時はできるか」

「要ちゃん！」

「事実だろ？」

要とアイシャの掛け合いを見てようやく分かったと島田は膝を打つ。

「でも・・・あんな機体。本当に使っんですか？」

そう言う島田の視線は保安隊ナンバー2であるランへと向けられることになった。

「島田・・・出勤関係の事例集。見てねーのか？」

「そりゃあ甲一種出勤は使用兵器の制限が無くなりますが・・・反則ですよ、あの三機は」

島田の言葉に自然と誠は頷いていた。誠の愛機のアニメヒロインが大量に描かれた05式乙型も法術対応のアサルト・モジュールだがクロームナイトクラスとは桁が違った。法術師の展開する干涉空間にエネルギー炉を転移してメイン出力を確保。ほとんど現在の技術の最先端クラスでとても一般部隊では運用不可能な高品位パルスエンジンを搭載した機体には正直勝負を挑むのが馬鹿らしくなるほどだった。

「反則だろうが失格だろうが関係ねーんだよ。アタシ等は司法実働部隊だ。兵隊さんと違って勝たなきゃならねーし、勝つときは圧倒的じゃなきゃならねーんだ。わかるか？」

どう見ても小学生が飲んだくれているとしか思えない光景。言っていることの理屈が通っているだけに誠は一人萌えていた。だがその萌えを我慢できない存在がこの店にはいた。

「ランちゃん！」

立ち上がるとアイシャはそのままずかずかとランに近づいていく。

「お・・・おうなんだ・・・！くつつくな！」

不意を付いてアイシャはランに抱きついて頬擦りを始める。

「なんてかわいいの！萌えなの！」

「うるせえ！離れろ！」

「慕われていますのね、クバルカ中佐は・・・ちょっと妬けますわね」

「茜！くだらねーこと言つてねーで助けるよ！」

ばたばたと暴れているランを横目に見ながら笑顔の春子が料理を並べ始めた。

「いつも申し訳ありません」

「カウラさんが気にすることじゃないわ。それに本当にいつもごひいきにしてもらっちゃって。うちは保安隊さんがいなくなったらつぶれちゃうかも」

そう言いながら頭を撫でる程度に譲歩したアイシャの愛情表現に落ち着いてきたランの目の前にアンキモを置く春子。

「でもクバルカ中佐は本当にかわいいですものね。クラウゼさんもうい暴走しちゃうわよ」

「アタシは一応上官なんだけどな・・・」

アイシャに撫でられながら仕方が無いというようにランはビールを飲み干した。

「じゃーん！来ましたよ」

小夏が突然のように現れて手にした料理を配っていく。春子はそれを見ながら誠達のテーブルの鉄板に火を入れた。

「やっぱり火がいいねえ。電気式のはどうも好きになれなくて」

「そう言えば要ちゃんは胡州よね。あそこは結構厳しいんでしょう？二酸化炭素を出すエネルギーがらみには」

アイシヤはようやくランをその手から開放すると満面の笑みで誠の豚玉を勝手に混ぜ始めた要の正面の席に腰掛けた。

「まあな。あそこはどうも息苦しいところだからな。特に東和に来たら帰りたくなるよ・・・小夏、もう良いのか？」

「まだ。そんなすぐにあつたまるわけ無いじゃないの」

鉄板の上に手をかざして軽蔑の眼差しで要を見つめる小夏。頭にきた様に視線をボールに落とすと要は一生懸命豚玉をかき混ぜ始めた。

「そんなに混ぜたら駄目じゃないの」

「いいんだよ。納豆だって混ぜた方が美味いだろ？」

「私はそうは思わないが・・・」

「カウラ・・・ノリが悪いな」

たこ焼きを食べ始めたカウラにそう言つと要は豚玉を混ぜる手を止めてグラスのラム酒に手を伸ばした。

「どうしたの？要ちゃん」

アイシャの顔が真剣なものへと変わる。それは要の脳内の通信デバイスが何かをつかんでいることを悟つての態度だとわかつて誠も要に視線を向けた。

「例の辻斬りだ。東寺町で近くのOLが背中からばっさりだそうだ」

その言葉に入り口近くのランの隣に座っていた茜が立ち上がる。

「おい、所轄の連中が捜査をはじめたばかりだぜ」

「そう言うわけには行きませんわ。一応わたくしが担当している事件ですから・・・クバルカ中佐、カルビナ。帰りはタクシーを拾ってもらえませんかしら」

「しゃーねーだろ。仕事優先だ」

ランの言葉に笑みを浮かべた茜は着物の襟元を調えるとそのまま店を出て行った。

「辻斬り・・・アイツも今回の星を追って出てきたか・・・」

ようやく温まった鉄板に誠の三倍豚玉を広げながら苦々しげに要
はつぶやいた。

「法術師を狙って来たんですね。ただ都心じゃ捕まるかも知れないから郊外に来たんじゃないですか？」

誠の言葉に要は思い切り酒を噴出した。

「何するのよ！」

顔面に直撃を受けたアイシャは叫ぶと同時にハンカチを探してコートに手を伸ばす。驚いた春子も厨房に飛び込んだ。

「クラウゼさん、これ」

春子から手ぬぐいを受け取ると顔を拭くアイシャ。その様子をまるで無視しているかのように一人烏賊玉を焼くカウラ。誠はいつものことながら食事中に異常な集中力をみせるカウラに呆れながら隣の要に目をやった。

「都心より郊外の方が良いだって？そんな訳ねえよ。薄暗がりの街の中。作戦行動を取るには都市部の方がやりやすいんだ」

「さすがに非正規戦闘のベテランは言うことが違うな」

烏賊玉をひっくり返して一息ついたカウラの一言。要は得意げに再びグラスを手取る。

「じゃあ、やっぱり今回の法術師ですか？」

誠の言葉にそれまで騒いでいたシャムや島田まで黙り込んで静寂が支配した。

「普通に考えりゃーそうなるな。飼い主は分からねーが法術師が星なのは確実な辻斬り野郎。そいつの飼い主が相当な馬鹿野郎ならいざ知らず、いままで狂犬を官憲から匿い続けているところから見ても今回の法術師に関心を持ってねー方がおかしいくらいだ」

ランの言葉に頷くラーナ。ただ不安そうに周りを見るパーラに少しばかり同情しながら誠はそれまで要が焼いていた自分の豚玉にソースをかける。

「最悪のパターンも想定しておくべきね。人斬りと変わった法術師の両方に同時に出会うケース。想定していないと最悪の事態になるわね」

「アイシャさん。最悪の事態って・・・」

誠は豚玉を切り分けながら目の前で箸でたこ焼きを半分に割っている濃紺の長い髪を持ち主に語りかけた。

「馬鹿だな。オメエの能力が奪われた状態で人斬りにマンツーマンで対応しなきゃならなくなることもあるってことだ」

ラムを飲む要の満足げな顔。思わずカウラは目をそむける。

「本当にこういうときは悪い顔をするわね、要ちゃんは」

「そうか？」

アイシャの言葉を受け流しながら要は誠の豚玉の半分を奪い取る
と自分の小皿に乗っけて食べはじめた。

「それ僕の・・・」

「小さいことは気にするなよ。それよりカウラよう。得物は特別なのが使えるのか？」

豚玉を頬張りながら要がたずねてくるのを見て少し馬鹿り気分を害したと言つようにカウラはたこ焼きに伸ばした箸を置いた。

「特別な許可は降りていない。使用可能なのは拳銃と低殺傷火器だけだ」

「マジかよ・・・アタシ等を殺す気か？」

そう言うつと要は静かにラム酒を喉の奥に流し込んだ。

「低殺傷火器？」

「あれよ、先日練習したじゃないの。あの毒々しい青色のショットガン」

「東都警察のは蛍光オレンジのはずだが」

「カウラちゃん・・・別に色なんてどうでも良いじゃないの。結局弾丸はナイロンバックにゴムを詰めた暴徒鎮圧用の銃器だけ。相手が日本刀振り回していてもそんなものよ」

アイシャとカウラの会話で誠は今回の事件がかなり危険なものだ

と言うことだけは理解できた。

「同盟外務省から何とか言ってくれねえかな。『うちはローリーサルウエポンしか使用しませんから手加減してください』ってさあ」

ラム酒の便を手に自分のグラスに酒を注ぐ要。沈鬱とした空気が場に流れる。

「おいおい、オメー等がそんな弱気でどうすんだよ」

「姐御・・・弱気にもなりますよ。相手はこれまで8人は斬ってる狂犬ですよ。それと何だかよく分からない能力の持ち主が敵に回る・・・」

「同時に相手をしなきゃいいだろ？それにいざとなれば拳銃で仕留めるくらいのことはいつも言ってるじゃねーか」

「姐御・・・」

いつの間にか誠達のテーブルの隣に立って弱音を吐く要からラム酒のビンを取り上げたランはそのまま半分以上酒が残っている要に瓶を差し出した。

「注ぐならこいつにしてくださいよ」

要は隣でビールをちびちび飲んでようやく空にした誠に目を向けた。

「え？あ？うーん」

「そうだな」

にんまりと笑ったランはどくと誠のグラスにラム酒を注いだ。

「クバルカ中佐！」

「良いんだよ。アタシの酒だ。飲めるだろ？」

凄みの聞いた少女の表情。誠はいつの間にか頭の中に異常な物質でも発生しているのではないかと言うような気分になってグラスを手にした。

「ぐつとやれ、ぐつと」

ランの言葉が耳元で響く。アイシャもカウラも決して助け舟を出す様子は無い。

諦めた誠は一気にグラスの中の液体を空にした。そしてそのまま目の前が暗転するのを静かに理解することしかできなかった。

気が付いた誠を襲ったのはまず頭痛だった。次に全身に涼しげな感覚があるのが感じられた。

飛び起きるとそこは寮の誠の部屋だった。布団は乗せられているが全裸。隣を見るとごちゃごちゃと丸められた昨日着ていた服が転がっている。

「またか・・・」

かすかに残る記憶の断片で自分が酔っ払って全裸になったことが思い出されてきてそのまますばやく筆筒からパンツを取り出してはいた。

そのまま寒い部屋の中で周りを見る。いくつかのお気に入りのフィギュアの並びが変わっているのが分かる。

「アイシャさん・・・気が付いたら止めてくれれば良いのに・・・」

「何か言った？」

「うわ！」

突然背中からアイシャに抱きつかれて飛び跳ねる誠。その衝撃でお気に入りの魔法少女のフィギュアが傾いた。

「危ないじゃないですか！」

「今飛び跳ねたのは誠ちゃんじゃない」

じりじり迫ってくるアイシャの背中の後ろにはニヤニヤ笑う要と呆れたような表情のカウラがドアのところに立っていた。

「早く服を着ろよ」

「顔が青いぞ。シャワーでも浴びて気合を入れなおせ」

薄情な言葉にそのまま転がっていた昨日着ていたズボンに手を伸ばす。

「昨日はすいませんでした」

「いつものことだよ、アタシは慣れた」

「慣れた？本当に慣れた？」

これまで誠の目の前で肩を突付いたりしていたアイシャが今度は顔を赤らめている要の頬をつついた。当然切れた要はそのままアイシャの頭を抱え込むと強化された人工筋肉のおかげでレスラー並みのパワーを誇る腕でぎりぎり頭を締め付けた。

「痛い！痛いわよ！」

「痛くしてるんだ。当然だろ？」

そんな二人のじゃれあい呆れたようにカウラは頭に指を当てた。

「昨日の飲み会はリフレッシュの為のものだ。それを・・・」

カウラはそう言いながら誠の足元の布団に手を伸ばす。そのしぐさに思わず引き込まれそうになる誠だが、要とアイシャの視線を感じてカウラの前に立ちふさがった。

「布団ぐらい片付けますよ」

「その前に服を着ろ。今日からいつ何が起きてもかまわない覚悟をしてもらわないとな」

上官にこう言われたらどうしようもない誠だった。そのままセーターを頭から被る。そしてそのままじっと誠を見ている要とアイシャに目をやった。

「そんなに見ないでくださいよ」

「昨日はあんなに『俺を見る！』って叫んでたのに？」

「そんなこと言ってたんですか？」

顔を赤くする誠にアイシャと要が顔を見合わせて爆笑し始める。

「馬鹿は相手にするな。もうすぐ時間だぞ」

布団をたたみ終えてカウラが立ち上がる。仕方がなく誠もそのままカウラについて廊下へと出た。

早朝の寮はいつものように戦場だった。警備部の面々が二日酔いか何かのように頭を抱えながら短髪の金色の髪を掻き揚げながら誠達を避けて追い抜いていく。

「警備部の連中。昨日は飲まされてたからなあ」

「そんなことがあったんですか？」

「飲ませたのはオマエだろ？」

要にそう言われても誠の記憶はまるで消えていた。仕方なく階段を下りながら昨日の全裸になった自分の事を思い出してみるがまるで浮かんでこない。

「じゃあちよつとアタシはタバコを吸ってくるから」

「そのまま永遠に吸ってて良いわよ」

「うるせえ！」

にやけながら紺色の長い髪を掻きあげるアイシャに悪態をつくとそのまま要は中二階のラウンジにある喫煙所に消えた。

「今日は・・・ヨハン君が食事当番ね」

「アイツがここにいる意味があるのか？味見とか言って大量に食べているらしいじゃないか。士官のアイツがここにいる理由はダイエツトの為だろ？」

カウラはそつつぶやきながら朝らしく忙しそうに動き回る隊員が
集まる食堂へと入っていった。

「いらっしやい！」

「島田、元気だな」

要が呆れるのは無理も無いような気がした。誠がノックアウトされればあのメンバーの矛先は当然のように島田に向く。だが生体機能の異常な活性化と言う技のある島田なら致死量のアルコールを口から流し込まれても平気なように誠には思えた。

「さつさと食べて出勤だ」

「そうしましょ」

カウラとアイシャは島田を無視して厨房前のカウンターに並べられた料理のトレイを手に行っていた。仕方がなく誠もその後が続く。

「島田・・・どうすればオマエを殺せるんだ？」

「あれじゃないですか？銀の弾丸で額を撃ち抜くとか心臓に十字架を突き立てるとか・・・」

「西園寺遊んでないで早く食事をしろ！」

スープを注ぎ終えたカウラの言葉に舌を出しながら厨房に向かうおかつぱ頭。

「それにしても豊川署の警邏の面々。ちゃんと仕事はしているのか

しら？」

すでにすべての料理をトレーに載せて堂々といつもの指定席に座ったアイシャはすばやくウィンナーをかじりながらそうつぶやいた。

「彼等も仕事と割り切ってくれているだろうな。確かに杉田と言うあの副署長。当てにはならないが他に手段は無いからな」

「そんな弱気で・・・」

誠は椅子に座りながらぱくぱく食事を食べているアイシャを眺める。見られていることが分かるとにつこり笑ってすぐに今度は付け合せの茹でたキャベツを食べ始めた。

「東都警察は腐っている連中が過半数以下と言う貴重な組織だからな。それなりの結果は期待して良いんじゃないかねえの？」

遅れて席に着いた要が同じようにキャベツをかじり始める。

「なに？要ちゃんは芯が好きなの？」

「食物繊維だよ」

「サイボーグが健康志向か？」

「絡むじゃねえか。隊長殿」

いつものように要達の話が展開しているのを見て誠は安心してスーぷをすすった。

「二日目・・・意外とこういうときに見つかるんだよな」

要はスープを飲み干すとトーストに食いついた。

「そうか？まだ全地域をパトロールできたわけでは無いんだろ？それに反応が丁度よく現れるとなると確率論敵にはかなり低い話になるぞ」

「そうよね。まあ節分前までには決着が付くといいわね」

カウラとアイシヤ。それぞれにトーストとソーセージをかじりながらそれとなく誠の方に目をやりながら食事を続けていた。

「捜査なんて・・・よく分からないですけど・・・西園寺さん。そんなものなんですか？」

スープの味付けが少し濃すぎたのを気にするようにつま先を出しながらつぶやく誠に要は手を広げて見せた。

「すぐにターゲットが見つかるなら本当にすぐに見つかるもんだ。見つからない時は・・・」

「それはあるかもしれないわね。アニメキッズの景品も欲しいと思っ
ているときはスクラッチの点数が低くてもらえなくて、これは興
味が無いから当たったらシャムちゃんにあげようとか思っている
ときは結構いい点数が出て好感するかどうか迷うことが多いもの」

「その例え・・・適切なのか？」

アイシャの独特の話題についていけないカウラが突っ込みを入れる。周りでは時間に厳しい技術部部長の許明華の部下達がすばやく食事を済ませてトレーを返しに行っている。

「じゃあ、がんばってくださいね」

「オマエこそ潰されるなよ！」

島田が苦笑いを浮かべながら立ち去る背中に要が声をかける。

「それにしても・・・他人任せつてのは・・・」

「それなら要ちゃんが計測器を持って走り回れば良いじゃないの」

「アイシャ・・・テメエ一回殺してやろうか？」

苛立つ要。誠も二人の気持ちを察しながら静かにパンをかじった。もうすっかり二人の喧嘩に慣れたカウラはため息をつきながらデザートの温州みかんの皮を丁寧に剥いていた。

「皆さんも十分注意してくださいね」

ラーナの言葉を待たずに誠達はそれぞれの端末にかじりついて警邏隊が車に積んでいるアストラルゲージの検索結果に目を通していった。

「言われるまでもねえよ」

そう言うつと要は首のジャックに端末のコードを接続している。

「退屈よね・・・」

「言うことはそれだけか」

不機嫌そうに流し目を向けてくるアイシャにめんどくさいと言う表情を浮かべるカウラ。誠は苦笑いを浮かべながら目の前のモニターに目を向けていた。

平坦なグラフが見える。時々跳ね上がる数値に驚いて以前の事件の際のデータを引っ張り出すが、すぐにゲージは穏やかに下がってしまう。

「意外と法術師って多いのね。東和は法術適正検査を義務化したほうが良いんじゃないの？」

アイシャの言葉にカウラがため息をつく。誠もただ引きつった笑みを浮かべるだけだった。

「法術検査を受けるかどうかは東和では個人の意思ですから。同盟も内政干渉はできないですよ」

「めんどくさいわね」

ラーナの弱った顔に満足したように頷いたアイシャはそのまま画面へと視線を戻した。

「見つかるものなら早く見つかるといいな」

「西園寺も良いことを言うもんだな」

要もカウラも昨日一日同じことをしていたのを思い出したかのようにつんざりした表情を浮かべていた。

「無駄口を叩くんじゃないわよ」

「一番叩きそうな奴に言われたくねえよ」

アイシャもすでに飽きている。人造人間とサイボーグ。どちらも忍耐力は通常の人間よりも有るはずなのに明らかにその限界は近くまで来ていることを知って誠はただ苦笑いを浮かべるだけだった。

「神前、飽きねえか？」

「仕事ですから」

「ふーん」

まじめにモニターを見つめている誠の言葉にとげのある表情を浮かべながら再び要の視線はモニターに向かった。

「また反応だ・・・」

「ちゃんとチェックしろよ」

「隊長命令か・・・ちよつと待て！」

要が突然立ち上がった。その叫びに全員が立ち上がり彼女のモニターに目をやる。時々数値が跳ね上がる。特徴的なアストラルパターン。

「ほら見ろ、すぐに出やがった」

得意げな要だがカウラがまじまじと画面を見た後ですぐに横からキーボードを叩いて事件現場で計測されたアストラルゲージパターンと照合する。

「似てはいるが・・・」

「だろ？」

「馬鹿ねえ、要ちゃんは。似てるから即犯人とは限らないでしょ？」

アイシャの言葉に頬を膨らませながら一人自分の端末のキーボードを叩いているラーナに目をやった。

「東寺町・・・3丁目。古いアパートが多い場所ですね」

淡々とつぶやくラーナの言葉が終わる前に要はそのまま腰の拳銃を確認するとそのまま部屋の奥にかけられたコートに向かっていく。

「西園寺！」

「なんだよ！犯人がどうか片っ端から訪問して怪しい奴を引っ張れば済むことだろ？」

「そんな胡州じゃないんだから」

アイシャの言葉に含まれた『胡州』と言う言葉が要の暴走を止めてくれた。コートに伸ばしていた手を引っ込めると要はそのままラーナのところへと歩み寄った。

「政治犯が山ほどいる胡州なら予防検束でどうにかなりませんが……アストラルパターンデータは証拠としての力がありませんからとりあえず事前に参考人を絞り込んでからじゃないと……」

手を止めずにラーナはつぶやいた。誠も彼女が何をしているのか気になってそのまま立ち上がり要の横に立った。

「ここで例の不動産関係の資料を生かすわけね」

納得がいったように頷くアイシャ。ようやく自分の行動を理解してくれる人物が現れたことに安心したようにラーナは頷いた。

「まず・・・吉田さんからもらったキーワードで・・・」

「なんだ？あの機械人形はラーナにはそれを教えてたのか？」

不機嫌そうな要の肩を静かに叩くアイシャ。その様子を見て切れそうになる自分を治めるためのように要はゆっくりと深呼吸をした。

「出ました。・・・水島勉」

画面に一人の人物の戸籍謄本が映し出される。

「前科無しか・・・別件で引っ張るわけには行かないか？」

「西園寺。貴様は逮捕することしか考えていないんだな」

カウラの諦めたように一言に要は舌打ちで答える。

「法術犯罪は現行犯が基本よ。とりあえず周辺を探ることから始めないと」

そう言うときアイシャはすぐに先ほど要がコートを取りに戻った場所へと向かう。

「制服着てか？それこそ現行犯は無理になるだろうが」

「要ちゃん・・・すぐに身边に張り付くつもりなの？ラーナちゃん！水島とかいう人の以前の住所は分かるかしら？」

「ええ、……城東区砂町……」

「なるほど、まずは都心の事件の裏づけを取るのか」

納得したように要もコートに手を伸ばす。ラーナは二人とは別に再びキーボードをたたき始めた。

「それでは水島の動向については警邏隊に把握してもらう必要があるな。ラーナ、頼む」

カウラもそう言うと言子にかけていたジャンバーを引っ掛ける。誠も遅れまいと同じくジャンバーを着た。

「寺町交番には資料を回しておきます。それとデータ再確認の為に私はここに残りますね」

そう言つと再び端末に集中するラーナ。

「じゃあ行くか」

要の一言で頷いた誠達はそのまま倉庫のような部屋を後にした。

「こりゃあ・・・租界と大差無いな」

巨大なトレーラーをやり過ごしてそのまま埋立地の道に車を走らせながらカウラはつぶやいていた。冬の城東区。埋立地に向かうトレーラーには基礎工事に使うのだろう巨大な鉄骨がむき出しのまま積み重ねられているのが見えた。走る車は業務用の車両ばかり。去年から本格的に始まった城東沖の埋め立て工事がいかに大規模なものかと言つことを誠達に知らせるには十分すぎる車両の列が続いていた。

「アパートなんかあるのかよ」

「地下鉄の駅が近いからその周辺にはあるんじゃないの？」

要の言葉に助手席のアイシャが紺色の長い髪の毛を気にしながらぶつきらばうに答える。誠も臨海部と言うと危険地帯の租界近辺ばかりを思い出していたが、目の前の次第に海へと拡張していく街の端っこと言う光景を見ると別世界のように思えた。

「人が住むには向かないところは租界と一緒に・・・だけどあつちの方が人が住んでるだけましかな」

つぶやいた要に誠も自然に頷いていた。大型車の絶え間ない通行に瀕死の道路のアスファルトの割れ目から地下水が絶え間なく湧き出す様が目に飛び込んでくる。

「これは・・・帰ったら洗車しないとな」

カウラはそうつぶやくとようやくビルの基礎工事をしているらしい一角にトレーラーが入っていくのを避けながら車を加速させた。

「でもまあ・・・数年立つたらここら辺のビルもマンションだからオフィスだかができるんでしょ？ そうなればにぎやかになるかもしれないじゃない」

「アイシャ・・・おめでてえな。一発不況が来ればゴーストタウンの出来上がりだ。どうなるかわかったもんじゃねえよ」

「ずいぶん慎重なのね、要ちゃん・・・何か悪いものでも食べたの？」

「今朝はオメエと同じものを食った・・・そうか、オメエも悪いものを食ったから変なのか」

いつものように一触即発の二人を見ていた誠。まっすぐ続く道の片隅によやくコンビニエンスストアと完成しているビルらしきものを見つけてほっとして運転中のカウラに目をやった。

「あそこのコンビニの近くだな」

カウラはそう言うのと走る車の無くなった道で車を加速させる。小さな点のように見えたコンビニエンスストアの建物が三階建ての比較的新しいビルでその二階より上がアパートになっていることに誠も気づいた。

「コンビニの近くって言うか・・・コンビニの上じゃん。水島とかいう奴はコンビニの店長だったのか？」

要の言葉に誠は曖昧な笑顔を浮かべて再び目の前のコンビニに目をやった。

意外にもコンビニには客が多く見られた。

「結構にぎわってるな・・・まあこれだけ工事現場だらけで他に競争相手も無いんだ。独占企業の利益とかいう奴かね」

助手席から降りると周りを見て回っているアイシャが降りるのにあわせて体を乗り出した要の言葉。誠は苦笑いでそれにこたえた。

「あそこ・・・駅？なんでまたこんなところに」

アイシャが遠くの建物を指差す。そこにはいくつもの地下鉄の出口が見てとれた。周りは造成中で枯れた草だけが北風になびいている。

「まともな神経の持ち主なら逃げ出したくなるのも当然だな」

そう言つとカウラはコートから携帯端末を取り出した。

「水島勉・・・32歳。大手印刷会社の営業部に所属していたが四ヶ月前に退職。自主退職となっているが・・・これは事実上のリストラだな。一部の同期の面々が個人加盟組合をバックにつけて退職の取り消しを求めて裁判で係争中だ」

「こんなところで無職・・・一日じつとしてるわけ？おかしくなっちゃうわよ」

「なんだよアイシャ。テメエなら一日中アニメが見れるって喜ぶん

「じゃねえのか？」

要の突っ込みに手を叩いて笑みを浮かべるアイシャ。

ただでさえ女性が珍しい埋め立て地のコンビニにエメラルドグリーンや濃紺の色の髪の長身の女性が周りを見渡していると言う状況には昼時の近くの工事現場に出入りしているらしい作業員達の注目を集めるには時間がかからなかった。

「おい、見物に來たわけじゃねえんだぞ。とつとと奴さんのお部屋とやらを拝みに行こうぜ」

要は手に管理事務所から借りた鍵を持って颯爽と歩き始める。店の前でタバコを吸っていた客の視線は要について動いているのが誠にも分かり次第に自分の頬が朱に染まっっていくのを感じていた。

「誠ちゃん・・・どうしたの？」

明らかに自分が注目を集めていることを知りながら振り返るアイシャ。ただ何もできずに誠はそのままアパートの階段を登る要達の後が続くだけだった。

生活感が感じられない。階段を登りながら誠が感じたのはその事実だった。

「やっぱり誰もいないアパートはさびしいもんだな」

あちこち眺めながら要がつぶやく。彼女が寮に来る以前のマンションには他の同居人はいなかったが警備員が駐在していたので何とか人の住むところらしさを感じたが、このアパートにはそんな雰囲気すらなかった。

「こんなところにもチラシを・・・」

二階に上がった四人の目の前には五つのドアの郵便受けから飛び出す雨に濡れてぐったりしたようなチラシがあるだけで他の気配は何一つ感じなかった。

「203号室ね」

アイシャはそう言うのと鍵を奪って真ん中のドアにたどり着いて電子キーをセットする。鈍いモーター音とともに扉の鍵が解除される。

「何が出てくるんだ？」

ニヤニヤ笑う要。誠にはただ異様な雰囲気ばかりが感じられて、思わず逃げ出したくなる自分を押さえ込んでいた。

「行くぞ」

開いたドアに入っていくアイシャに刺激されたようにカウラが誠の肩を叩いて部屋に入るように促す。仕方なく誠も冬だと言うのに妙に暖かい空気が流れてくる部屋に入っていた。

「普通だな・・・」

靴を脱いですでに部屋の真ん中に立っている要の言葉に誠も頷くしかなかった。染み一つ無い壁。天井も高く白い壁紙に覆われている。

「ちよつとこれを」

カウラはそう言うと言つと携帯端末並みの小さな機械を取り出した。残留アステロイドデータ測定器。ラーナに与えられた機械を部屋の中に設置するとその小さな画面に起動状態を示すマークが映りだした。

「これも証拠能力は無いんだろ？」

「しょうがないじゃない。今のところは水島とか言う人がこれまでの違法法術発動事件に関与している可能性があるくらいのことしか分からないんだもの。これで反応が一致すれば東都警察も彼の犯行当時の動向を捜査してくれるでしょうし、上手くいけば任意で引つ張れるかもしれないわよ」

「なんだよ、アイシャ。オマエもアイツを引つ張りたいんじゃないか」

アイシャの言葉にニヤニヤ笑う要。カウラは一人機械が求めるコ

マンドを入力していた。

「それにしても・・・もしかしてこの一室だけですか？入居していた人がいるのは」

誠の言葉に要は呆れたように頷いた。

「結構いい物件じゃないの。駅は見えるし・・・確かに殺風景で今の季節は冷えそうだけど」

思わず窓ガラスに手を伸ばすアイシャ。そこからみえるのは基礎工事の為に杭を打つ機械の群れだった。

「まあ・・・この光景がいつまでも続くわけじゃないだろうからな。造成が終わればそれなりの街になるって言うのに」

「そうも行かなかったんだろ。突然リストラされて・・・何かを変えたかったんだろうな」

カウラは静かにそう言うのと水島勉の経歴書を携帯端末に表示させた。

「一応名門の私大の経済学部を優秀な成績で卒業。その後会社では営業マンとして務めているが・・・成績は芳しくないな」

「それで結局解雇か。よくある話過ぎて気になるよ逆に」

そう言いながら要は新品の白い壁紙を撫でていた。ひとたび沈黙が部屋を支配する。

「解雇後は独学で司法試験受験で知られる豊川の明法大学の法科大学院試験に合格・・・」

「まじめそんな奴だね・・・不器用なのは分かるけどさ」

要はそう言うとそのまま部屋の中央のアストラルゲージの計測器に歩み寄った。

「これで・・・結果が出るだろうな」

中央の小さな機械を手にとったカウラ。そしてそのまま画面を操作する。何も無い空間にいつものようにアストラルパターンデータが表示された。

「これをカルビナに転送して・・・」

「お仕事終了ね」

そう言うときアイシャは大きく伸びをした。要は飽きたというようにそのまま玄関に向かう。

そんな二人を見ながら誠はなんとなく外の杭打ち機を眺めていた。

「何か見えるのか？」

カウラに声をかけられて誠はわれに返った。そして外の建築用機材の群れを見ながらしばらく眺めていた。

「こんな街・・・」

「街とは言えねえだろ。ただの工事現場だ」

外を眺める誠にそう言いながら一緒に外を見る要。二人とも明らかにこの部屋が異常な場所であると言っていることを確認していた。

「夜はこの下のコンビニの店員と工事現場を警備する警備員だけ・・・さびしいところね」

アイシャはそう言いながらコートの襟を直す。その動作にカウラも苦笑いを浮かべながらアストラルゲージの終了を始めていた。

「この部屋で暮らすのを選んだ・・・先を見るにしてもほどがあるよな。確かに空気が読めなくて会社を解雇になるには十分な神経の持ち主だな」

そう言うとそのまま要は玄関に向かった。

「何年か経てば人気スポットになりそうだけど・・・どうなるか分からない時代だから」

呆然と目の前の道路を通過していくトレーラを眺めている誠の肩に手を乗せるアイシャ。カウラはそれを見ても気にしないというように終了したアストラルゲージをコートのポケットに収めた。

「水島とかいう人物は人間が嫌いなのかな」

「好きだったらこんなところで暮らせるわけ無いわよね。でも・・・そんな人物が他人の能力を乗っ取って犯罪に走る。なんだか不思議な話よね」

「不思議？むしろ当然じゃねえのか？誰でも彼でもあると言うことだけで憎むことができる人間はいるものだぜ。まあめったに目にかかれねえが今回の水島何がしかいう奴もそう言う人種だったと言うことだよ」

カウラ達の雑談に一区切りつけるとそのまま要は外へと出て行った。外の冬の冷たい外気がこもった部屋の中に舞い込んできて誠達を包む。妙に生暖かい空気から開放されて誠は一息つくと玄関に向かった。

「本当に人の気配がしないわね」

「西園寺の言うとおりなんだろうな。たまにはアイツもいいことを言うものだ」

そう言いながらブーツを履くカウラ。誠は靴を履く二人から再び視線を窓の外へと移した。

「どんな人物なんでしょうね」

「すぐに会えるわよ。まあ私は会いたくないけど」

アイシャはそう言いながらパンプスを履くと大きく伸びをして廊下へと消えていった。

水島勉は第六感というものを信じないリアリストだと自分を思っていた。

図書館にも例のアメリカ大使館とつながりがあると言う少年は現れなかった。そしてその帰り道、自転車で走っていても特に彼に注目する人などいないことは分かっていた。

だが明らかに何かに監視されているような感覚はあった。

『まさか・・・法術絡みの件となれば・・・警察には捜査権限は無いはず。たとえ立件できても起訴まで行くかどうか・・・』

商店街の上のアーケードが冬の北風を受けてばたんばたと唸りを上げる。だが気にすることなく水島はペダルをこぎ続けた。

周りには法術師の気配は無かった。

『力がある人間がいなければ俺も無力なんだな』

自分の能力を思い出し、少しばかり自虐的な笑みを浮かべた。

その時だった。

一瞬だが明らかに以前の法術暴走で死んだ被害者と同じ力のある法術師の存在を感じた。背筋に寒いものが走りペダルを踏んでいた足がずれて思わず転倒しそうになるがなんとか自転車の体勢を立て直した。

「・・・大丈夫ですか？」

目の前の『あまさき屋』と言うお好み焼き屋の暖簾を出していた女子中学生に声をかけられる。

「は・・・大丈夫・・・大丈夫ですよ」

何とか言い訳をするがそこで力の源となる法術師の気配が残像であることを理解した。

『この店・・・例の空間干渉能力者が通い詰めているのか？』

黙ったまま店を見上げた。実に普通の三階建ての建物があるだけ。少女は呆然と水島が自分の店を眺めているのを見つめるだけだった。

「本当に大丈夫・・・」

「大丈夫ですよ」

少女が手を伸ばすのを振り切ると水島は再びペダルをこぎ始めた。

『確かにいるんだな・・・あの空間を切り裂く感覚と・・・死に行く恐怖の感覚・・・』

沈黙を続けながら水島はペダルをこぐ足に力を入れた。

一月も半ばとなれば正月の雰囲気も抜けるものだった。誠はじつと端末を覗き見ながら隣で野球のボールをいじっている要に目をやった。

「そう言えば走ってませんね」

誠の一言に要はにんまりと笑いそのまま視線を正面のカウラに向けた。

「私は走っているぞ。夜なら時間は作れるだろ？」

「カウラちゃん・・・危ないわよ。夜中に一人で走るなんて・・・そうだ！誠ちゃんも一緒に走らない？」

アイシャの言葉に呆れたカウラはそのままモニターに目を移して作業を始めた。

「馬鹿なことを言いてえところだが・・・最近は大斬りがここらでも出てるからな。得物でも持つか？」

「だから、ここは胡州じゃないの」

指で銃の形を作ってみせる要にたしなめるような調子の愛車の言葉が飛んだ。

「動けないのはつらいのは分かりますが・・・」

ラーナが困ったように机にかじりついている四人を見ながら苦笑する。違法法術発動の容疑者、水島勉の身辺捜査の権限は東和警察が握っていた。放火や傷害などの嫌疑のある事件の発生時刻の水島のアリバイの有無の操作は極秘裏に東都の捜査官達が探っていた。

「しかし・・・奴等は嫌疑が裏付けられたらアタシ等に内緒で逮捕しちゃうんじゃないのか？」

ボールをもてあそぶのにも飽きた要の一言に思わず誠も頷いていた。

「先々月の同盟厚生局の事件では見せ場を私達が持っていたからな。今度は手柄を・・・などと言うのもありえる話だな」

いつもなら苦笑いで済ませる要の言葉に同調しながら微笑むカウラ。アイシャは何度か頷きながら時折ラーナに視線を送っていた。

「どうでしょうか・・・私としてはたぶんそれは無いと思いますよ。虎の子の法術部隊は相手が人の法術を勝手に発動すると言う事件の特性からあまり動かしたくは無いですし、どこまでその能力を水島とか言う被疑者が見につけているかも分からない状況ですから厄介なところは全部うちに回ってくると思いますよ」

そう言うところラーナは真ん中分けのおかつぱ頭の髪を手櫛ですきながらモニターに目を戻す。誠はなんとなく釈然としない気持ちを抱えながらモニターの中の再びこれまでの犯行の手口を載せているファイルのデータを読み直していた。

「厄介ごと・・・うちは便利屋かよ」

「今頃気づいたの？遅かったわね」

売り言葉に買い言葉。いつものようににらみ合う要とアイシャ。

「くだらないことは止めておけ。どうせ東都警察には手に余るのは間違いないんだ」

それだけ言うとカウラは再び端末へと視線を向ける。

「カルビナさん。どこくらいまで捜査が進んでいるとかわかりませんか？」

誠の言葉にラーナはため息をついた。

「神前さん。一応東都の各警察署にもプライドがありますよ。自分の管轄した場所で起きた事件。その容疑者を特定するならできれば自分の手で捕まえたくなる」

「縦割りの弊害だな・・・まあアタシ等のことは『同盟司法局なんて無駄な組織を作りやがって』って思われているかも知れねえがな」

思い切り要らしい言葉に誠は頷くと目の前の画面に目を向けた。もし水島勉の事件への関与をうかがわせる証拠が示されれば自分達には優先的捜査権限が与えられる取り決めにはなってはいた。そし

てその情報が現れるのは誠達の机の上の端末のモニターのはずだった。

「このまま一週間ぐらい待っても不思議は無いぞ。楽にしてろよ」

要の言葉。ある意味当然だとは分かっているけど慣れない誠には待ち続けること自体が苦痛だった。気の短い要が黙っているのは彼女がかつて『東都戦争』と呼ばれる東都を舞台とした騒乱事件に関わっていてその時に見につけた技術なのかもしれないと勝手に想像をめぐらせる。

「でも・・・こんなところでくすぶっているのに意味はあるのかしら？どうせ定時になったらこの部屋から追い出されるんでしょ？しかも連絡が携帯端末に届けばいつでも出勤できる状態にしているって言われてるんだから・・・無意味よね」

立ち上がるアイシャ。誠も左手の携帯端末に目をやる。小さな端末だが、その中の情報は常に東都警察の最新情報が流れ込んできている。

「私達はアウエーなんだ。我慢しかできないだろ」

まじめにモニターを覗くカウラ。げんなりしながら誠は再び画面へと目を向けた。

石灯籠が並ぶ庭。それを見ながら一人の着流し姿の男が剣の手入れをしていた。冬の風が縁側に座る彼の周りを流れていく。それでも綿入れも着ずに男は剣を眺めて満足げに頷いていた。

「旦那・・・寒くないですか？」

男に後ろから話しかけた北川公平はダウンジャケットに首の周りには襟巻きを巻いて寒そうに手を合わせてさすっていた。

「気合の問題だな・・・」

答えていると言うよりも自分に言い聞かせている。そんな様子でようやく着流し姿の男、桐野孫四郎は剣を鞘に収めた。

「それより・・・見つかったのか？」

それまで自分に关心が無いと思っていた桐野の言葉に驚いたと言うように北川は引き戸を開くとそのまま桐野の隣に腰掛けた。

「豊川警察署に勤務中の同志からの情報ですが・・・」

そう言うのと北川は左腕の携帯端末を立ち上げる。そしてすぐに一人の男の顔写真を表示させた。

「水島勉・・・聞いたことが無いな」

「旦那。それは冗談で言っているんですね」

思わず北川が笑いかけるのを見て不愉快だと言つように目をそらす桐野。そしてその視線は鞘に納まった剣に向けられた。

「俺等には天敵になるかも知れませんよ。すぐに斬りかかるのだけは勘弁して・・・」

「保障はできないな。相手がこちらの能力を奪つて来るならこちらもそれなりに覚悟はするつもりだ」

桐野はそう言つと再び剣を抜いた。突然の動きに驚く北川をあざ笑いながら桐野はすばやく剣を鞘に戻す。

「できれば生きたまま捕まえたいですから。斬るのは最後の手段にしてくださいよ」

そう言つと北川は立ち上がる。

『この人殺しは・・・そのうち俺のケツにも火がつくかも知れねえな』

心の中でそう思った北川はそのまま暖房の効いた部屋へと戻つていった。

「別に理想があるわけじゃないんだよ俺は。人が斬りたいんだ・・・」

「独り言のようにつぶやいた桐野はそのままうつとりとした目で自分の業物をまじまじと眺めていた。」

「まだかよ」

定時まで30分。要は大きく伸びをしながら画面から目を放そうとしない一応小隊の隊長であるカウラにそう言った。

「まだ30分前だ」

「それじゃねえよ。ちゃんと水島を引つ張れる証拠は見つかったの
かって言うことだよ」

要の言葉に誠もアイシヤもラーナも大きくため息をついた。

「要ちゃん。そう簡単に証拠が挙がるなら誰も苦労はしないわよ」

「そりゃあそうだけどさあ」

今度は要は腰を左右に振っていた。

「サイボーグが準備運動か？」

「うるせえなあ」

カウラの言葉にいつものように口を尖らせると立ちがかる。

「タバコ吸ってくるわ」

「はいはい！行ってらっしゃい！」

投げやりなアイシャの言葉にそのまま席を立とうとした要。その時突然ラーナが立ち上がった。

「取れました！取れましたよ！」

「なんだ？何が取れたんだ？」

モニターを指差す彼女の表情を見た要の表情がシリアスなものに変わると部屋の空気が一変した。

「元旦の東宮神社の放火！目撃証言が取れたんですよ」

ラーナの叫び声にそれまで無言だったカウラまで立ち上がる。

「引っ張れるんだな？これで引っ張れるんだな？」

「待ちなさいよ要ちゃん。東都地検は？地裁の令状は？」

落ち着こうとしているはずのアイシャの声も上ずっていた。彼女の鋭い目つきに刺激されるようにラーナのキーボードを叩く速度が加速する。

「地裁には嵯峨警視正の顔が利きますから・・・なんとかうちにも令状が・・・」

「頼むぞ茜、希望の星だよ」

満面の笑みで叫ぶ要にさすがに不謹慎だと言うようにカウラが白い目を向けているのがおかしくて誠はつい噴出していた。

「まだ・・・決心は付かないのかな？」

新しいちゃぶ台に頬杖を付く少年を見ながら水島はなんとも居心地の悪い自分の部屋でお茶を入れていた。

「そちらのお嬢さんは・・・」

「ご馳走になりますね」

相変わらず長い黒髪を揺らしながら隣のクリタ少年の保護者と言うような表情で座っている少女。二人の能力をサーチして逃げ出すことはできるかもしれないが、恐らくサーチを始めた段階で気づかれて二人を敵に回すことになるのは分かりきっていた。

「もうそろそろ僕のタレこんだ情報を東都警察もつかむころだよ。それでも・・・」

少年の言葉に思わず湯飲みに注いでいたお茶がこぼれた。水島はそのまま怒りの視線を少年に向ける。

「お・・・大人をからかうもんじゃないよ・・・」

「ああ、それなら後三時間くらいこの部屋で過ごすと良いよ。それだけ待てば東都警察も重い腰を上げるだろうからね。それとも動くのは保安隊かな？どちらでもいい話なんだけどね、僕にとっては」

少しこぼれた茶色い湯飲みをハンカチでぬぐいながら手に取るク

リタ少年。彼は自分のことをアメリカ大使館と関係していると常に言う。だがその言葉にはどことなく信用できない雰囲気がまわり付いていた。隣の少女もクリタ少年以上の法術師の気配は持っているが、無口で何かを聞き出せそうな様子はまるえ無かった。

「東都警察・・・違法法術行使は懲役2年だね・・・これまでの起訴事件は三件。判決が出た一件は法術に対する使用者の軽い思い違いがあったということで執行猶予の判決だったはず・・・」

「ずいぶん希望的な観測ですね」

珍しく少女が口を開く。水島は仕方がないというように水色の湯飲みを彼女の前に置いた。

しばらくじつと湯飲みの中を見つめた後、少女は静かに茶を口に含む。

「死者が出ているからかね」

「ご存知なら話は早いと思うのですが・・・」

そう言つと少女は珍しくちゃぶ台の中央に置かれたみかんに手を伸ばした。

「実験材料や戦争の小道具に使われるなら牢屋の中のほうがすごいやすいと思うんだけどな」

「それも甘いですね。あなたの犯罪については同盟司法局が動いています。同盟司法局は名前の通り遼州同盟の司法執行機関です」

「だから何が言いたい・・・」

思わず身を乗り出そうとした水島だが体が言うことを聞かなくなっていることに気づいて恐怖の表情を浮かべて目の前の二人を見つめた。

「言いたいことがあるのはおじさんじゃないの？」

クリタ少年はそう言つと再び無邪気な笑みを浮かべた。

「自分の能力を把握している勢力はどれだけあるか、東京都警察はどう動くか、司法局は？少なくとも図書館の判例集には載っていないお話じゃん」

確かにその通りだと水島は思っていた。自分の経験など法術と言う奇妙な存在がこの国で知られるようになってからはまるで役に立たない。

会社を解雇され、住む場所を失つて居場所を探すのにも苦労して、そしてこうして目的を見つけたとしてもそこには悪意に満ちた会いたくも無い化け物達が待ち構えている。

「僕は・・・どうしたら良いんだね？」

ようやく搾り出した言葉にクリタ少年はうれしそうな表情を作った。

「ようやく分かってくれたんだね。じゃあ・・・少し待っててくれるかな」

そう言つとクリタ少年は湯飲みを置いて立ち上がった。黒髪の少女もまた仕方がないというような表情を浮かべて立ち上がる。そしてクリタ少年は背後に干渉空間を展開した。

「とりあえず僕のボスに話をつけてくるから。安心して待っていてくれても良いよ。それと東和警察や保安隊が来たら抵抗しないでそのまま捕縛されても・・・」

「逮捕されると？本当に大丈夫なんだね？」

弱みを握られたような表情で水島は干渉空間に消えようとするクリタに声をかける。

「なに、外交官特権でどうにでもできるから。安心してくさい飯を数日食べていれば自由の身さ」

「自由・・・ふざけたことを」

つい本音を水島がこぼしたのを見ると黒髪の少女が初めて見るような素敵な笑みを浮かべた。

「じゃあね」

クリタ少年の言葉とともに干渉空間は消滅して何も無い部屋に戻る。

「食べる為なら何でもするさ。この国が僕を必要としていないなら僕を必要とする悪魔にでも魂を売ってやるよ」

つぶやいた水島。そしてそのまま自分の注いだままで冷めている茶をゆつくりと飲み干して立ち上がると手にしてい行政訴訟の判例集のノートを思い切りよく引き裂いた。

しばらくアパートを見上げた。

桐野孫四郎は周りに人の気配が無いのを察すると紙の筒のふたを開けた。そこには彼の愛刀『関の孫六』が入っていた。朱塗りの鞘を静かに払うとそのまま階段を登る。

法術の気配は無かった。他にも人の気配自体が無い。先ほどまでの桐野の脳髓を刺激するほどの力の存在はすでに消えうせていた。

「時間だな」

そう言うつと桐野は一番手前のアパートの扉に体当たりをした。

「うわ！」

飛び込んだ部屋の中に一人のうだつの上がらない中年男が腰を抜かして倒れている。

「失礼するよ」

そう言うつと桐野はそのまま土足でアパートの一室に上がりこんだ。男はただ震えながら桐野を見上げている。その手にしている引き裂かれたノートが何かをその貧弱な男が決意したことを示しているように桐野には見えた。

「水島・・・勉強んだね」

自分の間合いに入ったところで静かに桐野は男に尋ねた。そのいかにも平和に慣れ親しんできたと言う水島の表情に怒りのあまり斬殺したくなるのをようやくとどめていた。

「そう・・・ですけど・・・あなたは？」

突然の闖入者だと言うのに追い出そうなどとは思えずに震えている水島。哀れでもあり同情もするが桐野にはそれを言葉にするつもりは無かった。

「なんだ・・・旦那。先にはじめちゃったんですか？」

入り口の壊れたドアを呆れたように見つめている男がさらに現れた。その革ジャンと洗いざらしのジーンズには水島もこの絶望的な状況を救ってくれる人物に見えたと言うように恐怖で出せない声を振り絞ろうとする。

「さっきまでいたのは・・・どこですかね？ゲルパルトのネオナチの旦那達・・・東モスレムの原理主義者連中・・・それとも？」

革ジャンの男の口ものが不気味に笑みに飲み込まれる。その様を見て水島はその革ジャンの男の方が信用に足らないと言う事実に気が付いて絶望して振るえることしかできなかった。

『おじさん・・・ピンチなの』

頭の中でクリタ少年の声が響いた。

「なんでだ！話が違うぞ！」

「話が違う？なに俺は話してないですけど・・・」

革ジャンの男の言葉に水島は我に返った。

「北川。たぶんこいつはどっかの勢力に買われたんだろ。そいつからの思念通話だ」

落ち着いて分析してみせる刀を手にした桐野の死んだような表情に水島は死を直感した。ゆっくりと刀が振り上げられる。

「飼い主が決まるまで静かにしていれば良かったのにねえ」

北川と呼ばれた革ジャンの男の笑み。自分が斬り殺されるのを覚悟しながら恐怖に震えるしかない自分に呆れながら水島は考えていた。

『助けてくれ！』

次の瞬間、振り下ろされた桐野の刀は何も無い畳に突き立てられた。

「逃げられましたね」

北川はそう言うと水島が消えた畳を丁寧にさする。

「いい飼い主が見つかったようだね。なかなか面白い展開だ」

畳に刺さった剣を抜くと静かに鞘に収める桐野。その不満そうな表情を見ると北川はいかにも滑稽なものを見たというように爆笑を始めた。

「何がおかしい」

「旦那・・・せつかくの得物に逃げられて無様に刀を納めるなんて・・・」

「そういうオマエは逃げられてそのまま帰るつもりか？」

不愉快そうにつぶやく桐野に笑みを浮かべると北川は長身の桐野の耳元に背伸びをしてつぶやく。

「なあに、俺のテリトリーの中を飛んだだけですよ。場所は割れます。行きましょう」

そう言うとそのままだ部屋を出て行く北川。彼の背中を見ながら桐野は剣を手に古いアパートの壁をさすりながら用がなくなった部屋を後にした。

「おい、西園寺・・・何かあったのか？」

カウラは自分の車に乗り込んだばかりの要に声をかけた。右足を車の後部座席に突っ込んだまま右手を耳に当ててじっと動かない要それは彼女の脳の中に埋め込まれた通信端末にアクセスしている時の彼女らしい態度だった。

「どこかの馬鹿野郎がカチコミをかけやがった。巡回していた警官二名が重傷だ。なんでもダンビラ片手に大暴れしてそのあと忽然と干渉空間に消えたそうだ」

「先を越されたわけね・・・どうするの？」

車に乗り込むのを止めた要の隣で興味深そうにカウラを見つめるアイシャ。誠はただ黙って指揮官の表情のカウラを眺めていた。

「西園寺。他に死者や怪我人は出ているのか？」

「怪我したのは警官だけ。斬り付けられた時に悲鳴を上げてそれに驚いて飛び出した近くの住人がいるそうだが・・・犯人を目撃したのは一人もないそうだ」

「カウラちゃん。怪我をしたおまわりさんの回復まで待つ？」

ドアに両手をついて薄笑いを浮かべながら尋ねるアイシャ。誠はそんな彼女を一瞥した後あごに右手の親指を当てて考え込んでいるカウラに視線を移す。

「干渉空間を展開できるだけの法術師がターゲットが留守だと言うのに襲撃を行なうわけが無い。となると・・・」

「恐らく斬殺魔以外にも水島さんとやらに接触している勢力があるわけね・・・厄介なことになりそうじゃないの」

そう言うときアイシャはそのままカウラの赤いスポーツカーの後ろに回りこんだ。カウラはそれを見てトランクの鍵を開ける。開いたトランクに上半身を突っ込んだアイシャはそのまま鮮やかな青色に染められたショットガンを取り出した。

「要ちゃん。ラーナちゃんに連絡つく？」

「アイツのセンサー・・・頼りになるかねえ」

「他に手段が無い」

そう言うときアイシャから銃を受け取ってそのまま薬室に初弾を装填するカウラ。

「誠ちゃんも」

アイシャから低殺傷弾薬の入ったショットガンを受け取った誠もまねをして初弾を装填する。要も同じく銃を手にしてにんまりと笑いながら再び後部座席に乗り込んだ。

「どこまで干渉空間を使つての転移ができるかはわからないが・・・突然の襲撃を受けてとなればそう遠くには飛べないはずだ。上手くいけば警邏隊のアストラルゲージに動きが見れるはずだ」

「あくまで推測だと言っわけね」

そう言つとアイシャは自分の銃を手にして初弾を装填した。

「人事を尽くしたんだから後は天命を待ちましよう」

アイシャの言葉に誠達は大きく頷いた。

まず水島は近くにあった扉に飛び込んだ。

薄暗がりの中、先ほど振り下ろされた日本刀がどこにも見えないことに気がついてため息をついた。

『おどろいちゃって・・・』

「どこにいる！お前が呼んだのか！あの人殺しを・・・」

少年の声が頭の中に響くのに叫びで答える。しかしどこにも人の気配はしない。そして水島はとりあえず自分のいるのが女子トイレであることに気づいて驚いてそのあまみ扉を開けた。

人の気配は無かった。むしろあちこちの壁の傷み具合、割れた窓ガラス、折れた水道管。自分のいる場所が廃墟であることに水島は気づいた。

『おじさん・・・人聞きの悪いことは言わないでよ。僕だってあんな化け物が来るとは思ってたんだから・・・』

人の頭の中ににやけた笑いを浮かべたクリタ少年が映る。忌々しげに近くにあった鉄パイプを手にとって女子トイレを出る水島。

「化け物？じゃあ知っているんだな、あの日本刀の男のこと」

『一応ね。でも僕にも守秘義務があつてさ・・・生きてそこを出られたら教えてあげるよ』

「無責任なことを言うな」

怒りに駆られた水島は思わず目の前の壁を鉄パイプで叩いた。火花が散るがただそれだけ。ぶつかった部分の塗料が剥げ、コンクリートの地肌が顔をだす。

『そんなに暴れていいの？さっきの化け物。恐らく僕がおじさんを飛ばした場所を見つけているころだよ・・・逃げるなら今のうち・・・』

少年の言葉が終わらないうちに水島は走り出した。目の前に階段がある。とりあえずそこを駆け下りる。廊下や壁を見てようやく自分がいる廃墟が病院のあとであることに気づく。

『おじさんストップ！』

頭の中でまたクリタ少年の声が響く。驚いて壁に張り付き息を整える。

『来たよ。ぴったりさっきおじさんがいた場所だ。逃げた分だけ遠くなったよね』

「責任を取れよ・・・貴様らに協力するんだから・・・ちゃんと助けるよ・・・」

『できるだけのこととはするつもりだよ』

焼け石に水と言うような調子の言葉を最後に頭の中から少年の気配が消えた。水島はその時になって初めて自分が孤独であることに

気づいた。

東豊川を流れるゆたか川の下流へ向かう堤防沿いの道をヘッドライトをともしたスポーツカーが走っていた。

「ラーナ。間違いはねえんだな？」

『はい、反応は新東豊川病院で途切れています。再びの法術発動の気配はありませんから・・・』

ショットガンを肩に担ぐようにして狭いカウラの車の後部座席にふんぞり返る要。誠は身を小さくしてショットガンに何度となく頭をぶつけながら黙って座っていた。

「要ちゃん。もう少し詰めてあげてよ。誠ちゃんが苦しそうじゃない」

「は？いいんだよ。これで少しは体がやわらかくなるだろ？こいつの投球フォームにはもう少し柔軟性が必要なんだ。このくらいのことには耐えてもらわねえとな」

屁理屈をこねる要。誠は苦笑いを浮かべながら要の言葉に頷いていた。たしかに最近の実業団のチーム同士の練習試合では腕の振りが鈍っているのは自分でもよく分かっていた。

「それより・・・間に合うのか？」

「間に合わせてみせるさ」

要の疑いを愚問だと言うように何も無い堤防沿いの道に車を走らせるカウラ。フロントガラスには近辺の地図とラーナから送られてきている法術反応のデータが表示されていた。

「廃病院で鬼ごっこ。こりゃあ楽しくなりそうだ」

「不謹慎ね、要ちゃんは」

「そう言うオメエも顔がにやけてるぜ。戦闘用の人造人間の闘争本能でも出てきたのか？」

「まあ否定はしないわよ。でもまあ……辻斬りの犯人に茜ちゃんより先にお目にかかれるとは……」

振り向いたアイシャの目がぎらぎらと光るのが誠の目からも見て取れた。

「あー。嵯峨警視正は？」

誠の言葉ににんまりと笑う要がいた。その姿に誠の背筋が凍りつく。

「ラーナの奴が連絡済だ。今のところアイツが動いた気配が無いところから見てアタシ等が本当に例の辻斬りかどうか確認するまで動けない状況なんだろ」

「まーそれは残念。みんな纏めて捕まえちゃいましょうよ」

「クラウゼ。気軽に言うものだな」

アイシャを口ではたしなめているカウラ。だがそのバックミラーに映る彼女の顔は楽しいことが待っているとでも言うように微笑みに満ちていた。誠はそんな雰囲気飲まれないうちと唇を噛み締め銃を握り締めた。

川べりに立つ巨大な廃墟に誠は度肝を抜かれた。

「こんなところがあるんですね・・・って！」

「「こちゃこちゃ言うんじゃねえよ！とつとと下りろ」

要に蹴飛ばされて何とかカウラのスポーツカーの狭い後部座席から転がるようにして廃病院の中庭に出た。

「なんでも・・・菱川重工の併設病院ができたおかげで経営が行き詰まっってこうなったらしいわね・・・って走るわよ」

いつものようにどこから仕入れたか怪しい言葉を吐きながらアイシャが銃を持って走り出すのに誠達も続く。割れた正面玄関の扉はガラスもほとんどが砕け、それを固定していた針金も朽ち果てていた。

「本当にお化けが出てきそうよね・・・要ちゃん、平気？」

「何でアタシに振るんだ？」

「こういうとき要ちゃんみたいなキャラがお化けが苦手でお荷物になると面白いかなーとか思っただけけど」

「アニメの中じゃねえんだよ。アタシはお化けよりよっぽど生きている人間の方が恐ええよ」

そう言うつと要が先頭を切つて割れたガラスに気をつけながら病院の中に入った。

「こりゃあ・・・見事な廃墟だ」

要の言葉も当然だった。壁は落書きに覆われ、あちこちに雑誌や空き缶が転がっている。足元を見れば焚き火をした後らしき焦げた跡まである。

「間違えて悪戯でもしにきた餓鬼を殺さないようにするには一番の得物だな・・・」

自虐的に笑つて手にした銃を見て笑う要。誠も自分達の持つている銃に入っている弾が殺傷能力の低い弾丸を使用したものだと言うことを思い出した。

「とりあえず分かれたら危険だ。西園寺がポイントマン。クラウゼが後衛を頼む」

「だろうな・・・」

「了解つと!」

要が銃を構えてそのまま走り出す。誠とカウラはそれに続いた。

一階のかつては診察室だったらしい部屋の並ぶ廊下で要が足を止めた。そのまま一つ目のドアを指差し突入するべきかとカウラにハンドサインを送る。

頷くカウラ。それを見た要はそのまま半分朽ちた扉を蹴破つて中

に入っ
た。

「なにやってるのよ！」

「でけえ声出すんじゃないよ！」

「先に扉を蹴破って大きな音を立てたのは要ちゃんですよ！」

何も無い診察室の中に飛び込むとすぐさま喧嘩を始めるアイシャと要。カウラはこめかみに手を当てながらいつものように呆れて二人が口を閉じるのを待った。

「結構広いから大丈夫なんじゃないですか？」

『そんなわけ無いでしょ！』

アイシャと要がせっかく仲裁に入った誠を怒鳴りつける。落ち込む誠の肩を叩きながらカウラは部屋から外を眺めた。

「アタシの方が向いてるぜ、こういうことは」

そう言うつと要はカウラを押しつけて周りを見回した。彼女の目は闇夜には向いていた。眼球にはスターライトスコップが仕込まれていてもうすでに太陽が沈んで暗がりばかりになった廃病院の何も無い光景を見通すことができた。

「ラッキーだな。誰もいねえよ」

そう言うつとショットガンを構えながら走る要。誠達もその後が続

いた。物音は誠達の走る靴の音ばかり。ただひんやりとした空気を頬に感じながら誠は走った。

要が階段の手前で立ち止まると中腰で手で後続のカウラ達に止まるようにサインを出した。

「誰か・・・」

確認をしようと口を開いた誠の口元に要が指を差し出して制止する。そして指で上の階を指すと一人の人物がそこにいると言うハンドサインを出した。銃を握り締める誠。その不安そうな様子にニヤリと笑みを浮かべた後、要は静かに階段を登りはじめた。

誠にもしばらくして気配が感じられた。何かを探していると言うような雰囲気は頭の中を駆け巡る。

『水島勉の・・・法術発動かな・・・でもそれなら・・・』

考え事をしていた誠は階段の端にあった窓ガラスの破片を踏んで音を立ててしまった。

「誰だ！」

高めの男の声が響いたので誠達はそのまま声がしたあたりから見えないようにそのまま身を暗闇に沈ませた。

「まったく・・・桐野の旦那も困ったもんだぜ・・・」

悪態を付きながら声の主は遠ざかっていった。

「桐野の旦那？」

ささやくような声で誠が要に目を向ける。

「桐野・・・聞かねえ名前だな・・・」

曖昧に首を振る要。アイシャも難しい表情で黙り込んでいた。

「先ほどの声の声紋は取れたか？」

カウラの一言に驚いたように顔を上げたあとで黙り込む要。

「間違いねえ。あれは北川公平だ」

「すると・・・動いているのは『ギルド』？勘弁してよ・・・」

アイシャはそう言うと言首を振ってお手上げと言うように手を広げる。誠も彼女の放った『ギルド』と言う言葉に少しばかり恐怖を感じる。

じ始めていた。

遼南王朝の手足となって働く法術師集団。何度とない政変で今は王朝の支配を離れ、『太子』と呼ばれる長髪の大男に率いられていると言うテロ組織。近年は遼南のイスラム原理組織や外惑星のゲルパルトのネオナチ系の非合法組織と連携しての動きを水面下で見せているとして誠達もその監視を任務の一つとして与えられていた。

その『ギルド』でも『太子』直轄で動いている法術師の北川公平が動いている。その事実は自分達の独断専行と取られかねない出動が拙速だったことを知らしめるには十分な出来事だった。

「仕切りなおす？」

「馬鹿言っんじゃないよ……ここで逃げたらシャムに笑われんぞ」

「シャムちゃんはこういうときは笑わないと思うわよ」

「いちいちうるせえアマだなあ」

アイシャと要がごちゃごちゃと喧嘩を始める。黙って二人を見つめていたカウラだが覚悟を決めたと言うように顔を上げた。

要は静かに階段を登っていく。誠とカウラはその様子を見ながら静かに彼女が登りきるのを待っていた。

そのまま顔を出した要。そしてそのままついて来いというハンドサインを出す。誠、カウラはそのまま銃を手にゆっくりと階段を登った。

「アイツ等も水島とかいう奴を見失ってるみたいだな」

そう言うとき、要は静かに銃を小脇に抱えると腰の拳銃に手を伸ばした。

「やるのか？」

「丸腰とは思えねえからな。とりあえず確認しただけだ。ちゃんと入っているな……弾」

「要ちゃんらしくも無いわね。緊張してる？」

後から追いついたアイシャの言葉に力なく笑みを浮かべる要。状況としてはいつもの強気が要に無いのは誠にも理解できた。

「恐らく『ギルド』の連中以外にも水島をここに飛ばした法術師を擁する勢力の介入が予想されるわけだ」

「確かにそうなるだろうね……ネオナチ連中だと数で来るかも知れねえからな」

要の表情が再び曇る。そして誠と目があつた要は自分の弱気を悟られまいとそのまま北川が消えていった方向に眼を凝らす。

「実弾は・・・カウラちゃん持つてる？」

「スラグ、散弾ともに無しだ。場合によってはこちらでやるしかない」

今度はカウラが腰の拳銃を叩く。誠もさつと腰に手をやる。

「誠ちゃんは期待していないから良いわよ」

「すみません・・・」

謝る誠に笑顔で返すアイシャ。それを見て舌打ちした要はそのまま立ち上がって北川の歩いていった方に歩き始めた。

「無駄口はいい、進むぞ」

カウラの声に誠の顔から笑顔が消えた。次第に闇夜に沈む廃病院。要の目に内蔵された暗視機能と誠の法術師としてのサーチ能力に頼る前進。

北川の足音が次第に遠くなる。誠は要についていきながらただどこから飛び出てくるだろう第三勢力を想像しながらショットガンを構えながら進んでいった。

「何でこんなことに・・・なんでこんなことに・・・」

震えていた。水島はただ狭い書庫にしては大きすぎる棚の中で震えていた。

『おじさん・・・あなたに力があるからですよ。力がなければ誰もあなたなんかには目もくれない。でもあなたにはそれがあつた。そしてそれを使ってしまった。一度開いたパンドラの箱は二度と戻らないんですよ』

頭の中であざ笑うようにクリタ少年の声が響いた。だが水島には今は震えること以外はできるはずも無かった。

『ジョージは悪戯が過ぎましたね。合衆国はあなたにはいくつか保障したいことがあります』

クリタ少年とともにいた無口な少女らしい女性の声が脳内に響く。水島はただ静かに頷くしかなかった。

『あなたの身の安全。これは我々も守らなければならない義務が生まれる可能性があります・・・』

「可能性？この前部屋で話した話だけでいいんじゃないのか？」

叫びたくなるのを我慢しながら水島は小声でつぶやく。無表情なまま水島の言葉の意味を反芻しているだろう少女の顔を思い出すと水島の怒りは爆発しそうになった。

『あなたが我々に今後無条件で協力すると言う意思を示さない限りは我々にあなたの安全を守る義務は発生しません・・・忘れましたか？あなたはすでに一人の人物の命を奪っていることを』

少女の声。抑揚を殺している脳内に響く声に水島は自分を罰しようとしているような少女の表情を思い浮かべて苦笑した。

「確かに・・・それは事実だけど・・・不可抗力と言うか・・・」

『不可抗力？おじさんはストレス解消に放火や器物破損を繰り返してきた犯罪者なんだよ。それをすべて帳消しにしてあげるんだから・・・それなりに待遇が悪くなるのも我慢しなきゃ』

クリタ少年の言葉はその通りだった。それだけに水島は苦悩の表情を浮かべたまま戸棚の入り口にしがみつくと腕に力を込めるしかなかった。

「分かった！なんでもする！」

いつの間にか自分が叫んでいることに気づいて口を押さえる水島。彼の頭の中にも近辺を徘徊しているあの斬殺魔の存在は確認できていたので周りを見渡すが特に変わったところは無かった。

『それじゃあ・・・すぐ迎えに行くと言いたいんだけど・・・』

「なんだ？何かあるのか？」

『おじさんを襲った連中以外にも出てきたから・・・タイミングを計らないとね』

クリタの言葉に水島は絶望した。

「あの化け物以外にも出てきたのか・・・どこが？」

『決まっているじゃないか、警察だよ。4名の警察官が現在その建物に侵入している。下手に僕等が動けば射殺されても文句は言えないしね』

「射殺・・・？」

絶句する水島。警察が動いているだけでも後ろ暗い彼には厳しい言葉だと言つのにさらに射殺と言われて水島の体の緊張はさらに激しくなった。

『脅しなどはするものじゃないわよ。東都警察はそう簡単に犯人の射殺を行なう組織ではありませんわ。警察官に保護されてそれを私達が合法的に引き取ると言うやり方も・・・』

「止めてくれ！警察なんか・・・警察なんか・・・」

立ち上がるとそのまま薄暗い部屋を飛び出した。水島はその行動の意味を自分でもよく分からなかった。動けば殺される。そんな思いで扉の中に隠れていた自分。だが動き出したい衝動に駆られるとその本能のままに立ち上がり走り出していた。

『おいおい、おじさん大丈夫なのかな？』

楽しんでいるようなクリタ少年の声が頭の中で響く。だが水島はそのまま腐った鉄筋がむき出しの廊下の壁に沿って走り出す以外のことはできなかった。

「死んでたまるか・・・死んでたまるか・・・」

そうつぶやきながら階段を駆け下りたところで背後に気配を感じて水島は振り返った。

静かに北川に追尾する要。そして彼女に付き従う誠達。その行進は三階の開けたフロアーまで続いた。

「いい加減・・・出てきても良いんじゃないですか？」

北川の言葉に自分達の存在がばれたと思った要がショットガンの一撃を加えた。銀色に光る板のような干涉空間に殺傷能力の低い弾丸が中に入っている粉を振りまきながら飲み込まれた。

「消えた？」

要の言葉の通り北川の姿は干涉空間が消滅した時には消えていた。

「上です！西園寺さん！」

誠の叫びと同時に銃声が響く。要は右肩を抑えて銃を取り落とすた。

「西園寺さん！」

「来るな！他にもいるぞ」

要の叫び。次の瞬間には彼女の右腕が切り落とされて地面に転がった。

「どっ？どっ？」

アイシャが誠の背後で叫ぶ。誠は繰り返し発動する法術の気配を感じながら手にした銃を振り回していた。

「神前！銃はバットじゃない」

「分かってますけど！」

「がたがた抜かす前に銃を撃て！」

要は左手で無理に拳銃を取り出すと廊下を走って逃げていく北川の背中に三発の銃弾を発射した。

すべての弾丸が銀色の空間に消える。

「人斬りは！」

要が叫ぶ。アイシャが銃を構えていたがその銃が広がった銀色の空間から現れた刀に両断された。

「なによ！」

今度はアイシャが拳銃を握り締めて壁に張り付く。運良く要の向こうから銃撃してくる北川の弾丸がかつてアイシャのいた場所に着弾して煙を上げていた。

「西園寺！下がれ」

カウラの言葉で我を取り戻した要は切り落とされた自分の右腕をちらりと見た後そのままアイシャのいる壁際に後退してきた。

「とんでもねえ！ありや化け物だ」

ようやく北川の銃撃から逃れてきた要が吐き捨てるように叫ぶ。切り落とされた右腕の血は止まり。相変わらずひねくれたような笑みを浮かべながら北川が隠れていた物陰をにらみつける。

「西園寺さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫に見えるか？片腕切り落とされたら痛いぞ」

「それは分かるけど・・・」

腰の拳銃を取り出してけん制射撃をしながらアイシャがつぶやく。反撃がないことから北川がすでに移動していることはすぐに分かった。

「今からでも救援を呼ぶか？」

「なんだよ、救援呼んでなかったのか？頼むぜ隊長さん」

カウラを呆れたような顔で見るとすぐに立ち上がる要。

「片腕じゃショットガンは無理だな・・・神前、とりあえず弾だけ取っとけ」

そう言うつと要は落ちていたショットガンを拾った。そしてそのまま誠に銃を差し出す。誠とは呆れつつ、ショットガンから弾を抜い

てポケットに押し込んだ。

「他にも・・・いるからそっちを警戒しているのかしら？」

「まあそんな感じだな。アタシ等に出会ったのは想定外の事件のはずだ。さもないやリボルバーとダンビラで喧嘩を売ってくる意味がわからねえ」

要はそう言うとそのまま北川のいた物陰に銃を向ける。

「やはりそうね。となると・・・あの方々とどちらが先に水島さんに出会うかが勝負の分かれ目になりそうね」

笑みを浮かべて周りを警戒するアイシヤ。誠は緊張感に胃が痛くなるのを感じながら周りを見回す。

廃病院の壁には弾痕が見えた。

「こつちも茜クラスの使い手がいれば楽なのに・・・」

「西園寺さん、すみません」

「謝って済むなら少しは鍛えろ」

要はそう言うたとさらに上の階に向かう階段へと走っていった。

銃声が響くのを聞いて水島は廊下の腐ったタイルに張り付いて息を潜めていた。

「なんだ・・・何が起きてるんだ？」

『さつき説明しなかったかな？保安隊だよ』

相変わらずのんびりとしたクリタ少年の言葉が頭の中に響く。

「流れ弾で・・・勘弁してくれよ」

恐怖に震えながら一言。そんな水島の目の前に干涉空間が広がった。

現れたのはクリタ少年ではなかった。

「どうも・・・」

戦闘服に身を包んだサングラスの大男がそこに立っていた。

「立ってください」

男の体格にも似合わないか細い声に驚きながら水島は立ち上がった。戦闘服の男は手にしたアサルトライフルを何度か叩いた後ゆっくりと廊下を進んだ。

「離れないでくださいね」

まるで賓客を案内するかのような言葉に彼があまり日本語が得意ではないことに水島は気づいた。

「ご苦労様ですね」

「これも仕事ですから」

男はかけていたサングラスに手やりながら階下の様子を伺っている。

「銃撃戦になりますか？」

「どうでしょうか？」

めんどくさそうにそう吐き捨てるそのまま銃を構えて階段を下りていく。

「ミスター水島。法術の気配はありますか？」

「いえ・・・」

水島の言葉に少し不満そうにそのまま男は階段を静かに下りる。水島の足取りも釣られて忍び足に変わっていた。

「恐らく『ギルド』ですね。それに保安隊・・・難しい任務です」

「はあ」

淡々と話す大男の言葉を聞きながら水島は静かに四階の階段を下

りきつたところで身を伏せる大男に合わせてしゃがみこんだ。

「西園寺さん！」

誠の言葉に階段を登ろうとしていた要が振り返る。

「法術反応です。しかもこれまでのものとは違います！」

「動いたようだな・・・おそらく水島をここに飛ばした誰かだ」

カウラはそう言うとりあえず三階に向かう階段の踊り場で銃を手を上階を警戒している要の隣でしゃがみこんだ。

「第三勢力か・・・もしあのダンビルで切りつけてくるような連中が増えたらどうするよ」

タレ目で上官を見つめる要。カウラはしばらく沈黙した後口を開いた。

「その場合は一時撤収だな。私達の戦力ではどうにもできない」

カウラの言葉に遅れてきたアイシャも頷く。

「でも・・・」

「神前。オマエは数に入れてねえからな」

「西園寺さん・・・」

半分泣きながらの誠の言葉だが女性士官三人ははじめからそれが当たり前だと言うように上の階を警戒していた。

「第三勢力・・・戦力が気になるわね・・・」

「今のアタシ等でどうにかなる相手なら・・・北川達から引き離してそのまま捕縛といけるな」

要はそれだけ言つとそのまま階段を登り始めた。

「神様にでも祈ろつかしら」

アイシャが誠の背中を叩く。それに気がついて誠もカウラとともに要のあとに続く。

「気配がしねえ。赤外線反応なし。北川の奴は上に向かったか」

そう言いながら壁伝いに三階にたどり着いた要。それを確認するとカウラと誠もその後続いた。

「北川さんの拳銃は脅威にならないとしてももう一人の例の辻斬り。相手にするにはきついわよ」

アイシャの言葉に要は頷いた後そのまま四階に上がる階段に取り付いた。

「旦那・・・」

北川は膝を突いてじつと業物『関の孫六』を満足そうに眺めている桐野孫四郎に声をかけた。

「標的が増えたことか？結構な話じゃないか」

「旦那・・・」

諦めたような言葉が自然に北川の口から出てくる。それを無視して立ち上がる桐野。それはいつもの殺人狂のそれであり、ただ黙り込むしかできなかった。

「第三勢力か？別に気にすることはない。我々は敵であればそれを斬り捨てるまでだ」

桐野の言葉があまりにも予想通りだったので北川はため息をついた。

「そうも言えないんじゃないですか？今回の剣でこれまでの旦那の趣味がばれましたし・・・」

「それで貴様が困るのか？」

「困りますよ！旦那の活動に制約ができれば俺一人で動かなきゃならないことも増えてきますし・・・」

言葉を重ねるだけ北川はむなしくなってきた。自分の顔が割れているばかりでなく桐野の顔があちこちに貼りだされることになれば面倒を背負うのは自分だった。他の協力者はいないことはなかったがどれも桐野ほど切り札として使えるほどではない。

「まあ楽しもうじゃないか、今日は。物事はシンプルに考えるのが一番だぞ」

そう言いながら再び刀を見つめて悦に入る桐野にただため息をつくしかない北川。

「これからどうします？第三勢力の戦力が読めないのは確かですか」

「逆にそうでなくては困るな。弱いものいじめは性に合わない」

桐野の笑顔。北川は再び大きくため息をつく。拳銃のシリンダーを確認する。

「まあ旦那は好きに暴れてください。俺は俺でやりますから」

そう言うとそのまま階段を下りようとした北川だったが桐野の殺気に振り返った。

「そちらは避けるべきだな・・・」

「どうしてですか？」

突然らしくもない助言をする桐野に驚いた北川は顔を向けた。

「保安隊は・・・あの嵯峨の部隊だ。手を出して虎を怒らせる必要もあるまい」

「旦那が弱気なことを言うとは・・・」

北川は桐野の言葉に頷くとそのまま桐野に続いて廊下を歩くことにした。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 177

「おい、神前・・・ラッキーかもしれないぞ」

拳銃を手に振り返る要がニヤリと笑う。ただ誠はそれを見ながら首をかしげた。

「西園寺。ラッキーとはどういうことだ？」

首をひねるカウラにも要は勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「一瞬だがこの建物の四階で衛星通信をしている奴の反応が出た。恐らく水島が呼び寄せた使い魔はサイボーグだ」

「使い魔？ドラゴンとかじゃないから良かったとも言いたいの？」

アイシャがそう言いながら四階の気配を探っていた。

「軍用義体のサイボーグ。どこがラッキーなのよ」

つぶやくアイシャを見てさげすむように笑うと要は小走りに走り始めた。

「西園寺さん！」

誠が驚いて声をかけると要の胸が何かがぶち当たったように倒れた。そして同時に響く銃声。

「馬鹿が！」

カウラはそう言いながら銃を構えて走り出す。誠もまたそのまま彼女に続いた。

「痛てえ！」

「当たり前でしょ！這ってきなさいよ！」

アイシャが叫びつつ銃口の光を目印に銃を三発打ち込む。

『銃だ！銃だ！』

転がっていたベッドの残骸に向こう側から悲鳴が聞こえた。

「神前、西園寺を何とかしろ！」

カウラの言葉に誠は干涉空間を展開した。そしてそのまま床に転がってわめいている要に向かう。干涉空間に先ほどのベッドの後ろからの掃射が続けられた。

「済まねえ・・・しくじった！」

腹から血を流している要はそれだけ言つと動きを止めた。

「カウラさん！西園寺さんが！」

「馬鹿！脳内の血液損失を防ぐ為に仮死状態になったただけだ！さっさと引きずって来い！」

壁際で反撃を図るカウラの言葉に我に返った誠はそのまま要を引
きずり始めた。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 178

二発銃弾が誠の展開する干渉空間に吸収された時にベッドの裏の敵の動きが止まった。

『相手はベテランだ』

「西園寺さん！」

耳の通信端末から響く要の声に思わず手を止めた誠。

『馬鹿野郎！とつとと運べよ』

「早くしろ！北川達も銃声で動き出すぞ！」

壁際で叫ぶカウラ。誠は必死になって動くことの無い要の体を引きずって行く。

「いい様ね、要ちゃん」

『ぶつ殺す！後で・・・』

「威勢は良いのねえ・・・動けないくせに」

『やっぱりぶつ殺す』

動けない要の通信に背後を警戒していたアイシャが絡む。だがそこに背後からの銃弾が届いてきた。

「来ちゃったわよ！北川と例の人斬り」

ショットガンのけん制射撃で何とか時間を稼ごうとするアイシヤ。だが彼女の隣にあったパイプ椅子が半分になった時点で彼女の軽口も止まった。

「終りか・・・あつけないな」

カウラのつぶやき。それを聞いた時誠の中で何かがはじけた。

誠は立ち上がりまわりに干渉空間を展開する。

「誠ちゃん！死ぬ気？」

アイシヤの言葉は誠には届かなかった。階段付近からの北川の拳銃弾と奥のベッドからのライフルの銃弾が次々と銀色に輝く誠を覆う干渉空間に命中しては消える。

「神前・・・」

『誠？』

つぶやくカウラ。要は唯一自由の利くタレ目を誠に向けた。

『なんだありや？』

階段近くで北川が叫ぶ声が誠達にも聞こえてきた。

「なんだろう・・・あれ？」

誠は自分のしていることが今ひとつよく分からなかった。展開された干渉空間に手が自然と伸びる。そこには一振りの剣があった。

「鳥毛一文字・・・」

手に触れた瞬間に誠は確信した。そのまますると鞘から刀身を引き出す。

「神前！」

カウラの言葉を浴びて誠の周りの空間が飛び散った。両側から掃射が行なわれる。だが誠にはそれはぬるい攻撃に見えた。

『時が・・・ゆっくり流れるんだな』

空中を流れるように進む弾丸が見て取れる。誠はすばやく身を翻しそれを避けた。そしてそのままゆっくりとベッドの後ろに隠れているサイボーグに走り寄った。

恐怖の表情が米軍の軍服を着たサイボーグに浮かんでいるのが分かる。ゆっくりと振りかぶるライフル。だがその動きは誠にとってあまりに遅いものだった。誠の剣がサイボーグの顔面の暗視ゴーグルに突き立てられた。まるでケーキか何かにフォークを立てるような柔らかい感覚で刀が突き立てられる。

次の瞬間、サイボーグの顔面から血が勢いよく噴出した。隣では震えながら誠を見つめる水島の姿がある。

「水島勉・・・違法法術展開および殺人未遂容疑で逮捕する」

落ち着いての誠の一言。水島はただ腰を抜かして倒れていた。

「化け物・・・なんで・・・」

頭の中に何度が痛みを感じた。

「ここで僕的能力をハッキングしたらさらに公務執行妨害がつくぞ」

言い切った誠の言葉に水島は諦めたようにうなだれた。

「神前！応援が到着した！」

背後でカウラが叫んでいた。アイシャも満面の笑みで誠を見つめている。

「あちらも済んだのか・・・」

そうつぶやくと誠は不意に訪れた眠気に支配されて手にしていたサイボーグのチタン製の頭蓋骨に突き立てられた刀を杖にするようにして意識を失っていった。

「起きたか・・・」

廃病院の中庭の仮設ベッドの上で誠は目を覚ました。

「北川とかは？」

「逃げられちゃったわよ」

アイシャが心配そうに毛布に包まれた誠を眺めている。

「やはり・・・そう言えば西園寺さんは？」

「ああ、西園寺はそのまま義体の交換だそうだ」

「工場で修理。おもちゃみたいね」

カウラの声に誠は少しばかり安心して周りを眺めた。深夜の闇の中、煌煌と廃病院が照らされている。

「これで終わりですね」

「そうなのか？」

浮かない顔のカウラに誠は少し首をひねっていた。

「法術の可能性が示されたんだ。今回の件で確実に今までは任意だった法術適性検査が強制になるだろうな」

「そしてさらに不気味な能力が増えると言うことであちこちで憎しみ会う人間が増えるわけね。なんだか・・・人間と言うものは業が深いわね」

アイシャが力なく笑うのが見えた。誠はそれを見ながら上体を起こした。

「あと・・・僕が剣を呼んだのは？」

「呼んだのか？まあ・・・そうかもしれないな」

「それだけの力がオメエさんにはあるんだよ」

そこに突然現れた長身の男。カウラが敬礼していることからそれが保安隊隊長嵯峨惟基特務大佐であることが分かった。

「隊長・・・」

「いいよ寝ておけ。まあ・・・オメエさんが仕留めた義体だが。元アメリカ軍の兵隊さんだそうな」

「元？」

誠は口にタバコを加えてつぶやく。その言葉に誠は不思議そうに首をひねった。

「すると・・・水島を囲ってたのは・・・」

誠の言葉に苦々しげに嵯峨は頷いた。

「まあ大使館は無関係だと主張しているが恐らく米軍だな。ただしこちらとしても公にそのことを言うわけには行かないな。ベルルカの失敗国家で何件か選挙が行なわれているが・・・どこでもアメリカさんのお手を煩わせている。下手に外交問題にすれば痛い目を見るのは同盟だ」

それだけ言うと嵯峨はそのまま病院の建物へと歩き出した。

「そういう事。今回は要ちゃんとは正体不明のテロリストに蜂の巣にされたと言うことで終りよ」

誠にはアイシャの言葉が冷たく感じられた。ただし嵯峨の言うとおりこの惑星遼州の南方に浮かぶベルルカン大陸の混乱収拾が同盟には不可欠な政治上の問題であることは誠にもよく分かる。ただ分かるがあれほどに要を痛めつけた相手を正体不明の死体一つを残して解決しようとする嵯峨の言葉には納得できないでいた。

「不満か？」

突然頭の後ろから声をかけられてびっくりと誠は振り返った。

「ベルガー大尉・・・驚かせないでくださいよ」

「驚かせたつもりは無いがな。それと西園寺だがすでに義体の予備があつたそうだから再調整を二日くらいすれば原隊復帰ができるぞうだ」

「あの馬鹿みたいに高い義体に予備？さすがお姫様は違うわね」

アイシャがからかうように叫ぶ。もしこの場に要がいれば蹴りの二三発は飛んでいたと想像して誠が笑い始めたときだった。

『何がおかしいんだ？神前』

突然誠の右腕の携帯端末がしゃべりだした。そしてその声は明らかに要のものだった。

「西園寺さんですか？」

『他の誰が今の会話に突っ込みをいれるんだ？』

不機嫌そうな声に頭をかく誠。それを見てにやりと笑うアイシャ。カウラは面倒に関わるのはごめんだと言うようにそのまま近くのパトロールカーの回りに群がる捜査関係者の方へと歩き出してしまった。

「身動きとれずにじっとしている気分はどう？」

『アイシャ・・・あさつては覚えてろよ』

誠の端末から響く声に誠とアイシャは目を見合わせて笑っていた。

その日、誠は殺気を感じて目覚めた。時計は5時45分を指している。まだ起きるのに早い。事実寮のほかの部屋には動きのようなものは感じられなかった。

「眠れないか・・・」

一月半ばの寒気が全身を覆いつくしたのでそのまま誠は起き上がった。そしてそのまま部屋の端の棚に目を向ける。

「あさってだったよな」

その棚にはびっしりとアニメのヒロインのフィギュアが並んでいた。半分は誠が作ったものだったが入隊してからはあまり作ってはいなかった。

「そろそろ作ろうかな・・・」

「何を作るんだ？」

「うわ！」

背中からの女性の声に誠は棚に倒れそうになるのを上手くかわしてそのまま畳に転がった。

「西園寺さん！直ったんですか？」

「おうよ、修理完了だ・・・それにしても気持ち悪いなあ。人形

見つめてニヤニヤ笑いやがって」

「良いじゃないですか！それより何で今の時間に？」

そう言う誠だがすでにジャージに着替えて要の背中後ろに立つカウラとアイシャの落ち込んだ表情でなんとなく予想がついた。

「ランニングにでも？」

「そう言う事だ。豊川署にいる間はしてないだろ？たるんできてもうそろそろ自主的にやろうと言う気になるだろ？エース殿」

タレ目の端をさらにたらしにやける要。誠は大きくため息をついた。

「ごめんね誠ちゃん。止められなくて・・・」

「クラウゼさんいいですよ。着替えますから」

「え？」

聞こえない振りのアイシャにため息をつきながら誠は筆筒をあけてジャージを取り出した。

「じゃあ食堂で」

そう言つと要は居座る気が満々のアイシヤを引つ張つて部屋の外に消えた。

「なんだかなあ・・・」

寒さに震えながら着替える誠。そして先日的事件を思い出しながら着替えをした。

水島勉による連続違法法術発動事件は複雑な様相を呈し始めていた。東都でも保守系の野党が国民全員の法術適正検査の義務化の法案を提出。世論に押されて与党もその法案に対する対案として年齢を設定しての義務化の法案を検討していることがニュースの中心として取り上げられることになった。他にも法術適正者の氏名発表を望む意見や遺伝子検査で地球人以外のDNAが検出された人間の排斥を訴える月刊誌まで現れて世間は騒然としていた。

誠は着替えを済ませるとそんな世の中の動きと関係なく静かな冬の寮の廊下を歩き階段を下りる。なぜか食堂には多数の人の気配があつて彼を驚かせた。

「西園寺さん・・・なんで俺達まで」

入り口でジャージ姿で突っ立っている島田。隣の菰田もめんどくさそうにあくびをこらえていた。

「鍛え方が足りねえから鍛えてやろうつてんだ。感謝しろよ」

二人を眺めながら食堂の椅子にどっかりと腰を下ろしている要。奥からは早すぎる食事を作る音さえ聞こえてきていた。

「なんですか・・・寮の全員ですか？」

「これから忙しくなった時を考えたら当然だろ？法術がらみとなれば茜の法術特捜や東都警察の法術部隊じゃ遅すぎることは分かったんだから」

「でも要ちゃん。それと私達の早朝強制ランニングと何か関係があるわけ？」

アイシヤは相変わらず不満そうにつぶやく。隣のカウラは要がマメに非番の隊員までたたき起こしたことに呆れるように静かに番茶を啜っていた。

「なんでもそうだが体力が重要だぞ。今回の事件で分かったろ？」

「誰かはかませ犬になって蜂の巣にされたもんね」

「アイシヤ・・・死にたいか？そんなに・・・」

「苦しいわよ！要ちゃん！」

口答えをするアイシヤの首を握って振り回す要。その様子に苦笑いを浮かべながら厨房からこれもまたジャージ姿のヨハンが顔を覗かせた。

「簡単なものしかありませんけど。豆のスープと黒パン。そしてベ
ーコン」

「それだけありや十分だ。とつとと食うぞ」

要はそう言つと先頭に立つて朝食を乗せるトレーに手を伸ばした。

「朝食！」

さつと飛び上がりアイシャが要からトレーを奪う。そして何事も無かったようにお玉を手にしたヨハンの前に立った。

「デメエ・・・」

「ぼんやりしているからでしょ？この前だって簡単に片腕斬られて腹に銃弾を受けて・・・」

「オメエなら大丈夫とでも言うつもりか？」

「そこまで言うつもりは無いわよ・・・でも今現にこうしてトレーを奪われたわけだし」

アイシャの言葉に言葉をのむ要。その様子を見ながら笑顔のカウラが一番早くヨハン達から朝食をトレーに受けて一番手前のテーブルに着いた。

「カウラちゃん・・・」

「早く食べる。ランニングをするなら食べてしばらくは動かない方が良くない？」

平然と食を進めるカウラに要とアイシャは顔を見合わせると並んでいた島田達整備班員ににらみを利かせてそのまま割り込む。

「神前！オメエも早く食え」

要の言葉に苦笑いを浮かべると誠はそのまま列に並ばされた。

「でも・・・ランニングから帰ってから食事の方が良いんじゃないの、ホントは」

アイシャの何気ない言葉に要の頬がぴくりと震えた。

「考えてなかったみたいだな・・・」

「一応俺達は生身なんで・・・食べてすぐに運動すると腹痛を起すかも知れませんよ」

カウラと島田の言葉が呆然と立ち尽くす要に止めを刺した。

「うるせえ！それだとヨハンが食べ過ぎるだろ？」

「何で私のせいなんですか！」

責任を擦り付けられたヨハンが叫ぶ。それを見ながらアイシャは何事も無かったかのようにカウラの隣に座って食べ始める。

「早くしなさいよ。冷めちゃうわよ」

アイシャのちゃっかりした態度に切れそうになる要を見ながら誠も彼女の正面に座ってスープをすすることになった。

「予想通り・・・」

要の気まぐれに付き合わされた寮の住人はランニングから戻ると我慢していた腹痛に襲われて食堂に突っ伏していた。不死身の島田も顔色を青くしてテーブルに突っ伏せている。

「気合が足りねえな」

「気合の問題？」

平然として周りを見渡している要にアイシャが青い顔で突っ込みを入れた。

「単に自分の義体の慣らしに全員をつき合わせたかっただけだろ」

カウラの一言に少々焦りながら頭を掻く要を見ながら誠も苦笑いを浮かべていた。

「それより・・・面白い話があるんだが・・・」

「なによ要ちゃん。これ以上何か変なことがしたいわけ？」

面倒なことだと言うように顔をしかめるアイシャ。要は仕方が無いと言うように腕の端末を起動させ画面を表示させた。

「遼州同盟の人権機構？例の東和の法術師問題で何か動きがあったわけ？」

アイシャはよたよたと要の腕の上に展開された画面に目をやった。

「法術適正の強制化の件ですね」

「ああ、そんなことをやられたら遼南あたりは大激怒だと思ったが先に同盟本体が動き出したらしいや」

苦笑いの要。誠にとっても身近な問題だけに画面に目が行くのは自然な成り行きだった。

「なんですか・・・法術適性検査の強制化は著しい人権問題になるであろうと・・・」

「何言ってるんですかね、遼北や西モスレムじゃ強制じゃないですか」

「島田ちゃん。元々人権意識の薄い国の話をしてもむなしいだけよ」

島田の言葉に余裕のある突込みを入れるアイシャを見ながら誠の目は端末を起動させた要に向いた。

「で・・・どうなるんでしょうか？」

「色々あるってことさ。たぶんオマエのお袋も今回は年貢の納め時だってことだ」

「母が？なんで？」

ぼけっとしている誠に要は大きくため息をついた。

「誠ちゃんが明らかに進んだ法術師である以上、その両親が法術適正があると考えるのが普通でしょ？」

「あ・・・」

アイシャに指摘されて誠はようやく要の意図に気づいた。

「身近にいと気になるよねえ」

アイシャの言葉に誠も頷く。恐らく母は法術適正がある。誠もなんとなくそう思っていた。

「国が割れる事態になれば・・・『官派の乱』の胡州の再現か？」

「そうはならんだろ。東和は一応シビリアンコントロールができてる国だ。保守派が叫んでも軍は動かねえよ」

カウラと要。別の話題を口にしながらもその目は誠を見つめていた。

「どうなりますかね？」

「私に振らないでよ」

誠の言葉にアイシャが苦笑いで答える。その様子がおかしいのか島田が噴出していた。

「はいはい！まもなく出勤の時間ですよ！」

叫んだのは食堂に闖入してきたサラだった。その隣にはため息をついているパーラがいる。

「アイシャさんに呼び出されたんですか？」

「まあね。パーラに頼んで送ってきてもらったの」

サラの言葉にパーラが引きつった笑いで頷いた。恐らく早朝にアイシャからの電話で無理やり起こされてサラを家まで車で迎えに行ったパーラの苦労を想像すると誠も本当に彼女が不憫に思えてきた。

突然の言葉だが寮の主である島田とつきあっているサラの言葉に腹痛に唸りながらも隊員達はそれぞれに出勤の準備の為に食堂を後にしていく。

「それにしても・・・なんだか浮かない顔じゃない」

サラは島田のジャージの襟をいじりながら誠達を眺めた。

「まあ・・・食後すぐに運動させた誰かさんのおかげだね」

「しつこいぞ、アイシャ」

ばつが悪そうにつぶやく要にカウラが大きくため息をつく。

「それにしても・・・アイシャの頼みで吉田さんに調べてもらったんだけど・・・」

そう言つとサラが一枚のチップをポケットから取り出した。

「吉田に？何を？」

啞然とする要を横目に笑顔のアイシャはチップを受け取るとそのまま食堂の外へと消えた。

「隊長が動いているんじゃないか？」

「叔父貴が？」

カウラの言葉に要は首をひねった。確かに法術師の存在が社会問題になることを一番恐れているのはその存在を知らしめる戦いをして見せた嵯峨その人なのは間違いないかった。そして今でも遼州帝国皇帝の地位の放棄を認められない嵯峨の一言に大きな重みがあるのは事実だった。

「政治家に働きかけるとか・・・」

「それならなんで吉田からデータをあの女が手に入れる必要があるんだ？」

要の言葉に誠は反論できなかった。確かに吉田は超人クラスのハッカーだった。だがそのデータが一巡洋艦の副長に過ぎないアイシヤにもたらされる意味はまるで想像がつかなかった。

「とりあえず後でそれとなく聞いてみるか」

そう言つとカウラが立ち上がる。

「聞くんですか？」

「着替えるだけだ」

誠の言葉にそっけなく答えるとカウラも食堂を出て行った。

「この寒さで汗もかかない癖にな・・・」

要はそう言つと伸びをしてそのまま食堂の出口に向かう。

「遅刻するぞ」

「はい！」

振り返つての一言に誠も気がついてそのまま食堂を飛び出した。

「なんだか・・・大きな話になってきたな」

階段を駆け下りる隊員達とすれ違いながら誠はそのまま自分の部屋に飛び込んだ。すぐにジャージを脱いでＴシャツとジーンズ、ジャンパーに身を包んで部屋を飛び出す。

階段を駆け下りて玄関に向かうと誠の前にすでに着替えを済ませたカウラと要が立っていた。

「それじゃあ行くぞ」

「え？アイシヤさんは？」

「アイツはパーラの車で先に出た」

それだけ言つと実に普通に靴を履くカウラ。要も気にならないというようにブーツに手を伸ばした。

「そうですか・・・」

釈然としない誠は彼女達に付き合うようにスニーカーを履いて立ち上がった。

「おかしいな・・・」

先に男子更衣室でつなぎに着替えた島田は入ってきた誠にそうつぶやいた。

「何がですか？」

とりあえず自分のロッカーから勤務服を取り出しながらこたえる誠。それをじろじろと主計下士官の徽章を直しながら見つめる菰田。

「分からないのか？すでに運行部の女の子達が全員来てるんだぞ」

「ああ、あの人は遅刻の常習犯ですからね・・・」

誠も菰田にそう言われると異常に気がついた。そして朝の吉田から保安隊運用艦である『高雄』の副長のアイシャにデータが届いたことを思い出していた。

「そう言えば吉田さんからクラウドセ少佐にデータが渡ってましたけど・・・」

「なんだよ、それを早く言えよ。・・・何か特別任務かね」

ロッカーの奥の丸椅子に腰掛けた島田が腕組みをして難しい顔で誠をにらみつけている。にらまれて怯みながらワイシャツに袖を通していた誠の後ろのドアが突然開いた。

「遅くなりました！」

入ってきたのは第三小隊のルーキーであるアン・ナン・パク軍曹だった。突然の出来事に島田が椅子からずり落ちる。

「突然でかい声を出すんじゃないよ！」

「すみません……」

しなを作るアン。菰田が苦虫を噛み潰したような表情で隣のロッカーに手を伸ばすアンを避ける。

「でも運行部の隊員が早出……読めないな」

「読めないな」

いつもは犬猿の仲の島田と菰田が腕組みをして思案にふけっている様は少しばかり滑稽で誠は笑いをこらえるのに必死だった。

「なんか一階であるみたいですね」

何気なくアンが上着を脱ぎながら言った言葉に二人はアンへ詰め寄った。

「島田さん……そんな……僕には心に決めた人が……」

「そんな話は良いんだ！何を見てきた？何かあったのか？」

頬を染めるアンの言葉を見無視してじりじりと島田の顔がアンに近づく。そしてその心に決めた人がたぶん自分だと想像した誠は好奇

心と恐怖の感情が入り乱れるなかじつとアンの言葉に耳を済ませていた。

「何がって・・・」

ためらうアン。その言葉がいつものやけに色気があるものだったので島田も菰田も諦めたようにため息をついた。

「おい！このぼんくらども！」

要の叫びと同時に更衣室のドアを蹴り上げる音が響いた。

「壊さないでくださいよ！」

なんとか島田が叫ぶと外でささやきあう声が響いていた。

「西園寺さんが・・・俺達に用・・・何事なんだ？本当に」

菰田が目をアンに向ける。だがアンは相変わらず熱い視線を誠に向けるばかり。室内の男性隊員にはただ不思議な現象が起きていると言ふ事実しか知ることではできなかった。

「誠ちゃん！早くしなさいよ！」

今度はアイシャの声だった。注目の運行部のナンバー2の登場にさらに誠達は混乱した。

「じゃあ、俺が出るわ」

覚悟を決めたと言うように島田が扉を開く。そこには再び扉を蹴

り上げようと右足を準備していた要が立っていた。

「痛え！」

思い切り要に弁慶の泣き所を蹴り上げられた島田が痛みのあまり倒れこむと転がりまわる。

「大丈夫か？」

「ベルガー大尉・・・大丈夫に見えますか？」

カウラに手を借りて立ち上がりながらも顔をしかめている島田。自分じゃなくて良かったと言つような表情を浮かべている菰田がアイシャの手にクラッカーが握られているのに気がついた。

「何かめでたいんですか？」

「菰田ちゃん・・・実はカウラが菰田ちゃんのことを・・・」

「くだらないことは止める。子供ができたんだ」

「え？菰田とベルガー大尉との子供？」

島田は痛みに思考回路を停止させながら搾り出すように言葉を口にした。あまりに突拍子も無い島田の言葉に今度は要が腹を抱えて笑い出した。

「菰田！良かったな！一人前の男になれて！」

「西園寺さん！何言っているんですか！」

顔を真っ赤にする菰田。隣で理解できずに固まっているカウラを見て今度は菰田の顔が青く染まった。

「本当にもう・・・要ちゃんたら。赤ちゃんができたのはカウラちゃんじゃなくて！お姉さんよ」

アイシャの言葉でようやく誠も事態が理解できた。

保安隊運行部。部隊を運用する巡洋艦『高雄』の艦長鈴木リアナ中佐は数少ない部隊の既婚者だった。穏やかな性格で刺々しいほかの女性部隊指揮官達が『姐御』扱いされている中で彼女は『お姉さん』と呼ばれて親しまれていた。

「知っちゃうと普通ですね」

「だな」

「なに？誠ちゃんに島田君。つまらなそうじゃない」

アイシャに言い寄られて苦笑いを浮かべる二人。それを見るとアイシャは二人にクラッカーを持たせた。いつの間にか来ていたサラやパーラもアンや菰田にクラッカーを渡す。

「もうそろそろ来るから。これでパーンてやるのよ」

サラの言葉に誠と島田は顔を見合わせた。

「来る？挨拶に行くんじゃない？」

「狭い部屋に入られても迷惑でしょ？それなら部隊をぐるりと回ってお祝いした方が良くないじゃない」

「まあ・・・そうですね」

なんとも狐につままれたような表情で納得してみせる島田。誠も仕方が無いと言うように廊下に並んでいた。目の前の医務室には医務間のドム大尉が運行部の黄色い髪の下士官からクラッカーを受け取って階段を上がってくるリアナに向けてクラッカーを鳴らした。

「おめでとう！」

ドムの言葉に合わせるように誠達もクラッカーを鳴らす。白い長い髪のリアナが手を振りながらそれに答えた。

「おめでとうさん」

なぜか関西弁で言うと言も遅れてクラッカーを鳴らした。

「みんな！有難う！」

純粹無垢な表情で手を振るリアナ。SP気取りのシャムが彼女の
前で手を振る隊員に目を光らせている。

「なんでシャムが？」

「吉田君から頼まれたんでしょ？お姉さんが喜びすぎて無理しない
ようにそして・・・」

アイシャの言葉が終わらない時にすでにリアナは手にマイクを握
っていた。

「皆さんのおかげでここまで来ました・・・私は・・・私は・・・」

「

「お姉さん！演歌禁止！」

早速シャムがリアナからマイクを取り上げた。

「なんで？シャムちゃん！」

「おなかの赤ちゃんがかわいそうでしょ？」

シャムに言われてしばらく理解できないというように首をかしげ
るリアナ。誠もリアナの電波演歌の被害を体験したことがあるので
胸をなでおろした。

「胎教・・・どうなると思う？」

「要ちゃん・・・私に聞かないでよ」

要の問いに半分やけになって答えるアイシャ。リアナはシャムからマイクを取り上げられて少ししよげながら廊下を隊長室へと歩いていた。

「おめでたいな」

「なに？カウラちゃんが言うのと皮肉みたい」

「別にそんなつもりは無いがな。私も興味深い出来事だと思うよ」

「硬いねえ・・・もう少し柔らかく物事考えなきゃ」

不器用に笑うカウラに要が呆れたような視線を送る。

「それじゃあ・・・私は色々あるから」

「サボるなよ」

アイシャは要にチャカされながら階段を駆け下りていく。要とカウラは安心したように深呼吸をした。

「それじゃあ詰め所に行くぞ」

そう言うときカウラは更衣室で着替え途中の誠に一言言ったりリアナ達の行列に付き合っただけ廊下を実働部隊の詰め所へと歩いていった。

「隊長！」

「おう！おめつとさん！」

リアナが隊長室に入るとにこやかに嵯峨は彼女を迎え入れた。隣には笑顔の明華が、その隣の小さなランはまるで子供の手のような両手で大きく拍手をしていた。

「この部屋は空気が悪いから・・・窓を開けるか？」

「厳しいねえ・・・マリアは」

窓に向かう金髪瘦身のマリアを隊長の椅子に座ったまま苦笑いで嵯峨は見つめていた。

「それより兄さん。リアナさんが抜けるとなると・・・」

背広の小男が嵯峨を兄と呼びながら難しい顔でリアナを見ていた。

「高梨さん。すぐに休むわけじゃないですから」

「でも鈴木中佐。お体が第一ですよ」

「そうだな。アイシャの馬鹿も使えるようになってきたんだ。楽したってバチはあたらねーと思うぞ」

嵯峨の弟で管理部部長の高梨渉と部隊副長のクバルカ・ランの言

葉にリアナが微笑みで返した。その時部屋の扉をノックする音が響いた。

「開いてるぜ！」

めんどくさそうに叫ぶ嵯峨の言葉を聞くと扉が開いた。そこには噂のアイシャの他に要とカウラ、そして誠が神妙な表情で立っていた。

「遠くにいても始まらねえよ！こっち来い！」

入り口で黙って歩哨の真似事をしているシャムと吉田を白い目で見ながら誠達は部屋に通された。

「お疲れ様だね。例の犯人の身柄の確保。よくやったと言えるなあ」

「室内戦闘の訓練が必要な感じだな」

嵯峨の言葉に警備部部长として室内戦闘などの訓練の指揮を担当しているマリアの厳しい言葉が飛んだ。

「はあ、申し訳ありません」

片腕を落とされ腹に七発の銃弾を受けて義体を駄目にした要が渋々頭を下げた。

「それにしてもアイシャ。行けるか？」

「隊長の指示なら」

「指示よりもオマエさんのやる気が重要だ。行けるか？」

嵯峨の言葉に部屋の中の人々の視線がアイシャに集中する。アイシャは照れたように自分の頬を右手でつつきながら嵯峨を見つめていた。

「できる限りがんばります」

「まあいい返事だ。できないことはやっぱりできないからな」

アイシャの答えに満足したように嵯峨が笑う。それを見てリアナは手を叩いた。

「それじゃあお祝いしないとー！」

「酒抜きでな」

「えー！」

マリアの『酒抜き』の一言に要が思わず叫んでいた。

「あのねえ、要ちゃん。リアナお姉さんのお腹には赤ちゃんがいるの。分かる？」

「だからってアタシ等まで酒禁止なのか？」

不満そうに周りを見る要。だが誰一人として助け舟を出す様子は無かった。

「主賓が飲めないのに祝う側の人間が飲んでたら意味ねーだろう？そのくらい分かれよ」

子供のような体に似合わず酒飲みのランに言われて要がうなだれた。

「それは良いとして・・・シヤム！」

衛兵の真似をしているシヤムに声をかける嵯峨。声をかけられてすぐにシヤムはドアを開けて飛び出す。そしてそんな彼女の相棒である吉田もあとに続いた。

「バーベキューの準備ですか？でも寒いですよ」

誠の言葉に嵯峨は苦笑いを浮かべる。

「一応うちでのしきたりみたいなものだ。リアナには毛布でもかけておけば良いだろう？」

「ええ、にぎやかなのは赤ちゃんも喜びますよ」

そんなリアナの一言に場は一気に和やかなものへと戻り始めた。

「ああ、ついでにお前等！」

「アタシ？」

嵯峨の声に振り返る要。きょんとしているアイシャも思わず嵯峨に目をやる。

「とんでもない化け物がいたらしいじゃねえか・・・桐野だろ？」

何気なく言ってみせる嵯峨だがその目は先ほどと違い光をはらんでいた。

「叔父貴のかつての部下だろ？調べたよ」

「知ってるか・・・」

「部下？調べたって・・・」

要のタレ目がしつかりと嵯峨を見ているのを見てアイシャは戸惑うようにつぶやく。

「前の大戦で胡州幼年挺身隊の隊長として俺の下にいたんだよ、アイツは。そこで俺に能力を見出されたのは良いが・・・」

「そのまま人殺しが趣味にでもなっただんですか？」

「ベルガーは鋭いねえ。今は例の『ギルド』に属して荒事を専門に

仕切っているそうさ。例の北川とか言う法術師がお守りでついているらしい」

「まるで知ってたみてえな口ぶりだな。叔父貴よ」

要に突かれるとそのまま背を向けて外を向く嵯峨。それをみて要は嫌味のように敬礼するとそのまま部屋を出ようとした。

「私達もお手伝いしていいかしら？」

「お姉さんは・・・賓客じゃないの」

アイシャの言葉に首を振りながらランとマリアに目をやるリアナ。仕方が無いと言うように二人はそのままリアナに釣られて廊下に出た。

「隊長も難しい立場なんだから。分かってあげないと」

リアナはそう言うとそのまま笑顔でクラッカーを鳴らす実働部隊や管理部員の輪の中へと飛び込んでいった。

「やっぱりかなわねえや」

要はそう言うとそのあとに続いた。

「でも・・・良いんですか？」

「いつもいつも・・・水ばつか差しやがって！水差し野郎！」

誠の言葉に要はすばやく反応するとそのまま首にまわりついてそのままヘッドロックを決めた。

「苦しい・・・」

「しょうがないじゃないの。前から言っているようにこの法術の力。存在自体がタブーみたいなもののふたを開けちゃったんだから・・・ある程度の摩擦は覚悟しないと」

「ほう、クラウゼが珍しいな。正論だな」

「カウラちゃん。珍しいとは心外ね」

ニヤニヤ笑いながらのアイシャとカウラの言葉を聞きながらようやく首を万力のような要の腕から開放されて息をつく誠。やってきたハンガーに張り出した階段から階下を覗いた。

整備班員が大漁旗を振り回しながら万歳を続けている。その中心にはライトブルーと言うより白に近い色の髪のリアナの笑顔が揺れていた。

「まあ・・・あれだ。難しいことは後で考える。それで駄目なら叔父貴に押し付ける。それがうちの流儀だからな。気にせず楽しめば

いいんだよ」

「ずいぶんとまあ・・・お気楽なのね」

「アイシヤに言われる筋合いはねえよ」

じゃれながらも要もアイシヤも笑顔だった。横を見ればライトグリーンポニーテールを開かれたハンガーの扉から吹いてくる北風になびかせながら笑顔を浮かべるカウラがいた。

「寒いですね」

「そりゃ冬だからな。まあいいや、とりあえずシャムのところに行つてジュースをあるだけ持って来い。足りなかったら買出しに行くから。パーラの車で行けば結構詰めるからな」

「仕切るわね。要ちゃん」

「別に仕切っているわけじゃねえよ」

相変わらず口だけの要にせかされて誠は階段を駆け下りる。

「神前君！よろしくね！」

リアナが手を振るのを見ながら誠は笑顔でシャムが溜め込んでいるジュースのある一階の食堂に向かう。

すべてはことも無く平和である。そんな当たり前の日々が帰ってきたことに誠は満足しながら走り始めた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6056j/>

遼州戦記 保安隊日乗 6

2010年10月17日09時26分発行